
東方傀儡異聞 3 ～神坂越えて迎る面影～

碓井央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方傀儡異聞3 神坂越えて辿る面影

【Nコード】

N9893R

【作者名】

碓井央

【あらすじ】

幻想郷の巫女、博麗霊夢の身に迷いこんできた魂は霊夢そっくりの人形という器を得て、チビ霊夢という名を得て博麗神社の居候として過ごしつつ、自分がどこから来た何者かについて探っていた。だが、いまだ答えを得ずにいた。その一方で、一緒に暮らしている霊夢との心の距離が縮まっていくことにある種の葛藤を感じ始めてもいた……

この小説はシリーズ物で、

東方傀儡異聞 (<http://ncode.syosetu.com/n5066k/>)、
東方傀儡異聞 2 (<http://ncode.syosetu.com/n9558k/>)

の続編にあたります。まだお読みでない方はそちらから読んでいただくことをおすすめします。

その1

東方傀儡異聞？～神坂越えて辿る面影～

碓井央

—

部屋の中は薄暗かった。が、雨戸の隙間から洩れ出る光が障子に薄く映り、すでに日の出を過ぎていることを告げている。

「起きたの？」

隣で寝ている霊夢が身動きしないまま、問いかけてくる。

『ああ』

私たちはたいてい同時に目が覚める。仕組みは分からないが、おそらく霊夢の身体が発する霊気がこの人形……もしくはそれに宿っている私自身の何かを刺激するのだろう。

霊夢は寝返りを打って私の方に顔を向ける。その顔つきがなんとなくいつもと違っていているように感じた。どう言えばいいのか……穏やかというよりは静かな顔というべきか。

『どうした？』

「……なんかね、妙な夢を見たような気がするの。夢そのものを覚えてるわけじゃないんだけどね。誰かに名前を呼ばれていたような、そんな気がするの」

『名前をか。しかし、妙だというほどじゃないだろう。夢ならよくありそうじゃないか』

「それがね、わたしが呼ばれてるんだけど、その名前は霊夢じゃないのよ」

『……………』

「何か別の……女の子の名前。その名前のついたわたしを誰かが呼んでいるの」

『そうか』

例によって、もう少しで何かが浮かび上がってきそうなのに出てこないような、軽い焦燥を感じた。

「もしかして、何か心当たりある？」

『いや……でも少し気になる話ではあるな』

「まあ、霊夢なんて所詮は仮の名前だからね」

私は驚いて思わず身体を起こした。

『じゃあ、別の本当の名前があるのか？』

「そうじゃないけど。ただ、はっきりしているのはこの名前は親がつけた名前じゃないってことよ」

『……………』

「前はね、霊夢って呼ばれても自分のことだっという気がしなかったものよ。だからぼんやりしてるだとかつかみどころがない奴だっって言われたりもしたの」

『誰がつけた名前かも分からないのか？』

「…………これを人に言うとはびっくりされるからあんまり言わなくなっただけど、わたし、八つか九つか…………それぐらいから前のことってあんまり憶えがないの。だから、先代の博麗の巫女が誰かも知らない。気がついてみたらわたしはここに一人で住んでいて、何か知らないうちに巫女だっということになってた。そういう意味じゃ、あなたほどじゃないけど、自分の正体がよく分からないっていう気分は実はわたしにもあるのよ」

『そうだったのか…………』

まったく想像だにしていなかった話だ。

『しかし、今はどうなんだ』

「どうって、何が」

『前は自分の名前だっという気がしなかったって言っていたじゃないか』

「ああ……そういうこと。そうね、近頃は名前を呼ばれることが多くなったしね、誰かのせいで。ちゃんと自分が呼ばれてるんだって感じるわよ」

『それは良かった』

私は布団から出た。そして、同じように布団から起き上がって大きく伸びをした霊夢に言った。

『おはよう、霊夢』

「おはよう、チビ」

私を抱き上げて見せたその笑顔は、すでにいつもの霊夢のものだった。

くその2へ続くく

その2

二

昼までには帰ってくる、と言って里に出かけていった霊夢を見送ったあと、私は縁側に座って庭を眺めていた。すでに立冬を過ぎ、周りには葉を落とし終えた木々が寒々しく枝を拡げている。遠くに見える山々も一部の常緑樹の林の他はひどく寂しい色合いに変わってきていた。

無縁塚での一件からはひと月近くが経っている。だが、「自分が何者か」に関しては正直なところあまり進展はなかった。

ただ、比較的最近幻想郷にやって来たという守矢神社の面々に挨拶に行ったときには、前から疑問に思っていた点についてひとつ確かめることができた。それは、外の世界の人々は幻想郷の存在について何か知っているのだろうかということだ。

神社の巫女であり現人神でもあるという東風谷早苗さんは、少なくとも彼女の知る範囲ではこのような世界があると知っている人間はいないと断言していた。外の世界には高速のデータ通信によって情報を共有する仕組みが世界的な規模であり、ありとあらゆるタイプの情報で溢れかえっているという。だが、この幻想郷のような世界について語っている情報は見たことがないそうだ。

この点については、外から来て人里に住み着いているいわゆる「外来人」たちにも話を訊くことができた。だが、彼らに共通してい

たのは、幻想郷のことを予め知っていた上でやって来たわけではないという点だった。結界を超えたその理由は彼ら自身にもよく分らず、前後の状況もきちんと覚えてはいない。ただ、何か説明のしようがない異様な精神状態になっていたような気がする、と言っていた人もいた。

外来人の中にはふたたび結界の外に戻った者もわずかだがいる。だが、彼らは幻想郷について語ることはなかったか、あるいは語ったとしてもまともには受け容れられなかった……そう考えるしかないようだ。

いずれにしても、幻想郷の中身について知った上で来ている者はいない。だとしたら、いちばん最初の時、私はなぜ霊夢の身体に「憑く」ことになったのか。

霊夢自身も言っていたが、この神社の建物は、霊夢自身の中にいる状態だとよほど格の高い妖怪でない限り簡単には侵入できない仕組みになっているらしい。まして通常の魂魄のたぐいは簡単に遮られてしまうという。その障壁を破って来た以上、特別な理由があるとは思えないというのが霊夢の意見だった。やはり「以前の私」が何らかの形で霊夢のことを知っていたと考えるべきなのだろうか？

この矛盾そのものに、何か私の正体に関する鍵があるような気がしてならない……。

「おうい……？」

顔を上げると、目の前に鮮やかな青い服に身を包み背に鈍い輝きを放つ透明な羽を広げた妖精が立っていた。両手になにか握っているように見える。

『やあ、チルノか。久しぶりだな、元気だったか?』

「ああ、うん。まあ、あたいはいつもあんまり変わんないよ」

ぶっきらぼうな感じの言い方だったが、表情はすこし嬉しそうに見えた。

「今日は巫女は出かけてるのかい?」

『里に行ってるよ。霊夢に何か用事かい?』

「べつに巫女には用はないよ。あ、いや、巫女がいちやまずいとかそういうことじゃないんだけど……」

『まあ、そこに座ったらどうだ』

「うん……あ、それでさ。あんたにちょっと訊きたいことがあったんだよ」

『なんだ?』

「これさ……」

チルノは握っていた手を広げて見せた。その上には小石ぐらいの大きさになっているさまざまな色のガラスがあった。破片ではなく、不規則な形ではあるが表面はなめらかになっている。

「これ、湖に流れ込んでる川のところで見つけたんだけど……普通の石と違うんだよね。透けてて氷みたいなのに、色がついてるし、

溶けない」

なるほど、氷に似ているから興味を持ったのかもしれない。

『これはガラスだよ。建物の窓を見たことがあるか？ あれも透明で硬い板ガラスが使われてるが、中身は同じようなものだ』

「そっか……でも、それはヒトが自分たちのために作った物だろう？　なんで川の中でこんな形になってるんだ」

『たぶんガラスの瓶とかが細かく割れて川の中を転がっているうちに他の石と削り合ってこういう形になったんだな。ちよつといいか？』

私はチルノの手のひらからいくつか手にとってみた。

独特の薄緑色のはコーラの瓶かもしれない。茶色のはビール瓶だろう。私は飲み物に使われるガラス瓶について、チルノに説明した。

「でも幻想郷じゃそういう飲み物とかつて聞いたことないけど」

『まあこのあたりにはないだろう。ただ、外の世界ではガラス瓶はすたれつつあるから、結界を越えて流れ着きやすいのかもな』

「ふうん……」

『それにしてもずいぶんたくさん拾ってきたんだな。せつかくだからちよつと並べてみようじゃないか』

「うん！」

チルノは嬉々として縁側にガラス石を並べ始めた。それを順に数えてみる。

『二十一、二十二……全部で二十三あるな』

「なんだ、そのニジユウサンって？」

『えっ？ ああ、数のことだよ。そうだな……数というのはモノがどれだけあるかってことにつける名前なんだ』

「……？」

チルノは首を傾げる。

『たくさんとかすこしって言い方だとなかなか区別がつけにくいだろう。たくさんっていつでも、いろいろある。弾幕だって自分の周り全部に広がるような弾幕もあれば、自分と敵の間だけの弾幕もある。それは全然違うものだけど、たくさんって言い方じゃ違いが分からない』

「うん、それは分かる」

『例えばだ』

私は縁側に並べられた石を三つ、別の位置に移動した。ちょうどおはじきみたいな感じなので数の概念を説明するにはちょうどいい。

『これがひとつ……そしてふたつ……みっつ。つまり石がどれだけ

あるかってことに順々に名前をつけていくんだ』

「でもそれってものすごくたくさん名前が要るんじゃないか？」

『そうだ。だからヒトは名前をいくらでもたくさん付けられるような仕組みを作ったんだ……それはね』

私は順に数の名前について説明し、さらに位取りに関する話も『名前』のつけ方という形で説明した。驚いたことに、チルノはその意味をきちんと理解した上に、足し算を先取りして理解した。

「じゃあ、たとえば『みつ』と『よつ』っていう名前で分けて呼んでいたものを……」

チルノは三つと四つに分かれていた石を手でまとめた。

「こうやって全部合わせて『ななつ』っていう名前で呼べるんだな？」

『その通りだ！　すごいぞ、チルノ。足し算のことまで分かってくれたんだな』

私は思わずチルノの頭を撫でてしまった。

「そんな……おおげさだ」

『いやいや、本当に素晴らしいよ』

「まあ、言わせてもらつともうひとり素晴らしい人物がいるがな」

『えっ？』

一瞬意表をつかれたが、すぐに違う声だと気づいた。チルノと一緒に becoming 石並べに夢中になっていたので、気配を感じ取れなかったのだ。

洗いざらしの白いシャツにサスペンダーで吊った朱色のズボンを
はいた長い銀髪の少女、藤原妹紅がゆったりとした足取りでやって
きて笑みを浮かべた。

「ちよつとご無沙汰だったな、チビ。ところで、ひとつ思いついた
ことがあるんだが」

『いくらなんでも無理があるだろう』

私は妹紅に手を横に振ってみせた。

『人にものを教えるというのは簡単なことじゃない』

「しかし、さつきそのチルノに算術の基礎を教えていたじゃないか。
あれは十分に教師と生徒のやりとりに見えた」

縁側に腰を落ち着けた妹紅は自分で淹れた出涸らしのお茶を湯呑
みからすする。その様子を、私をはさんで少し離れた位置に座って
いるチルノは多少警戒感のこもった目付きで眺めている。

「正直なところ、教師としての能力は慧音より上じゃないかとさえ思った」

『そんなことを言ったら慧音さんが怒るぞ』

「いや、慧音自身も言ってるんだ。他人に教えるのは得手じゃない、特に小さい子供たちに物事を伝えるのはなかなか難しいと……それに」

妹紅は指を立てる。

「いわゆる自然の理に関わる学問については頭の中に引き出しがほとんどないそうだ。工夫しないと寺子屋で教えることが偏ったままになる。かといって、その方面に詳しい者はむしろ妖怪に多い……だから、その手のことに協力してくれそうな妖怪がいたら仲立ちを霊夢に頼んでみようかと思って来たわけさ。だが、もう有力な候補を見つけた」

『それが私だと？ 買いかぶりだな』

「しかしな、チビ。わたしはさっきの様子を見ていて、お前さんがずいぶん楽しそうだなと感じたんだ。たとえ顔に出なくても、そういうのは分かるものさ」

『……………』

「自分が楽しいと感じることを進んでやっていれば、忘れていた自分そのものを見つける近道になるかもしれないぞ」

確かにそれは説得力のある言葉ではある。しかし、人里にただひとつしか無い寺子屋の教師を務めるといふのは手伝い程度であつても責任が重い。

すると、チルノがぽつりと言う。

「きっと、巫女も嬉しいんじゃないかな。そういつの」

『……私がこの仕事を請けると、か？』

「うん。たぶん」

チルノはうなずく。

「うまく言えないけど……あたいもいいなっと思つぐらいだから、巫女もそうだと思う」

「なるほどな」

妹紅が優しい感じの笑みを浮かべてチルノを見る。。

「それはおそらく当たっているだろう」

『……………』

まあ、何もしていないよりは役に立てるようなことができたほうがいいと思うのだが。

『だが、もしやれるとしても、せいぜい月に何度か手伝つというところじゃないか』

「かまわないさ。もし良ければ、都合のいい時に寺子屋に行って話をしてみてくれ」

妹紅は湯呑みを置いて立ち上がった。

「さて、せっかくだから久しぶりにすこし身体を動かそうじゃないか。噂では新兵器を仕入れたとか聞いたぞ」

『新兵器というほどのものじゃないが……』

「チルノ、お前さんも混ざれ。わたし側にな」

チルノは驚いたように顔を上げた。自分まで声を掛けられるとは思わなかったのだろう。

『……さすがに二対一は酷すぎないか？』

私はやや苦笑したい気分で縁側から離れ、懷から新しいお札を取り出した。

くその3へ続くく

その3

三

『じゃあ、そろそろ質問はこれくらいにして……』

えーっ、と子供たちが声を上げる。

「まだわたしも訊きたいことがあるよ」「わたしも」「俺も」

『まあまあ、待ってくれ』

子供たちは本当に元気がいい。

『いちおう私はみんなに勉強してもらおうと思ってここに来たんだから、おしゃべりばかりしては慧音先生に怒られてしまう。それと、今日は天気がいいから勉強は外でやろう』

「外でできる勉強なんてあるの？」

『あるとも。さあ、みんな庭に出なさい』

子供たちは嬉しそうな表情で一斉に縁側から外に出て行く。背丈から考えても、小学校でいえば低学年ぐらいの子が多い。彼らぐらいの齡では家の中にじっとしてられないだろう。

『じゃあ先生、ちょっと手伝いを頼みます』

「承知しました」

私のそばに座っていた慧音さんが立ち上がった。手には私が用意してきた道具類が入った袋を持ってくれている。

庭に出て子供たちを集めると、私は彼らの目の高さぐらいに浮かんでひとつ質問をした。

『みんな、お日様の光の色が何色が知ってるかい？』

子供たちは口々にいろいろな答えを返してきた。赤や黄色などと言う子もいれば、白いと言う子もいた。光に色なんてない、と言う子もいた。

『さて、それじゃ答えを言う前にみんなに見てもらいたいものがある。先生、出してください』

慧音さんからガラス状の物体を受け取り、子供たちに見せる。

『これは、光の色を調べるための道具なんだ。これに光を当てると、その光の色が何色か分かるんだよ』

慧音さんに手伝ってもらい、線状に細くした光をプリズムに当ててみせると、子供たちが驚きの声を上げた。当然ながら、屈折した光は地面に七色のスペクトラムを映し出したからだ。

「これって、虹と同じだよね……」

私の近くにいた少し年かさの男の子がつぶやくように言う。

『そうだ。実はお日様の光は、こういうたくさんの色の光がもともと混じり合っているんだ。プリズムはその混じり合った光を色ごとに分けることができるんだよ』

私はさらに霧吹きを出してもらい、慧音さんに小さな虹を出す実演をもらった。太陽を背にして日陰に向かって霧を出すと、その中に七色の円弧が現れる。子供たちは歓声を上げ、他にもいくつももってきた霧吹きを奪い合うようにして「虹を出す」ことに夢中になった。

そんな様子を彼らからすこし離れるようにして見ていた男の子がいた。さつきスペクトラムを虹と同じだと言っていた子だ。

私は彼のそばに移動して、驚かさないように彼の肩あたりの高さまで浮上すると声をかけた。

『きみは名前はなんと言ったっけ？』

「あ……ええと、新太です」

慧音さんが事前に見せてくれた生徒の名簿を思い出す。たしか鍛冶屋さんの息子だった。

『新太くんか、そうだったね。ところで、少し浮かない顔をしているが……なにか気になることでもあるのかな？』

「や、あの……そんなんじゃないけど」

すると慧音さんが脇から口添えをしてくれる。

「チビさんは優しい人だぞ。遠慮することはない、何か考えたことがあるなら言ってみたらいい」

「……俺のばあちゃんが、前に言ってたんです。虹は龍神様の通り道だって。雨をいっぱい降らせた龍神様が山に変えるときに、通った道が七色に光るんだって。あれは嘘だったってことだろうか」

『なるほど』

こういう話には慎重に答えないといけない。

『きみのおばあさんの話は嘘ではないよ。太陽の光が七色に分かれるのも、ああやって霧吹きで虹ができるのも間違いではないけれども物事のある部分だけを見ているだけだ』

「……………」

『例えば、夜に光る月は、表側しか見ることができない。でも、神様にはきつと裏側も見えている。わたしたちは神様と違って、何もかも見通せるわけじゃないから、物事のある一方からしか見えないけれども、それは嘘というわけではないんだ……ちょっと分かりにくいかな』

「ううん。なんとなく分かる。ひとつのように見えても、本当のこととはいくつもあるってことだね」

『そう、その通りだ』

私はほっとした。

『私たちには想像もつかないことが世の中にはたくさんある。現に、こうやってきみと話している私でさえ、どういう仕組みで自分が話せているのかなんて、分かってないんだからね』

男の子はうなずくと、ぺこりと頭を下げてみんなの輪の中に入っていた。

それを見ながら慧音さんも安心したような顔で言った。

「お見事でした、先生」

『やめて下さいよ』

柄にもないことを言ってしまったような気がして、私は少し照れくさかった。

子供たちが帰ったあと、私は慧音さんとともに客間に戻り一服した。といっても私自身はお茶は飲めないが、精神的に一休みすることにした。

「いや……実際、あなたの授業には感服しました」

『とんでもない』

慧音さんがあまりにも感じ入ったような顔つきをしているので、私はすこし焦ってしまった。

『見当外れなことはたぶん言っていないと思いますが、すこし省略した説明もありましたし……むしろ、子供たちのほうがよく質問してくれたので、私はそれに応じているだけで良かったんです』

「そうは言われるが、あなたがどんな問いにもたちどころに答えを返してくれるので、子供たちもどんどん聞きたくなったのでしよう。それに正直、わたしは理学には疎いので、子供たちにはそういう方面の知識を授けることはできなかった。本当に感謝しています」

『少しでもお役に立てたのなら嬉しいです』

数日前に妹紅に勧められた段階では正直なところ無理な話だとは思えなかった。ただ、案外こういった理数系に関する知識が残っているようで、特に資料がなくとも授業っぽいことができた。香霖堂の霖之助さんに実験器具に使えるようなものに関して協力してもらえたのも幸いだった。

『ただ、先日ここに伺ったときにも申し上げたとおり、いつまで続けられるかは……』

「事情はよく承知しています」

慧音さんはうなずいた。

「あなたは過去の自分について探求されている。そして、場合によっては幻想郷を去るということもあり得るのでしょう。それはわたしや妹紅だけではなく、他の者たちもみな分かっていることだと思

います。口には出しませんが」

『……………』

考えてみると、このことについて誰かにはつきりと言われたのは初めてかも知れない。

「ただ、どのような形であれ、別れというものはいつの日にか必ず訪れるものです」

一瞬の間、慧音さんの瞳に哀しげな色が浮かぶ。

「でも、それを怖れていては自分の足で前には進めませんから」

……その通りだ。立ち止まってしまえばただ流されてゆくだけだ。

『励ましの言葉、ありがとうございます』

「いや、そんな。わたしごとき者が言うことではなかったかもしれない」

慧音さんは少しはにかんだような表情を見せた。

『そんなことはありません。正直、すこし辛かったです。みんな分かっているんだろうと思っけていても……自分から口にはできなくて』

「そうですか……それも分かります」

と、玄関に人の気配がした。同時に「ごめんください」と声が聞

こえてきた。霊夢だ。

慧音さんは笑みを浮かべて立ち上がった。

「お迎えが来たようですね。それではまた、次回もよろしくお願いします」

『こちらこそ、よろしくお願いします』

私は深く頭を下げた。

人里から川沿いの道を霊夢と一緒に進みながら、神社のある東の山へと向かう。

「それで今日はどんな話をしたの、寺子屋の方は」

『光の色の話をした。昨日香霖堂に行ったときプリズムが借りられたんでね』

「ああ、七色に光が分かれるやつね」

『そうだ。子供たちはけっこう喜んでくれたよ』

「まあそういう話は里の子たちには珍しいでしょうからね。霖之助さんとかは道具のことには詳しいけど、何だかいろいろ説明する割にはよく分からなくて閉口しちゃうわ」

『……なあ、霊夢』

「何？」

『私は自分のことについては、すこし考え方を変えることにしたんだ』

「……どういう風に？」

『昔のことを調べるのはすこし後回しにして、いまの自分がやりたいことをやってみようと思う。前に妹紅が言ってたんだが、私は必ずしも私そのものをすべて失ったわけじゃないと思うんだ』

「それはそうよ」

『だから、やりたいことをやっているうちに見えてくる自分っていうのがきつとあると思う。実際、今日子供たちに囲まれていたら、なんというか、すこし不思議な気分で……』

すると霊夢はかすかに笑みを浮かべた。

「どこか懐かしいような感じがした？」

『……！』

私はすこし驚いた。

『どうして分かるんだ？』

「それは分かるわよ、話の流れからいっても。それに前からちよっ
と思ってたけど、あなたって、どこか先生っぽいついていうか……」

『説教臭いつてことか』

「そうじゃないわよ。いや、そういう面もなきにしもあらずだけど
……ともかく、いつもできるだけ相手が納得してくれるような言い
方を選んでる感じね。だから魔理沙とかは割と簡単にあなたに丸め
込まれるのよ」

『別に丸め込んだ覚えはないぞ』

私は苦笑したい気分で言った。

「まあ、どっちにしてもあなたのやりたいようにやるのがいいわ。
わたしはべつに何も心配してないから」

『そうなのか?』

「ええ。それともっと心配してほしい?」

『そんなこと、おと……』

そこで一瞬、私の思考は固まった。

「ん、何よ」

『いや、大人がそんなこと言えるわけがないだろうっ』

「へえ、チビは大人なんだ?」

『少なくとも霊夢よりは大人のつもりさ』

言い返しながら、私はすこし落ち着かない気分だった。

そんなこと、『男』が言えるか、と言いそうになったのだ。

～その4へ続く～

その4

四

何列も立ち並ぶ本棚の上は、私にはまるで空中に架けられた高速道路のように見える。ただ、平行に規則正しく並んでいる分、かえって位置がつかみにくい。絵面としては同じパターンの繰り返しなので、目印になるものがないせいかもしれない。

突然、赤い閃光の塊が群れを成して天井から斜めに降ってくる。一瞬、横に飛び上がりたくなる。が、かろうじて抑える。直後、交差気味に足元から鋭いフックのような軌道でもうひとつの群れが襲う。群れごとに避けては衝突する。正解は……。

交差の間隙にできる『道』を通り抜ける！

弾が本棚にたて続けに命中し、白い閃光を放つ。仕掛けられた障壁で本棚そのものには被害はないが、こちらはその閃光で弾が見えなくなる。数瞬前のイメージから軌道を推測して一気に駆け抜ける。

弾の飛んできた方向とはすこしずれた位置の、本棚のかどに向かって二枚の符を放った。靈気に包まれた弾と化した符は、二重の螺旋を描きながら飛んでゆく。と、翼をもった影が音もなく一瞬で横に移動する。とつさに、飛んでいった符の後を追いつき、手に呼び戻してから、振り向きざまに符をもう一度撃ち出した。

「甘いわ」

レミイが私の背後に接近していた。私が撃った符を軽くかわし、一気に閃光の塊を放ってくる。だが、きわどくそれを回避し、右手に意識を集中して符を急角度で反転させた。

たて続けに衝撃音がふたつ。

「えっ？」

レミイは眼を見開き、あっという間に本棚の上に叩きつけられた自分の両腕を信じられないという顔つきで見る。腹筋をするような恰好で背をそらし、身体を持ち上げようと両脚をじたばた動かすが、左右の手首に張り付いた符はがっちり固定されている。

「ちょっと、チビ！ レディーになんて恰好させるのよ！」

たしかに、フリルのついたドレスの裾が乱れ拡がったその状態は紅魔館のお嬢様にはふさわしくない有様ではあった。

『いや、そういう恰好になってるのはレミイ自身の問題なんだが…
…あきらめて脚を動かすのをやめればいいんだ』

「そんな……こんな紙切れなんて……」

だが、どんなにレミイが腕に力を込めても符は破れない。

『霊夢に頼んでつくってもらった精密制御用のお札だ。里の稗田さんが特別に分けて下さった古紙を使ってるしね。いったん固定したらレミイでも簡単にははずせないぞ』

「畜生、むかつくー!」

レミイはさらに脚をじたばたさせる。そのたびに本棚を包んでいる障壁が小さな雷のように閃光を放つ。

すると、下から浮き上がってきた紫の髪の少女が静かな声でレミイに言う。

「いい加減に諦めて欲しい。それ以上暴れると魔法障壁がもたないから」

「だってパチエ……」

「そもそもわたしは授業のための資料を貸すことは何も問題ないと言った。それを、この子と遊びたいからといって無理に条件をつけさせたのは、レミイ、あなた自身」

「分かったわよ……負け負け、わたしの負けよ。チビ、さっさとはずしてちょうだい、この忌々しい紙切れを」

わたしは指先から放っていた靈気を緩めた。二枚の符はレミイの手首からふわりと離れ、ゆっくりと弧を描いて私の手の中へと戻った。

「まったく、靈夢よりもタチが悪くなってきたわね」

レミイは起き上がって、手首を指先で撫でた。

『そのタチの悪さに一役買ってくれたのが他ならぬレミイ自身なんだが』

「ははっ、まあそういうことね」

レミイは苦笑した。

「それじゃ、下に降りて一服しましょうか」

「いまあなたが希望しているものを探させるから、しばらく待っていて欲しい」

この図書室の主でもある魔法使いの少女、パチュリーはそう言う
と、三日月形のテーブルの中央に置かれた小さなクッションを示し、
そこに座るよう勧めてくれた。そして彼女とレミイは並んで三日月
の外側の弧に着席する。そこから少し離れた位置で大人しい感じの
女の子がお茶の用意をしてくれていた。よく見るとメイド妖精とは
違って、レミイに似た翼を持っている。

パチュリーはその子に視線を向けて言う。

「この子が本の管理をしているから」

女の子はぺこりと私に頭を下げる。どうやら司書ということらしい。
い。

『急いでいるわけではないから、時間の許す限りということでもいい。
よ。これだけの本の量だし大変だろう』

「だいじょうぶ、能力はある子だから」

パチュリーはすこし得意げに微笑む。なんだか以前に較べると、表情が豊かになったような感じた。

女の子はお茶を配膳するとふたたびお辞儀をして、図書館の奥へと歩み去って行った。

「ところでね、チビ」

レミイが指を立てる。

「わたしは前から思っていたのだけど、こういう席であなたに何もしてあげられないっていうのが齒がゆかったの」

『ん、どういう意味だ』

「つまり飲食ができないということよ。まあわたしたちも人間と違って飲食は必要不可欠ではないけれど、一種の楽しみとしては意味をもっているわ」

『しかし、なにしろこの身体だからな』

私は手を上げて見せる。巫女としての服には包まれているが生きた身体ではない、あくまでも器としての人形だ。

「いや、そこでよ」

レミイはにやりとする。なんだかちょっと怪しい感じの笑みだ。

怖ろしいというわけではないが、なにか「たくらみ」の気配がある。

「パチエ、出して」

「……………」

パチユリーは傍らから手のひらほどの大きさの木箱を取り出し、テーブルの上に置いて蓋を開ける。中の折りたたまれた布を広げると、硬貨ほどの大きさのロケットがついた首飾りが出てきた。パチユリーがそれを取り出してロケットを開くと中には水晶製らしき円盤が入っていて、その表面には複雑な線を重ねた図形が刻まれていた。

『何かの魔法の道具か？』

「まあ、そのたぐいね。パチエ、説明して」

パチユリーはすこし眉を寄せ、それから口を開く

「……………これは魂の緊縛を緩める道具。意識を緩め、内側から外に向かって広げる。もともとは気分を穏やかにするための薬代わりに使われた。でも、通常の状態では違った効果も得られる。一種の……酩酊感が生まれる」

『つまり酒を飲んだときのようになるということか』

「そう」

うなずく。

私はレミイに顔を向けた。

『もしかして、これを私に?』

「察しがいいわね。そう、これをあなたにプレゼントするわ」

レミイは咲夜さんが淹れたお茶をすする。

「簡単に言つと、あなたのような身の上でも、これを使えば酔っ払えるわけよ」

『……それは少し問題があるような気がするぞ。薬でいえば精神安定剤に相当するわけだ。それを酒の代わりに使うというのは』

「でもねえ、こんなことを言つとなんだけど、周りがよっぱらっているのに自分一人がシラフっていうのはなかなか寂しいものよ? 宴会っていうのはある程度くだけた気分が共有できたほうがいいと思うのだけど」

逆に言えば周りも気を使うということか。酒を飲めない立場というのはそういう意味ではなかなか辛いものでもある。特に飲みたくても飲めない人はそうだ。

『しかし酩酊感と言つても、どの程度のものなんだ? 前後不覚になるようでは困るぞ』

「そんなに強いものではない」

とパチュリー。

「意識や記憶を失うようなことはまずない。それと、効果の強さには使い手それぞれだが必ず上限がある」

『つまり飲み過ぎにはならないというわけか……どうやって使うんだ？』

「あなたの場合は円盤に左手を当てると分かりやすい。霊気の通路がそこにあるから」

私はおそろおそろその水晶の魔法円に触れてみた。

すると、たしかに急激にはないが、なんとなく心持ちがふわりとするような感じがした。

「どう？ 悪くないでしょう。それに手を離せば効果はだんだん消えてゆくわ。お酒なんかよりかえって始末がいいはずよ」

とレミイ。

手を離すと、たしかに効果はゆっくりと薄らいでゆくようだ。

『うーん……まあ具合の悪いことが起きるものではない感じだな』

「当たり前よ。だいたい、それはわたし自身が使っていたんだもの」

レミイはあっさりとした口調でいう。

『いいのか、そんなものをもらって』

よく見ると、ロケットそのものには宝石がちりばめてあるようだ

し、ついている銀の鎖にも細やかな彫刻がほどこされている。宝飾品としても高価なものだろう。

「ま、いまのわたしにはもう必要のないものだから。それに、この間のパーティーではいいものを見せてもらったし、神社でやった罰ゲームも素敵だったし。そのあたりのお礼だと思って受け取って」

『……………』

私はレミイの顔を見つめながら、この道具を必要としていた頃の彼女がいかなる状況にあったかについてすこし想像してみた。少なくとも、彼女が生きてきた五百年の道のりで起きたことが楽しいことばかりだったとは思えない。むしろ逆だと考えるのが妥当だ

「それとね、そのロケットにはいちおう護符としての意味もあるのよ。そうだったわよね、パチエ？」

「ええ」

こくりと首を動かすパチユリー。

「ロケットには円盤とは別に宝石の配置で形成した障壁魔法が組みれている。万が一あなたの霊力が尽きるような状況でも、ある程度外からの攻撃から身体を守ってくれる。できれば外に出るときには身につけることを薦める」

『そうか……………』

そこまで考えてくれているのなら、断れるものではない……………が。

『それじゃあ一応、貸してもらうつ形にできないか。だいたい、私の器であるこの人形自体が借り物という形だしな。相当に高価そうだし、もらうつというのはやはり気が引ける』

「……分かったわ、じゃあすこし使ってみて様子を見るといいことだね」

それからしばらくして、司書の少女が戻ってきて資料の候補となる本を集めてきてくれた。私の中から何冊が必要なものを選ぶと、パチュリーはあとでメイド妖精に神社まで届けさせると言ってくれた。レミイが少し眠そうだったので（なにしろ日中はレミイにとっては本来の活動時間ではない）、玄関まで送ると言う彼女を押しとどめ、礼を言って図書室からメイド妖精の案内で玄関へと向った。

「さて、それじゃわたしは少し休ませてもらいましょう。さすがにすこし疲れたわ」

レミリアがそう言って図書室から出ようとしたとき、パチュリーは少し陰を帯びた口調で問いかけた。

「あれで良かったの、レミイ」

レミリアの表情がすこし曇る。だが眼つきは逆に鋭さを帯びている。

「……良かったのよ。外から来た彼なら、どういう結果を生もうと

周りに禍根を残すことはない……もちろん、責めはすべてわたしが負うのは当然だけれど」

「でも、霊夢が……」

「そうね、まあある程度の覚悟はしているわ。でもいいのよ。幻想郷から追い出されるということはさすがにないでしょう。少なくとも境界の妖怪はそのあたりについてはバランスを考えるとと思う。吸血鬼は吸血鬼らしく生きていけばいいのだし」

パチュリーは哀しげな眼でレミリアを見つめる。

「……そうまでしなくてはならないことなの？」

「ええ。わたしが視たあの一連のビジョンは、この運命の流れが辿りついたその先で大切なものをもたらしってくれると告げている……それは間違いないの」

「……………」

「ま、いますぐに答えが出るというものでもないわ。いずれにせよ、結果がどうなるかとわたしはすべて受けとめるつもりよ」

レミリアが図書室から出て行ったあと、パチュリーは無表情なまま身動きもせず立っていたが、やがて静かにきびすを返すと本棚の群れの中へと姿を消していった。

くその5につづく

その5

五

メイド妖精に案内されて紅魔館の前庭を横切っていたとき、不意に背後から強い気配を感じた。

私は思わず後ろを振り向いた。視界の中心には紅魔館の赤みがかった洋風の建物の一部からぽつりと離れた感じで突き立っている尖塔があった。中世のあたりの城塞なら見張りの塔に相当するような感じた。

「どうかされましたか？」

私が空中で停止していたせいで少し離れてしまった妖精メイドがこちらを振り返り、けげんそうに訊いた。

『あ、いや……なんでもありません』

とりあえずそう答えておくしかない。

門のところまで案内してもらったところでメイド妖精と別れ、門番の美鈴さんに通用口を空けてもらう。

「お疲れさまでした。なんか、地下でだいぶご活躍だったみたいですね」

『もう知ってるのか。耳が早いね』

「メイド妖精たちはおしゃべりですから、中で起きたことはだいた
いすぐに広まります。でもまあ、口伝えの話をすべて信用するわけ
にはいきませんけどね」

案外、この人は門番という立場でありながら紅魔館の中のこと
についても詳しいのかも知れない。

『それならひとつ教えて欲しいんだが……あそこの離れたところに
塔があるだろう』

私はさきほどの尖塔を指さした。

『あれは、何か特別な場所なのかい？』

「えっ……」

美鈴さんの表情が変わる。

「ど、どうしてそんな風に思われたんですか？」

『なんとというか、ここに来る途中で強い気配を感じたんだ。まるで
細い剣が突き刺さってくるような、そんな印象だった』

「そうですか……」

美鈴さんは、小さくため息をついた。

「あそこにはレミリア様の妹様、フランドール様がいらつしやるんです」

レミイの妹、フランドールには姉に匹敵するような運動能力がある上に、恐ろしい特殊な力があるのだという。それは対象となるものの「破壊の焦点」を見つけ、移動させる能力で、その焦点を手元に引き寄せた上で衝撃を加えれば対象を完全に粉碎することもできるらしい。

「これはあくまでも噂ですけど、以前、この紅魔館に向かって落下してきた隕石を一瞬で粉々にしてしまったこともあるそうです。もちろんそんなことが空中で起きたのかどうかなんて地上じゃ確かめようがありませんけど、あり得ない話ではないと」

この破壊の焦点を操る能力はきわめて危険なので、レミイとしても妹がみだりにその力を使わないように心を砕いてきたが、なかなか思うようにはいかなかったらしい。親の気をひこうとして子どもがいたずらを繰り返すのにも似て、忘れたころに突然に事件を起こす。ただ、幻想郷に来てからはとりあえず大きな事件を起こしたことはないという。また紅魔館の建物から外に出るということも滅多にない。

とはいえ、いつ何が起きるか分からないことは、館内の者たちも常に意識していて、なるべく刺激しないようにしているのが現状だということだ。

「フラン様ご自身はけっして悪い方ではないんですが……いろいろと込み入ったことが重なってしまつて、つらいことが多いんだと思います」

『なるほど……』

特殊な能力を持ってしまったがゆえの孤独感。制御できない感情。周囲からの視線。短い話からでも容易に想像ができる。

「チビさんはレミリア様ともお親しいし、ここにもよく出入りされますから知ってらしたほうがいいと思ひまして……ただ、あまり外でできる話ではないので」

『分かっています、ここで私が聞いたということも含め、誰にも言いません』

私は開けてもらった扉から外に出ると美鈴さんに別れを告げ、紅魔館をあとにした。

帰り道は行きとは反対の南側の湖沿いの道に沿って低空で移動した。

紅魔館の大時計を出際に見たとき十時ぐらいだったが、それにしても太陽の位置が低い。本格的な冬が始まりつつあるのをあらためて感じる。風はまだ強くはないが、鉛色の湖面は以前に較べると波立っている。西の山々から張りだしてきている雲のせいで、空もだいぶ灰色っぽくなってきた。陽の光も雲間から見え隠れするという感じで、この分だと雲が全体を覆うのも時間の問題だろう。

湖の東側に流れ込んでいる川の河口にたどりつき、そこからさら

に東に向かって川沿いに移動する。水に弱い身体づくりの関係から、川や湖などの真上を飛ぶのは避けるようにアリスから注意されているので、岸に生えている低い灌木の上あたりを飛ぶ。

空が完全な曇天になってきた。雲行きがあやしいというのはまさにこういう感じだが、雨が降るといふ感じの厚さでもない。万が一降ってきたら、森の中を通って香霖堂で雨宿りでも……。

『！』

ほとんど反射的に私は真下に身体を移動させた。

次の瞬間、赤い輝線が空気を震わせて頭上を通り抜け、灌木の葉や枝が形そのままに灰になった。正面から食らったら一撃で吹き飛ばされそうな強烈さだ。

下がったままの低い位置で灌木の枝の間をすり抜け、森の方へと移動する。川の近くよりは防御がしやすい。

すると、頭上から声がした。

「へえ、さすがに反応がいいですね。攻撃に常に備えてる……形が巫女のくせにまるでお侍みたいなお人形さんです」

葉が落ち切った大木の枝の上に裾の短い赤のドレスを着けた少女が立っていた。

赤いリボンを結んだ白い帽子の下にはゆるくウェーブがかかった黄色の髪。その背中に槍の穂先に似た形の色とりどりの羽を並べて吊り下げたような翼が広がる。

そして、顔。とくに鋭い切れ長の目元はレミィにそっくりだ。

『フランドール・スカーレットさんか』

「フランでいいですよ、チビ霊夢さん。もっともあなたのは仮の名前らしいですが」

『……私のことを詳しく知っているようだね』

「そりゃまあ、あなたはこの幻想郷じゃけっこう有名です。いろいろな人があなたについて話します。気を付けていればわたしみたいな出不精でも分かります」

『その出不精のきみが、なぜわざわざ私を追いかけてきたのかな』

「まー、あれです。ちょっととした挨拶です。もちろん、お行儀が悪いつていうのは分かっていますが」

『私が塔を見たのが分かったのかい』

「分かってますよ。だから、興味が湧いたんですが」

金髪の少女はくすくすと笑う。

「でも、ちょっとがっかりでしたねえ」

『それはまたどうして?』

「だって、あなたの中に入ってる魂って」

ふいに少女の目つきが変わり、口元が歪む。

「まるっきりの『ニセモノ』だから」

木の上とその下で対峙している彼らを、川をはさんで反対側の岸の木々の隙間から息を詰めて見つめている二つの影があった。この森に住む魔法使い、霧雨魔理沙とアリス・マーガトロイドだ。アリスの周りには数体の小さな人形が寄り添っている。

「……あれってフランじゃないのか」

「そうみたいね……っていうか、わたしは初めてまともに見たわ。噂でしか聞いてなかったから」

「ああ、そうか。しかしこれはかなりヤバそうな感じだぜ」

魔理沙の瞳にすこし焦りが浮かぶ。

「フランの強さは半端じゃない。実力はレミリアより上かもしれない」

「そんなに？」

アリスは細い金色の眉をひそめる。

「ああ。それにしても、どうしてこんな時間から外に出てるんだ？
なんともないのか、吸血鬼なのに」

「たぶん、スカーレット姉妹ってもとともてデイトライトウォーカーな
んじゃないかしら」

「デイトラ……なんだそりゃ」

「太陽の光が当たっても影響を受けない吸血鬼よ。真祖、つまり初
めから吸血鬼だった者の多くはそうだね。だいたい、あのレミリア
だって日傘一つで神社に行ったりしてるみたいじゃないの。普通だ
ったらちよつと日光が当たったら焼けて灰になるはずよ」

「はん。じゃああれか、あの紅い霧を出した例の件も昼間も出歩く
ためとかいうのは嘘か」

「嘘というか、騒ぎを起こすための口実だったんじゃないの？ そ
んなことより……」

アリスは眼で川向こうを示す。

「どうするのよ」

「……今この段階じゃどうしようもないだろう。ただ、様子を見る
にしても、何を話してるのか聞きたいな。なんか方法はないか」

「なくはないわ」

アリスが彼女の周りにいた人形の一人に指示をすると、人形は素
早く姿を消した。

「どうするんだ?」

「気づかれないように少し遠回りさせて向こう岸に渡らせるわ。魔法の系經由でこちらの人形に拾った音を送るようにしたから。到着すれば聞こえてくるはずよ」

「なるほど……」

やがて、受信担当の人形が不意にフランの声を出した。

『つまりねえ、あなたの今の魂はスカスカの穴だらけってことです。言ってみれば出来の悪い複製みたいなもんですよ』

くその6へ続くく

その6

六

これまでにない衝撃を感じたが、それ以上に彼女の発言の真意が知りたかった。

『それが君には分かるのか？』

「もちろん。わたしは物事が形を保つための力がいちばん集中している『点』が分かりますから」

樹の枝の上に両足で立ち、腕組みをした姿勢で私を見下ろしながら、フランは言う。

「魂だって例外じゃありません。普通ヒトの魂は、点がめまぐるしく動きまわってる。つねに変化し続けるのが生命の姿です。でも、あなたはいつもそうじゃないんですよ」

すこし眼を細めたまま、淡々とした調子で話し続ける。

「あなたの『魂らしきもの』には点が動くための場所がほとんどありません。点の動き方がぎくしゃくしてて、不自然なほど遅い感じがします。だから……」

ニヤリと口元が歪む。

「場合によっちゃあ、あなたの魂そのものの『点』を破壊すること
も、できると思いますよ」

すると突然、黒い影の塊が向こう岸の森から私の方に向かって飛
び出してきた。

とっさに避けようとしたが、その影の正体はすぐに分かった。

「やめろ、フラン！」

魔理沙が私を抱き上げて、フランから隠すように身体を半身の姿
勢にする。

「遊び気分でそんな力を使うな！」

「あらー、立ち聞きはよくありませんね、魔理沙」

フランは皮肉な感じの笑い方をする。

「あなたは泥棒するのも正々堂々って主義じゃありませんでしたか
？　こそこそと陰で人の話を聞くななんて真似はらしくないでしょう」

「それこそ場合によりけりだ。もしチビを破壊したら、それはそっ
くりそのままお前に跳ね返ってくる。お前自身が損をするんだ」

「ふーん……ねえ、魔理沙」

「なんだよ」

魔理沙は警戒を崩さないまま、少しフランから距離をおくように移動した。

「あなた、ちょっと性格変わりましたか？ 前はもつと自分勝手じやなかったですか？ 他人のことなんてどうでもいい、自分さえ良ければって人じゃありませんでしたか？ もしかして」

フランは腕を伸ばし、魔理沙の腕の中の私を指さす。

「そのお人形さんに影響されちゃってますかねえ？ そう言えば、なんだかあなたの魂の点もちょっと動きが鈍い？」

魔理沙は一瞬、ぎくりとしたような表情をしたが、すぐに言い返した。

「わたしはいつもわたしのままだ。何も変わっちゃいない」

「だからですね、それがそもそも錯覚なんだって。ヒトは常に変わり続けてるんですよ」

我慢出来ないという感じで口元から笑いを洩らす少女。

「ところが、変わってる本人にはそれが分からない。なぜかって言うと、物事に対する見方の全体が平行移動するように変わってるから、自分自身じゃなかなか変化を検知できない。これは誰だってそうです」

「何をわけわからんことを……」

「そのお人形さんは、魂がスカスカだから、誰の言うことでもいつ

も肯定的に受けとめるのです。あなた、そのお人形さんに怒られたことありますか？ 嘲られたことありますか？ 拒絶されたことは？ ないでしょう？ それはね、そのお人形さんが、ヒトが持っているべき本当の意味での自己を持っていないからです」

「やめろ！ それ以上言うと本当に怒るぞ！」

「もう十分怒ってるって。だけど、もうひとつだけ言わせてください。魔理沙、そのお人形さんの声がどう聞こえてますか？ おそらく、あなたが聞きたいような声で聞こえてるはずですね」

「！」

「たとえばねエ……そう」

フランの口元がふたたび歪む。

「霧雨道具店の主人とか？」

「お前はっ！」

魔理沙は絶叫して、かぶっていた黒い帽子から金属製の装置を取り出した。ミニ八卦炉だ。

私はとっさに魔理沙から離れ、フランへの射線をさえぎる形で空中で止まった。

「チビ、どけ！」

『魔理沙、ヒトと妖怪の戦いにはルールがあるんだろ？ 魔理沙

が私に最初に教えてくれたことじゃないか』

「だけど……あいつはお前のことを」

『彼女の挑発もなにか事情があつてのことかもしれない。だが、理由はどうあれそんなものに乗ってしまつては駄目だ』

「くっ……」

魔理沙の眼尻には涙がうつすらと滲んでいた。よほど傷ついたのでろう。

私はフランに向き直つて言った。

「あなたの言うことは真実を射ぬいている部分もあると思う。すくなくとも私にとってはかなり参考になった。ただ、真実に正面から立ち向かうには努力と鍛錬が必要だ。今回はこれぐらいにしておいて欲しい。私自身はまたあなたと話す機会を持ちたいとは思つがね」

すると、フランはかすかに鼻を鳴らした。

「まさにあなたらしい反応ですね。でもどっちにしても今のままじゃ……あなたはあなた自身の真実を見つけることはできないと思いますねえ」

『肝に銘じるよ』

「やっぱりがっかりです……」

フランは肩をすくめる。

「なんであなたにお姉様が入れ込むのか、よく分かりませんね」

少女は軽く手を振ると、木から飛び上がり、見る間に空の向こうへと姿を消した。

「……チビさん」

振り返るとアリスが立っていて、手で顔を蔽いつつむいている魔理沙のそばでその身体を支えるようにしていた。

「その……ごめんなさい。わたしが出ると、かえって話がこじれるような気がしたの」

『分かるよ』

アリスは見かけとは違って生きている時間は魔理沙よりも長い。その分、真実の厳しさというものも知っているはずだ。

『ところで、ふたり一緒だったということは、何かしている途中だったのか？』

「あ……ええ、ちょっと魔理沙がキノコ探しを手伝って欲しいって言うから。人の手だと難しいところでも、人形たちだと採取しやすかったりして」

『なるほどね。悪かったな、妙なことに巻き込んでしまった』

すると魔理沙がすこし怒ったような口調で言った。

「わたしが勝手に巻き込まれたんだよ。わたしの考えで、わたしのしたいことをしたただけだ」

『分かってるよ、魔理沙』

「でもさ……チビ」

急に弱々しい声になる。

「わたしは変わったのか？ 初めてチビに会った頃のわたしと、いまのわたしは違うのか？ そう感じるか？」

そういう問いを発すること自体が、変わった証拠なのかもしれない。だがそんなことを言っても、今はかえって混乱するだろう。

『私はどんな魔理沙でも好きさ』

「……！」

『変化に良いも悪いもない。自分が求めるものに向かって動いてる魔理沙でいいんじゃないか』

「そ……そうか。うん、そうだな」

まだすこし目元を赤かったが、魔理沙は笑顔をみせてくれた。

アリスが軽く咳払いをして言う。

「それじゃ、お昼も近いことだしいったん引き上げましょう。チビさん、どうする？ もし良かったら家に寄っていく？」

『これから里に行こうと思うんだ。慧音さんとすこし話があるから……』

「ああ、例の寺子屋ね。でも、ここから里までの間は大丈夫？」

『さすがにさっきみたいな大物には出くわさないだろう。もちろん用心はするけどね』

私は二人と別れ、川沿いの道を里に向かって急いだ。空はふたたび雲が切れ、青色の隙間があちこちに拡がり始めていた。

くその7に続くく

その7

七

「わが主、レミリア・スカーレットはこう申し上げるよう言いました。今年の冬至の夜は、里の人々にとってきわめて危険な夜になる。日が落ちたら、戸を堅く閉ざし、夜が明けるまで決して外に出ないようにすることを薦める、と」

「いったいそれはどういうことだ？」

慧音は当惑したように言った。

「……もともと里の人達は夜中にむやみに出歩いたりはしないはずです。特別に支障をきたすことはないでしょう」

寺子屋の玄関の土間に、上り框からすこし離れて立っている十六夜咲夜は表情を変えずに答える。

「しかし、なぜ今年の冬至に限って？ 去年はそんなことを言いに来なかったじゃないか」

「去年の冬至と、今年の冬至ではすこし事情が違つのです。これは、あくまでも里のみなさんを守るための警告です。まだ冬至までには余裕があります。ぜひ、みなさんにお知らせください。それでは」

頭を下げて踵を返そうとした咲夜に、慧音が声をかける。

「博麗の巫女にも、このことを知らせてかまわないのか？」

「……まあ、あの人なら何か事が起きたらすぐにやって来るでしょう。ですが、事前に知っていていけないということはありませんね」

咲夜は静かにそう言うのと、引き戸を開けて再度会釈をすると玄関から出て行った。

慧音さんの寺子屋を訪ねた私は、座敷に通され、資料の件も含め、今後の授業の計画について大まかなところを話し合った。

「週二回に？ 大丈夫ですか、そんなに神社を留守にして」

『いやまあ、留守にするといっても午前中だけですし……それに本来の主がたいていはいますから』

「それはそうですが、ちょっと申し訳ないなあと思ひまして。もちろん、こちらとしては大いに助かるのですが」

慧音先生はすこし考え込み、それから顔を上げて言った。

「ごうしましょう。このあたりではそもそも曜日感覚が薄い。でするので、一の日と五の日に来ていただくということにはどうでしょう。そのほうが子供たちにも分かりやすいと思うのです。そ

うすると、だいたい月に六日、ないし七日ということになります」

『なるほど。ではそうでしょうか』

急に増やすとこちらに負担がかかると考えているのだろう。それはそれで意を汲んだほうが良さそうだ。

「あとはだいたい良さそうですね。教材などの件はまた考えていくことにしましょう。時刻は辰の上刻あたりまでに来ていただければ問題ないです」

『分かりました』

午前九時というところだろう。時計というものがあまり普及していないので、時間に関してはあまり厳密ではないらしい。

「ところで……さきほどの資料ですが、紅魔館の地下図書館から借りるということでしたね」

『ええ、そうです』

「なにか、交換条件のようなものはなかったのですか」

『いや、それはとくにありませんよ』

強いて言うなら、あの図書館内での戦闘が交換条件だったと言えないこともないが、それを話したら逆に誤解を受けかねない。

『レミィにとってはその程度はささいなことなのでしょうね』

「そうですか……」

慧音さんの立場から見ると、私とレミィの関係は理解が難しいのかもしれない。実際には、あのフランが言っていたように、私自身が『空つぽ』であるがゆえの気安さが生んでいる関係でしかないのかもしれないのだが……。

『まあ霊夢自身があまり貸し借りとかを気にする性格ではないので、私もつい似たような振る舞いになっていますが……私たちと紅魔館との関係を気にすることはないと思います。慧音さんの立場も分かりますが』

そもそも向こうも慧音さんが寺子屋を運営していることを知らない可能性もある。私もあえてその点には触れていない。

「いや………すみません、余計なことを訊いてしまいました」

慧音さんは恐縮したように言う。

と、障子の外から声がした。

「慧音、いるか？」

「ああ、はい」

慧音さんが返事をする。と障子がからりと開いて妹紅が姿を現す。

「お、チビもいたのか」

『やあ、久しぶり………というほどでもないか』

「はは、今回はそうだな」

妹紅は快活な笑みを浮かべ、慧音さんに顔を向ける。

「これ、ちよつと里の知り合いから貰った。昼飯の足しにでもなるかと思つて持つてきた」

片手に下げていた風呂敷包みには野菜類がぎつしりと詰まっていた。

「わざわざありがとうございます」

慧音さんは包みを受け取ると、さりげない調子で言った。

「もし良ければ、お昼を一緒に……」

「ああ、ま……そうだな」

妹紅は軽い口調で返事をしているが、すこし表情がぎこちない。

『……それじゃあ慧音さん、私はそろそろ失礼することにします』

「待てよ、チビ」

妹紅が少し慌てたように言う。

「せっかくだから昼飯ぐらい付き合ってもいいじゃないか。その体だから、食事そのものが無理なのは分かっているが、話ぐらいするのはいいだろう?。」

『まあそうだが』

なんとなくここは遠慮したほうがいいのではという気がしたのだ。もしかすると、慧音さんは何か妹紅に個人的な相談があるのかもしれない。

「そうですよ、チビさん」

慧音さんもやや焦り気味の口調で言う。

「今後のこともありますし、いろいろとお話を聞きたいこともあります」

『そうですか……』

そう言われてしまうとこちらも断れなかったので、やや微妙な気分ではあったが、ふたりの昼食に同席することにした。

くその8へ続く

その8

八

昼食を終えて私とともに慧音さんの家を後にした妹紅は、里の中心に向かう川べりの道を歩きながら少し浮かない表情で言った。

「実は頼まれごとをしていて……これから里のはずれにある池に行くんだ。農業用の溜池なんだがな」

『溜池？ この季節に何をしにそんなところに』

「今日は朝方冷え込んだらしくて氷が張ったつというんでね。子供たちがその上で遊びたいらしい。ほら、靴の下に刃をつけて滑るやつがあるじゃないか」

『ああ、スケートだな』

「そう、それだ。だが、親としては子どもだけでそういう遊びをするのは心配らしいんだ。それで、すこし様子を見ていてくれないかって言われてね」

『なるほどな……まあ、いいじゃないか。病人を永遠亭に案内するぐらいだし、そういう人助けは妹紅にとってはやりがいのあることだろう？』

「いや、人助けそのものは別にいいんだが……わたしはその」

妹紅はきまり悪そうな顔になる。

「ちょっと子供が苦手なんだ」

『そうなのか』

すこし意外な気がした。

『そういう風には見えないがな』

「まあみんなそう言うが……嫌いとかそういうんじゃないかな。うまくこう、気持ちを通じ合えないというか。まあ、結局は子供の気持ちをつまぐ想像できてないってことなんだが」

『そうか……確かにこういうのは慣れみたいなものが必要ではあるな』

言葉だけではなかなか子供と通じ合うのはむずかしい。相手の心のある程度読み取って、それに正面から答えようとする気持ちになる」必要がある。

すると妹紅は立ち止まって、私に頭を下げた。

「なあ、チビ。悪いけどちょっと付き合ってくれないか。チビは先生をやれるぐらいだし、子供たちの相手には慣れているだろう。わたしだけだとどうにも自信がないんだ。なにかこう、面倒なことが起きるような気がして」

『おいおい、そんなことするなよ』

私はあわてて頭を下げている妹紅の顔に近づく。

『要は一緒に子供たちの様子を見ていればいいんだろ？ かまわないよ、どうせ帰りは夕方になるかもしれないって霊夢には言ってたんだ』

「恩に着る」

『恩なら私のほうがよっぽどある、そんなことは頼むからもう言わないでくれ』

妹紅は心からほっとしたような顔をした。よほど気掛かりだったのだろ。それにしても、妹紅ほどの人物にも苦手なものがあるとは、やはり不死人とはいえど人には変わりがないのだと改めて感じた。

里の本通りからすこしはずれたところに鍛冶屋があり、その工房の前に子供たちが集まっていた。

私たちがそこに近づいてゆくと、子供たちがめざとく私に気づいた。

「あつ、チビ先生もいる」「一緒に来るの、先生」「先生も滑るの？」

口々に言いながら私を周りから囲んで押し潰さんばかりだったの
で、私はあわてて少し上に浮き上がって言った。

『今日は慧音先生と相談があつたから里に来たんだ。そこで妹紅さんと会つたんでね、ちよつと手伝わせてもらつたことになつた』

歓声を上げる子供たちに、工房から出てきたひとりの男性が近づいてきて言った。

「こらこら、あんまり騒がしくするんじゃないよ。先生にご迷惑だ」
それから、私に向かって頭を下げた。

「どうも、初めまして。新太の父親の丹造です。先生のことは息子からよくうかがっております」

『ああ、新太くんの……』

あの虹の実験の時に質問をしてきた子だ。

お互いに挨拶を交わした後、妹紅に同行する件について了解を求めると、むしろこちらから改めてお願いいたしますと言われた。

「こつというのは本当は身内の誰かが行かにかいかんのですが、生憎ここのところ仕事のほうかたてこんで……、さりとて年寄りには少し荷が重いかと思つたもので、妹紅さんをお願いをした次第で。それに先生が加勢していただけるんなら、これ以上のことはないです」

こつして私たちは子供たちを引き連れ、里のはずれの池へと向かうことになった。

切れ切れになった雲の隙間から射し込むようになった光が、池の全面を覆う氷の表面に反射して、鈍い輝きをちりばめる。岸辺に盛られた土の上に立ち並んだ背の高い木々が池の周りを囲むように薄い壁を作り、その隙間の向こうにはだいぶ前に刈り入れが終わった田んぼが広がっている。

氷の上では子供たちがそれぞれが思うままに滑っていて、お互いに交わす高い声の中にとときどき笑い声が入り混じる。私はその子供たちの群れから少し離れた岸の近くで、すこし緊張した面持ちの女の子に身体をしっかりと握り締められていた。

『スケートは“ゆっくり歩く”のと一緒にだ。歩くときは必ずどちらかの片足で身体を支えている。スケートもいつもどちらか片足づつで滑る』

「で、でも片足だけじゃ前に行かないよ」

女の子は両足を震わせながら、おびえたような声を出す。彼女の両手は私の身体の両脇をがっちり握り締めている。

『先生がゆっくり引つ張ってあげる。左足に身体を載せるんだ、すこし身体を左側に……そうだ。それで片脚だけで立つ』

私は女の子の身体の揺れを防ぐために左右の側面に靈気の壁を張った。

『今度は右足だ。身体を反対側に……そうだ』

ゆっくりと引つ張りながら、左右の足を交互に出して滑る練習をする。

『片足づつ滑るのはできるようになってきたんじゃないか』

「う……うん、そうだね。大丈夫みたい」

『左の足に身体を移すとき、ほんの少し右足の先で氷を蹴って。つま先をちよつと外に開く感じで』

「こつ……かな」

女の子はおそろおそろ右足を後方に動かす。

『次は右足に移って、左足で蹴ってみよう』

繰り返すうちにタイミングが合ってきて、推進力が出てくる。

『いい感じだ、いったん向きを変えて戻るよ』

何度も往復しているうちに、女の子の動きはなめらかになってくる。私は引つ張る力を弱めていく。

そしてついに引つ張る力がゼロになる。ちゃんと女の子は上手に滑り続けている。

「なんかほんとに自分の足で滑ってるような気がする!」

それはそうだろう。

『実はね、先生はもう君のことは引っ張ってないんだよ』

「えっ、そうなの？」

『確かめたければ、手を離してみてご覧』

疑わしそうな顔つきで、けれどもそつと私の身体から指を離していく女の子。そしてその瞳が大きく見開かれる。

「ほんとだ！　これ、ほんとにわたしが自分で滑ってるの？」

『おめでとう、これでとりあえず私の授業は終わりだ』

「すごい！　すごいや、わたし滑ってるよ、先生！」

女の子は叫ぶように言いながら、心の底からの笑顔をみせてくれた。

自力で滑れない子たちへの指導をひと通り終えて岸边へ戻ってくると、草むらに座っていた妹紅がひどく奇妙なものを見ているような複雑な感じの視線を私に投げかけてきた。

『なんだよ妹紅、その顔は。一生懸命仕事をしてきた協力者に向けるものじゃない感じだぞ』

「いやいや……なんというか、分けがわからないものを見せられている気分だよ。本当に何者なんだ、お前さんは」

『だからそれは私自身が知りたいんだって』

「まあ分かっているが。それにしても、感心させられるよ」

『特別なことをやっているわけでもない。力の及ぶ範囲でやっているだけさ』

私は妹紅の隣に並んで座った。

「……ところで、チビ」

『うん、なんだ?』

「霊夢は、寺子屋の件については何と言っているんだ?」

『何って、別に何も。例によって好きなようにやればいいと』

「そうか……まあそうだろうな」

妹紅はかすかに息を吐いた。

『なんだ? 霊夢が何か心配してるかもしれないということか』

「いや、そういうんじゃないんだが。むしろ安心しているとは思っている意味、職を見つけたようなものだろうからな」

『職というのはおおげさだが……多少は人の役に立ちたいとは前か』

ら思っていたからな』

私はさっきの女の子の笑顔を思い出しながら付け加えた。

『わりと寺子屋の仕事は相性がいいようだ。子供たちもみんな素直だしな』

「チビが子供の言うことをきちんと受けとめるからだろっ」

そこで私はふと思い出した。あの黄色い髪の少女の言葉。

“そのお人形さんはね、魂がスカスカだから、誰の言うことでもいつも肯定的に受けとめるのよ”

『なあ、妹紅』

「なんだ？」

『妙なことを訊くと思うかも知れないが……私は相手をいつも自分の中に肯定的に受け容れようとしているところがあるらしいんだ。それは相手にとって果たして良いことなんだろうっか』

妹紅はすこし眼を見開いたが、やがて言った。

「そついう者を必要としている人間がたくさんいるのは確かだな」

氷の上ではしゃいでいる子供たちを見つめながら妹紅は言葉を継ぐ。

「だが……自分を鍛えようと思っている者、高みを目指そうとする

者にとつては、ときにはそれは誘惑になってしまうかもしれない。
言うなれば、休息の誘惑だ」

『休息の誘惑……』

「そうだ。山を登り続けているときに、疲れ果てて腰を降ろして休みたくなる。けれどもいったん腰を降ろしてしまうと、もう一度立ち上がるまでには時間がかかる。すべてを包み込んでくれるような優しさには、そういう誘惑がある」

『……………』

「だが、結局それは山を登っている者自身の問題なんだ。休むための場所がいないというわけでない。傷ついたときには休息も必要だしな」

『確かにな』

だが、休む場所が手近にあればその分だけ誘惑は強くなる。

『妹紅、私は……』

言いかけたそのとき、空に小さな閃光が輝き、一瞬の間を置いてドンと音がした。子供たちの動きがピタリと止まり、いつせいに空を見上げる。あとには縦に伸びる煙の筋がゆらめきながら残った。

「緊急信号だ！」

妹紅が慌てたように立ち上がる。

「チビ、すまない。子供たちを集めて、急いで里に戻ってくれないか。たぶん病人かけが人が出たんだろうと思うが、はつきりしたことが分からない状況では安全な里に帰するのが原則なんだ。わたしは先に行つて、事に当たる。任せていいか？」

『分かった。後は引き受けるよ』

「頼む。じゃあまた」

妹紅は一瞬にして身体を薄い炎に包むと、背に炎のようにゆらめく翼を拡げ、空へと飛び立ち、里の方角へと向かっていった。

くその9へ続くく

その9

九

私が子供たちの間を飛び回って岸に上がって里に帰るように言う
と、がっかりしたような表情を見せたものの、大半の子供たちは岸
に向かって集まり始めた。だが、一部の子供、とくに元気のいい数
人の男の子たちがなかなか言うことを聞いてくれない。

「どうして俺らまで帰んなきゃいけないの？」

『あの合図は里で何か大変なことが起きたしるしなんだ。もしかし
たらきみたちの家族の誰かが怪我をしたり病気で倒れたのかもしれ
ない』

「だったら誰かが里まで行って、何だったのか見てくればいいんだ
よ」

「そうだよ。俺らがみんな帰なくてもいいだろ？」

そんなことをしていたら三十分はかかる。それに、よく見ると氷
の状態もあまり良くない。天気が良くなってきたせいで少しずつ溶
け始めている。

『その間、何が起きたか分からないままで遊んでいても楽しくない
ぞ。どっちにしてもそろそろ引き揚げてもいい時間だ。お天気のせ

いで氷がだんだん溶けてきている。氷が割れて池の中に落ちたら大変だぞ』

「そんなヘマするかい」「おどかしたってダメさ」

男の子たちはさらに岸から離れていってしまふ。こうなると追いかけてまわしてもあまり意味がない。

年齢的には十歳前後なのだろうが、自我が強くなってきている反面、まだ社会性を十分に身につけてはいない。扱いがなかなか難しい時期だ。

かといって「腕ずく」で言うことを聞かせるというのもこの小さな人形の身にはやりにくい。たとえ霊力を使ったとしても人の身体を手加減しながら拘束するようなデリケートな作業はまだいまの私にはできない。

と、例の新太くんが私のそばに滑って近づいてきた。

「先生、あいつらは俺が連れて来ますから」

『だいじょうぶかい？ 三人もいるし、けっこうすばしこいから追いかけてこになると大変そうだ』

「なあに、一人づつなら引きずってでも連れてこれます。すこし手間がかかりますが、先生は岸で他の子たちを見ててください」

そう言つと、彼は池の奥の方へと滑っていった。

私はいったん岸に戻ると、集まっている子供たちに言った。

『いまちよつと戻ってこない子たちを新太くんが連れてくるからもう少し待っていてくれ。いなくなった子とかはいないか？ お互いに確かめてみてくれ』

やがて新太くんが男の子をひとり背中をひきずるようにして岸に連れてきた。つかまえられている男の子は離れようとしてもがくが、後ろの襟首をがっちりと掴まれているために抗うことができない。

「このまま靴を脱がしちゃって」

新太くんがそう言うと、何人かの女の子たちが引きづられてきた男の子を取り囲み、身体をおさえつけて足からスケート靴を引きぬいてしまう。こうなると男の子も諦めざるを得ない。

「よし、それじゃあと二人」

池の奥にとつて返そうとする新太くに私は声をかけた。

『ひとりじゃ大変なんじゃないか？ 誰かに手伝ってもらったほうがよくないか』

「いや、大勢で一度にやろうとすると向こうも意地になっちゃいますから。ひとりづつ片付けてくほうが、しかたねえかって気になつてくれます」

『そうか……』

たしかにそういうものかもしれない。

『だが、気をつけてな』

彼はうなずくと、池の奥にいる男の子たちのほうへとふたたび近づいていった。やがて残っていたふたりの男の子のうち、片方が新太くんに捕獲された。と、なにを思ったのか、残りのもう一人の子が池の中央の方へと出て行った。

わざわざ危険な方へ出て新太くんを挑発しているようだ。だが新太くんは、そちらにはかまわず捕まえた子をひきずってこちらの岸に向かい始める。

すると、挑発してる子はさらに氷の薄い池の中央へと向かってゆく。

『ちょっと小さい子たちを見てくれ。岸から離れないように』

私は年かさの子たちに声をかけてから、子供たちから離れ、岸からゆるやかな渦を描くように飛んで遠巻きに池の中央へと向かった。

予想していたとおり、池の中央部は氷が薄くなり始めていた。強い衝撃があれば割れる危険性もありそうだった。

「ほら、ここまで来てみなよ。捕まえられるかい」

新太くんに向かって挑発を続ける男の子の背後に向かって私は静かに接近していった。後ろからつかまえてしまえば、ある程度は動きを封じることができる。少なくとも危険の少ない岸の方へ移動させるぐらいは……。

と、男の子が私の方を振り向いた。

「えっ？」

慌てたのか男の子は姿勢をくずし、尻餅をつく恰好で氷の上に倒れた。同時に、氷の上に亀裂が入った。

『！』

亀裂から引き離さなければならない。私は男の子に一気に接近し、男の子の襟首をつかまえた。

その時、鈍い衝撃音とともに叫び声が上がった。

「新太ちゃん！」

叫び声は、新太くんがつかまえていた男の子のものだった。

その男の子から数歩ほどの位置に深緑色の大きな穴が空き、そこに新太くんの身体が沈みかけていた。

『……くっ』

私はまず全力で襟首をつかまえた子を引っ張り、亀裂から引き離すと言った。

『岸に戻りなさい。大きな子に、里に知らせて大人たちを呼んでくるように言いなさい！』

「は……」

私は返事を待たずに新太くんがはまっている穴へと全速力で向かった。

近づいてみると、穴はそれほど大きくなかったが、新太くんは穴の縁につかまって水中に落ちずにいるのがやっとだった。

おそらく、挑発していた男の子が転んだのを見て、とっさにこちらに向かおうとしたときに氷の薄いところを踏んでしまったのだらう。

「先生……」

新太くんの顔からは血の気が失せ、唇が紫色になっていた。

『待つてろ、いま引つ張り上げる』

私は新太くんの一方の腕を身体全体で抱え、全力で上に向かって引き上げた。

だが、冷たい水を吸ってしまった服に包まれた大柄な新太くんの身体は、私がどんなに頑張ってもわずかに浮き上がる程度で、どうしても引き上げることはできない。

と岸から声が聞こえてきた。

「先生！ わたしたちもいまそつちへ……！」

他の子供たちが集まってきて、こちらへ近づこうとしていた。

『だめだ！ 岸に戻りなさい！』

みんな驚いたように足を止める。

『この近くは氷が薄くなっている。下手に近づくと、君たちも落ちてしまう。岸に戻りなさい!』

「でも……!」

『里へは誰か知らせに行ってるのか?』

「は、はい…… 大人を連れてきてもらうように」

『そうか』

だが、全力で走ったとしても往復で三十分以上はかかるだろう。それまでもつかどうか。たとえこのまま支えていても、新太くんの身体が体温が奪われて致命的なことになるだろう。やはりどうにかして引き上げるか、それとも……。

そこでふと岸の周りに立っている木々が眼に入った。木の中にはかなり背の高い大木もあった。

私は新太くんの身体を支え続けながら子供たちに向かって言った。

『みんな、この近くから離れなさい。いまからその木を倒すから』

「木を……倒す?」

意識が薄くなりつつあるのか、新太くんがつぶやくように言う。

『そうだ。足場になるものがあれば他の子に手伝ってもらって君を引き上げることができる。そのために、岸からここに届く木を倒して橋を作る』

「できるん……ですか、そんなこと」

『やってみせる』

私は懷から精密制御用のお札を取り出した。新太くんの意識が残っている間に終わらせなければならぬ。

『もう少しだけ、頑張っていてくれよ』

くその10へ続く

その10

十

里でちよつとした買い物をしてきた風見幽香は、自分の住まいのある太陽の丘を目指し、ゆつくりと空中を移動していた。

そこで、ふとただならない気配を感じて周りを見回すと、里のはずれの池の方から波打つような強い靈気が発せられていた。

（あれは、靈夢……じゃなくてチビさんかしら）

池の方へと向かおうとしたとき、その行く手を遮るように大きく広がる金色の尾をもつ妖怪が現れた。

「あらまあ」

幽香はかすかに眉の間に皺をつくりつつ、口元に笑みを浮かべた。

「こんなところで出くわすとは奇遇ね、八雲の式神さん」

「そうだな。里に何か用があつたのか、風見幽香」

頭の左右に尖りをもつ白い帽子からこぼれる金色の前髪を揺らしながら、八雲藍は涼しい笑顔で問いかける。

「ええ。花の季節ももう終わってしまったし、ヒマだから編み物で
もしようかと思ってね」

幽香は手にした包みを示した。

「ほう、それはなかなか優雅な趣味だ」

「……ところで式神さんは、どうしてわたしの行く先を塞ごうとするのかしら」

「塞いでいるわけではない。ただ、ついだからあそこで起きていることを説明してやろうと思ったただけだ」

「まあ、せつかくのご好意だから聞いてあげないでもないけど。それで、何がどうしてるわけ？」

「遊んでいた里の子どもが池に落ちた。それをあなたも知っている例の『彼』が救おうとしている最中だ」

「なるほどね……なかなか『彼』にとっては厳しい状況かもね。弾幕で戦うのとは違って、あの身体では力仕事は不向きみたいだもの」

「その通りだ」

藍はうなずく。

「このままだと子供を救えるかどうかは五分五分というところかもしれない」

「それで、何？」

幽香はあからさまに不快そうな表情になる。

「あなたが出てきたのは、このわたしがその件に関わるのを阻止しようということかしら？」

「阻止する必要などないはずだ」

藍は表情を変えずに言う。

「普通、妖怪は人を助けたりはしない。もちろん、何か共通の利害というものがあれば別だが。しかし、人が引き起こした災いは人自身が処理するものだ。妖怪がそこに容喙する理由は何もない」

「洒落のつもり？ でもねえ、別にそんなことまで『きまり』に縛られる理由もないんじゃないかしら？」

幽香の目つきはさらに険しくなる。

「まああんたの主は物事のバランスってものを重んじる人みたいだけど、その理屈をすべてに当てはめるってのは無理があると思うわね」

すると、藍はいくぶん位置を後退させながら言う。

「あなたにも、『彼』の正体を見極めたいという気持ちがあるはずだ」

「！」

幽香は一瞬、小さな驚きを目元に浮かべる。

「ならば、手出しをしないほうが賢明だ。危機の時にその本質が現れるのは人も妖怪も……あるいはそのどちらでもないものも、同じだ」

「……お話は承ったけど、わたしはわたしの好きなようにさせてもらうわ」

「わたしもこれ以上のことは命じられてはいない。一戦交えるというのも悪くはないのだが、主の命に逆らうと式神は力が出ないのでね。では」

そう言つと藍は身をひるがえし、九つの尾を揺らしながら飛び去つていった。

「警告だけはしておく、というわけね。まあいいわ」

幽香は、靈気の波動が続く池に向かってあらためて近づいて行った。

靈気をまとわせた二枚のお札を繰り返し岸の大木の根元に撃ちつけながら、土を掘り崩す。その間、新太くんの身体が沈まないように彼の腕を抱えて引き上げ続ける。

思ったよりも根が深いのでなかなか木が傾いてくれない。かとい

って力任せに霊弾を浴びせるだけでは思った方向には木が倒れてくれないだろう。それに万が一子供たちに当たったりしてしまつては元も子もない。

ただ、私自身の霊力も無尽蔵というわけではない。このままお札を核にした霊弾を撃ち続けるのはいたずらに消耗を重ねるだけかもしれない……。

と、木の根元がぐらりとこちらに向かって傾き始めた。

だが、作業としてはむしろここからが厄介だった。木を倒すにしてもできるだけこの氷の穴のすぐ近くに倒さなくては意味が無い。それでもできるだけ足場として適切な位置にもつてくるためには、より精密な作業が必要だ。

私は土を掘るのをやめ、いったん二枚のお札を手元呼び戻してから、改めて木の上のほうへと飛ばし、幹そのものに巻きつけた。

『フーーーーー!』

意識を集中し、指先から送り出す力によって手元にお札を引き寄せる。梃子の原理を応用すれば、この程度の力でも木は十分に傾いてくれるはずだ。

木の幹がしなり、わずかにこちらに向かって傾く。だが、まだ倒れるところまではいかない。

お札との距離が遠いために、思ったような制御ができていない感じだった。加えるべき力の大きさ、方向、その加減を調整することができない。

もつと意識を外へ出し、お札の近くへと近づけることができないか……。

そこで不意に、言葉が浮かぶ。

“これは魂の緊縛を緩める道具。意識を緩め、内側から外に向かって広げる”

私の首にかけられているロケットの中の道具。

もしかしたら……この道具の作用が使えるかもしれない。だが、果たしてそんなに都合よく機能してくれるものだろうか？

分からない……分からないが。

私は首から下のほとんどが池に浸かったままの新太くんを見た。土色になっているその顔には死の影が忍び寄っている。もはや一刻の猶予もない。

左手で胸をさぐり、ロケットを開いた。そして、霊気の吸込口である人差し指の先を当てる。すると……。

ふわっと身体が広がったような感覚と共に、視界が上に移動した。

『！っ？』

意識が抜け出ている？

よく分からなかったが、お札への感覚は『近く』なったのは確か

だった。

これならうまく引き寄せられる……。

……？

あれ……なんだこれは。

私はここで何をしてるんだ？

『先生……帰ってきて』

なんだ？ 私のことか？

『先生、どこへ行ったの？ 帰ってきて……お願い。はやく帰ってきて！』

太陽の光を背にする形で空中に浮かび、下の状況を見守っていた幽香は、池に向かって倒れかかっている木の周辺に異様なゆらめきのようなものが表れていることに気づいた。

（あれは……？）

そのゆらめきの向こうに、何か人影のようなものが見える。

（……？）

影の正体を見極めようと幽香がゆらめきに近づこうとしたとき、突然空中に手が現れた。白い手袋をはめた女性の手だ。

「な……なによ？」

「近づいてはダメよ。あれはわたしたちにとっては、極めて危険なもの」

手の向こう側から声がする。

「わたしたちって……妖怪にとってはってこと？」

「幻想郷に属する全ての者にとってはという意味よ。とにかく、あの空間の異常が消えるまでは近づかないで頂戴。わたしにもあれは制御できないの」

「あなたがそこまで言うなんて、よっぼどのことね」

「ええ。よっぼどのことなの」

と、木がゆっくりとした動きで傾き、氷の穴のすぐそばに倒れた。そこへ、空中を矢のような速度で飛んできた人影がその木の上に降り立ち、池にはまっている男の子を一気に引き上げると、そのまま岸辺に運んでいった。

「どうやら主役がやってきたみたいね。いちおうこの場はこれでおしまい」

そうささやくように言うと、手はすっと消えていった。

幽香はふたたび下の光景に視線を移した。

すでにあの空間のゆらめきはなくなっていた。池の岸周辺では相変わらず騒ぎが続いていたが、どうやら事態は収束に向かっているようだった。里の方の道から何人かの大人たちが駆け足で近づいてきているのが見えた。

「……………」

幽香はいぶかしげな表情をしつつも、身を翻して東の山の方へと飛び去っていった。

くその11へ続くく

その11

十一

（先生、先生……！）（眼を覚まして、お願い）（先生！）

『あ………』

眼を開ける。と、子供たちの泣き顔が並ぶ中に、惘然とした表情の霊夢の顔があった。

『なんで………』

「なんでじゃないわよ」

霊夢は息を小さく吐いてから、周りを見回して言う。

「ほら、もう心配しなくていいわよ。ちゃんと眼を覚ましたから」

身体を起こし、周りを見回した。池の岸の草むらに座っている霊夢の膝の上に私はいた。

すると、周りから歓声が起こり、同時に泣き声も聞こえてきた。

「ごめんなさい………」

「先生、ごめんなさい……！」

見ると、さきほど岸に戻らずに逃げ回っていた男の子たちが私に向かつて頭をすりつけんばかりにして泣きながら謝っていた。

『新太くんは……？』

私が訊くと、霊夢が答えた。

「池に落ちてた男の子？ わたしが引つ張り上げて、とりあえず血行と体温を回復させる処置をしたわ。里から大人たちが来てすぐに運んでいったから、大丈夫でしょう。永遠亭にも連絡したそうだから。妹紅が急病人を送って帰ってきたらしいから、とんぼ返りで運んでいくでしょう」

『そうか、良かった』

それから私は泣いて謝り続ける男の子たちに向かって言った。

『自分の身を危うくすることは、ときに他の人の身を危うくすることもある。忘れないで欲しい。それと里に帰ってから、新太くんにちゃんと謝りなさい』

「はい……」「分かりました」「絶対、忘れません」

男の子たちは泣きはらした眼をこすりながら返事をした。

『よし、いい子だ。先生の教え子には悪い子なんかひとりもない。他のみんなも、この子たちを責めないであげてくれ、いいね』

はい、と他の子供たちが返事をする。

すると、その後ろから慧音さんが顔をのぞかせた。

「チビさん、すいません……いろいろと。お詫びはまた後ほどいたします。子供たちはわたしが連れて帰りますので、霊夢さんと一緒に神社にお戻りください」

『お詫びなんてむしろ、私のほうがしたいぐらいです。いまも言いましたが、子供たちを叱らないでやって下さい。もう十分に分かっているはずですから』

「ええ、心得ています」

慧音さんたちと子供たちに別れを告げ、私は霊夢に抱えられたまま空中に飛び立った。もうほとんど力が残っていなかったので、自力で飛ぶのは難しかった。

「それにしても毎度のことながら、いろいろとやってくれるわねえ」

霊夢は溜息交じりに言う。

『悪かった。しかし、子供の生命がかかっていたんでね。ただ、自分より何倍も重い物をどうこうするというのはこの身体では難しいようだ』

「そのようね。まあ木を倒して足場にするっていう考え方自体は悪くないと思うけど、手間がかかり過ぎるでしょう」

『それにしても、どうしてさっきの状況が分かったんだ？』

「子どもが池に落ちてるなんて知らなかったわよ。ただ、ちょっとあの周辺に異常な気配を感じたの。これまでに感じたことのないよ
うな」

『……今はそれはいいのか？』

「ええ。もう気配はなくなったから。でも、原因が気になるけど」

『関係があるかどうかは分からないが……』

私はレミィからもらったロケットとその作用、そしてさきほどの状況での現象について話した。

「それはつまり、ほん少しの間ではあっても『魂抜け』を起こしたのかもしれないってことね」

『そうだな……意識が木の方に向かって飛んでいった感じがしたかな』

「乱用は避けるべきね。魂の緊縛が緩むってことは、本当に抜け出る可能性もあるわけだから」

霊夢は少し考え込んでから、言葉を継いだ

「むしろ、そのレミリアのロケットは護符っていう方に意味があるのかもしれないわ。せつかくだから、そのまま着けておいて様子を見るのがいいでしょうね」

『分かった』

そういえば、森で出会ったあの少女のことについてはまだ話して
いなかった。だが、あのやりとりをわざわざ霊夢に話す必要がある
だろうか？ 下手をすれば、レミィとの折り合いを悪くするかもし
れない。とりあえず今は触れないでおこう。

傾きかけた陽射しの中を神社の境内に向かって降りながら、霊夢
が小さくつぶやいた。

「あー……なんか急に疲れてきた」

『里まで往復させたからな。本当にすまなかった』

「久々に異変かと思って緊張したのよ。その反動がちょっと来ただ
け。この程度でどうこうってわけじゃないから」

霊夢はそう言うと、腕の中で私の頭を撫でた。

「あなたの方こそ気絶するまで頑張ったんだもの、大変だったでし
よ」

『自分の非力さを思い知らされたよ。人を助けるために必要な力と
妖怪と戦う力はまるで別物だということを分かっていなかった』

「まあ、少なくとも力仕事は向かないわね」

そう言いながら霊夢は拝殿の脇に降り立つと、母屋へと向かう。
近くを走り抜ける風が周りの木々の枝を風が揺らし、ときおり枯れ
葉がかすかな音をたてながら足元を横切る。

玄関の近くまで来たとき、「ん？」と霊夢は眉をしかめた。

『どうした』

「良からぬ気配がするわ。ひどく悪いというほどじゃないけど確実に
良くはないモノの気配」

『なんだそれは』

玄関から茶の間に入ると、掘りごたつから白い帽子を被った金髪
の少女が顔を出していた。

「お疲れさまでしたね、お二人さん」

「また人の家に勝手に上がりこんで……ここはあんたの別荘じゃないのよ」

すると少女は、クスリと笑って答える。

「あなたがごたつの火も消さずにすごい勢いで飛び出して行ったから、お留守番をしてあげてたんじゃないの。文句を言われるのはちよつと悲しいわ」

声はやはり同じだった。

『……紫さんですよ？』

「そうよ、チビちゃん。もしかしてけっこう若返って見えた？」

「伸びても縮んでも変わりやしないわよ」

霊夢はぶつぶつ言いながら紫さんの向かい側に座る。

「ときどき妖怪だつてことを自分でも忘れそうになるから、こついう変化をつけてみることも必要なのよ」

人の姿をしていると、そんなこともあるのかもしれない。

「それで？ 何か用があるの？」

「ええ。ちょっとした提案があるの」

境界を操る妖怪、八雲紫さんは微笑をたたえながらあっさりとした調子で言う。

「二人で結界の外に出てみない？」

くその12へ続くく

その12

十二

「幻想郷の中であなたの正体に関する手がかりを見つけるのはもう難しいでしょう？　どういう経緯で結界を超えて入ってきたかは分かっただけ、それ以前に関しては知りようがないものね」

『それは確かにその通りですね』

私は提案そのものよりも、紫さん自身がこの話をもってきた意味について考えていた。彼女の能力からしてみれば提案を実現するのは容易なことではあるうが、それは幻想郷を成立させているルールを揺るがすことにはならないのだろうか。

「このあいだの無縁塚での件があったから、わたしはあなたがここに来た経緯についてあらためて考えてみたの。そして出た結論はね……チビちゃんは、おそらく正面玄関から入ってきたんだろう、ということ」

『正面玄関？』

「ええ。あなたはそのお人形とともに無縁塚に入ってきたということとらしいけれど、それは見かけ上のことだとわたしは思っているの。どうしてかという、無縁塚のあたりは結界の『裏口』に当たるの。あれは博麗神社という『正面玄関』を設けたからこそできてしまっ

た、対に当たるもう一方の端なのよ。そして、この二つは外側から見るとひとつの点の表と裏のようなもの。あそこが博麗神社から見てちょうど真西にあたる位置にあるのも偶然ではないの」

「じゃあ、チビは神社に入ってきたのに、結界の作りの上ではすぐ裏に張り付いてる無縁塚に出てきたってこと？」

霊夢が問うと、紫さんは得たりという表情でうなずく。

「ええ。たぶん例の悪霊のたぐいの力が結界を不安定にしていた上に、人形という『境界を渡る橋』になるものだったからそちら側に引き込まれたんでしょう。最終的には人形と引き離されたチビちゃんの魂だけが玄関に戻ってきて、あなたの身体へとたどりついたわけ。そういう経路を辿っているからこそ、建物の結界も意味を成さなかったのよ」

「……それで、正面から入ってきたことがそんなに重要な？」

「もちろんです」

紫さんは私に視線を戻す。

「正面から入ってきたというのは、外の世界の博麗神社からやって来たのと同じことだから。つまり、少なくとも以前のチビちゃんに関わる何者かは、その神社を目指してやって来たと考えられるわ」

『外の世界でそうした行動をとった人物を探せば、それが私の過去につながる者だというわけですね』

「その可能性は高いでしょう」

すると霊夢が憮然とした表情で言う。

「話はだいたい分かったけど、わたしたちが境界の外に出て、その後戻ってこられる保証があるわけ？」

紫さんは首をかしげる。

「保証って……外に出てまた戻るくらい別になんでもないことだけ」

「境界を自在に操ることのできるあんたにとってはね。でもわたしとチビは違う。わたしはたぶん外側からじゃ何もできないわ」

「……つまりわたしが結界の出入りに協力すること自体が胡散臭いと感じるのね？」

苦笑を浮かべる少女。

「たしかにそういう意味での客観的な保証はありませんねえ」

「博麗大結界は個人の都合でいじっていいモノじゃないってあんた自身がよく言ってたじゃない。今回は例外だっていうの？」

「そうねえ……」

考えこむような顔の紫さんに、私はあえて訊ねてみた。

『つまり私の正体を知ることのほうが、より優先されるということですか？』

一瞬、紫さんの瞳が見開かれる。その間に彼女の中でどのような演算処理が実行されたかは知りようもない。が、出力結果は予想通りだった。

「おっしやる通りよ」

彼女は静かな笑顔で答えた。

「わたしもあなたの正体を知りたい。それも、できるだけ正確にね」

夕方近くになって、魔理沙とアリス、それに妹紅が相次いで神社にやってきた。妹紅は池での一件について、私に負担をかけてしまったと何度も謝ったが、状況を甘く見ていたのはむしろ私の方だった。であり、彼女に非はない。

『自分の力量というものを過大評価していたよ。すべての原因はそこにある』

「まあお前さんらしい考え方だが……親たちからも申し訳なかったと伝えて欲しいと言われたよ」

妹紅はお詫びとお礼を兼ねて里の人々からいろいろ預かってきたといって大量の食材を持ってきた。霊夢と魔理沙はそれを料理するために台所に入り、茶の間にはアリスと妹紅が残った。アリスはいつものように私の身体の点検をしてくれたあと、レミィから

借りたロケットについても彼女なりの所見を述べてくれた。

「けっこう手が込んでいるし、それにかなり昔に作られた物だわ。たぶんパチュリーが関わったものじゃないでしょうね。開けてみていい？」

『ああ』

アリスは丁寧な手つきでロケットの蓋を開け、それから眼を細めた。

「これは……ずいぶんと念の入った仕掛けね。魔法円に刻まれている呪文が読めないように隠蔽術式がかけられているわ」

『そうか？ 私には文字自体は見えたが』

「たぶん肉体を持たないチビさんには効かないのよ。ただ……そうね」

ロケットの中の水晶盤に指先をそつと触れる。

「……確かに触れている者の精神を穏やかにするような、そういう作用はあるみたいね。レミリアが言っていたという話には間違いはないわ。護符としての機能もあるようね。具体的にどの程度の防御力があるかまでは分からないけれど」

するとそばで見ていた妹紅が感心したように言う。

「それにしてもこれ自体が相当に高級な宝飾品という感じだな。外側に使われている宝石もかなり上物じゃないか？」

「そうね。古くて、しかも品質のいいものを使っているわ。そういう宝石は力を込めやすいし、それを元に組まれた術式は壊れにくい頑丈な作りになる。だから本来はこの手のものは封印用の魔法によく使われるんだけど……護符の構成にも適しているのは確かね。力を遮ったり、はね返したりする作用が基本だから」

「しかし、それほどの物を贈る理由として、酒の代わりになるからというのは少々こじつけっぽいな……」

妹紅は頬杖をつく。

「紅魔館の主がそこまでチビに肩入れすることを、周りはどう見てるか少し気になるところだ」

そこで私は試しに訊いてみた。

『妹紅自身はどう見てる？』

「そつだな。まあひとことで言えば、『怪しい』な」

『……………』 「……………」

私とアリスは顔を見合わせる。

「これまでのチビとの関係を考えに入れたとしても、見返りなしにそこまでする理由があるとは思えない」

妹紅の目付きは真剣だった。

「それに、何か気に入った着想を得たら、自分自身が再び異変の源になることにためらいはないだろう。その材料としてチビが利用される可能性も無いわけではない」

と、引き戸がガタガタと鳴り、つま先で開きながら魔理沙が瓶と陶器類を抱えて入ってくる。

「そのときはそのときなんじゃないか？」

魔理沙はこたつ板の上に取皿と猪口を並べ、その中央に八卦炉を置いて発火させる。

『なんだ、聞いてたのか』

「妹紅の声は通るからな。ま、あんまり大人しくしていると溜まってくるものだってあるから、限界を超えたら思う存分吐き出してもらうのがいいぜ」

「わたしもまったく構わないけど」

続いて鍋を持って入ってきた霊夢が、八卦炉の上に鍋を据える。

「向こうが仕掛けてきたら、それ相応のことはやらせてもらうわよ。その手のことに関してはお互いに遠慮しないのがわたしたちの決まりだから」

「それを聞いてすこし安心した」

妹紅は笑みを浮かべる。

「関係をもつても馴れ合いにはならないというわけだな」

二人は向かい合う形で座り、こたつの四方が埋まる。私は霊夢の膝の上に収まった。

「だが酒は飲むぜ。どんな奴とでも」

魔理沙はそれぞれの猪口に酒を注ぎ、最後に自分の前の猪口に手酌で注いだ。

「ま、とりあえずチビが今回の試練をくぐりぬけたことを祝して乾杯だ」

四人はそれぞれに口元で猪口を傾ける。

中身をいち早く飲み干した魔理沙が言う。

「しかし、レミリアの言うことにも一理はあるぜ。こついつときに酔えない奴がいるのはちょっと残念ではあるからな」

『だが今回はこれを使うのは遠慮しておくよ』

私は蓋を閉じたままのロケットを懷にしまう。

『今日はもうこれ以上何か問題を起こしたくはないからな』

「それに、本当の試練はまだこれからだしねえ」

霊夢のぼやくような一言に、妹紅は片眉を上げる。

「というと？」

「帰ってきたとき紫がいてね……」

「霊夢、わたしを人質にしろ」

「人質？」

「そうだ。お前らだけで行くのは絶対に危ない。あのスキマ妖怪は、お前らをまるごと外の世界に放り出すぐらい平気でするぜ」

魔理沙は熱心に言う。

「わたしを連れていけば、その分帰って来れる可能性は高くなる。人が二人も消えたとなれば少なくとも怪しむやつは多くなる」

「それはそうでしょうけど……」

アリスは心配そうに言う。

「人数が多いとかえって面倒なことになるかもしれないわよ。途中ではぐれたりして」

「しかし、霊夢とチビだけで行くのは別の意味で危険ではあるな」

妹紅は猪口の底を見つめる。

「結界の外に出たら能力はどうなるんだ、霊夢？」

「それは紫に訊いたわ。基本的には外の世界の常識に沿う形になる
って」

霊夢はこともなげに応える。

「当然、空を飛んだり弾幕を飛ばしたりはできない。神降ろしもた
ぶん難しいわね」

「チビも同じだな？」

妹紅が確かめるように訊く。

「能力どころか身動きもできないみたいね。人形が自分の意志で動
くなんてことは外の世界じゃあり得ないことだし。ただ、わたしと
チビの間で話をすることはできるでしょうって。それは傍から見た
限りじゃ常識の範囲内だから」

「魔法が使えなくても、わたしにはいろいろと個人的技術があるぜ。
優れた探索者としての能力もそのひとつだ」

魔理沙が言うと、アリスは苦笑する。

「それはむしろ侵入者としての能力じゃないの？」

「しかしまあ、同行する資格をもっているのは魔理沙ぐらいしかい
ないだろう」

と妹紅。

「普通の人間でなければ結界を越えられないだろうからな。同行者をつけるということについて、八雲紫がどう反応するか見てみるのもいいんじゃないか？」

そこでようやく私は口をはさむことができた。

『どうも外に行くこと自体はすでに前提になってるような気がするが……』

「だって、行くんでしょ？」

と霊夢。

『もちろん、手がかりが見つかる可能性がある以上は行きたい。だが、自分が知らない別世界に裸同然で飛び込むことになるんだぞ？ そこらへんはちゃんと考えているのか？』

「全然考えてないわ。まったく知らないモノを相手にするのは、特別なことじゃないもの。吸血鬼も冥界の亡霊も月の住人も、会っただけでまるで知らなかったし」

「そうだな、それは普通だぜ」

魔理沙はうなずく。

「知らないものはその場ですぐ知ってるものになるから、問題ないだろう」

酒を飲んで気が大きくなっている、ということでもないらしい。
やはり彼女たちは普通の人間の物差しでは測れないものを持っているのだろう。

夜が更けて、寝間に人数分の布団が敷かれたあと、妹紅と魔理沙が先にやって来て寝支度をはじめた。妹紅は相当地酔ってしまったらしく、魔理沙に手伝ってもらいながら服を脱ぎ、寝床に入った。

私が柱の横でおとなしく待機していると、下着だけになった魔理沙がいきなり眼の前に現れた。あわてて視線を下に向けると、両手で抱き上げられる。

「チビ、お前……」

声が低くなる。

「フランに言われたこと、気にしてんじゃないだろうな」

『気にしてないが、意味を考えてはいる』

私は眼を閉じたまま答えた。

「わたしは自分の好きなようにやっているだけだぜ。それは是非とも覚えていてくれよ」

『……分かってるさ』

「それとな……」

息を深く吸い込む音が聞こえた。

「『好き』とかいう言葉を軽々しく使ってはいけないぜ。お姉さんからの忠告だ」

それから私の身体を元の場所に下ろすと軽い口調で「おやすみー」と言っただけで入っていった。

『おやすみ』

魔理沙の耳に私の声がどう聞こえているかはあえて考えないことにした。

やがて片付けを終えたらしいアリスと霊夢がやって来た。アリスは霊夢に白い寝間着を借りて着替え、霊夢も同じ寝間着をもう一着出した。

アリスは私のそばにやってきて、外の世界では霊夢や魔理沙に無茶をさせないようにね、と言った。

「たぶんあなたが不自由な分、頑張ろうとするだろうから……」

『かもしれないな。ただ、こちらの言うことを聞いてもらえるかどうかは分からない。子供たちの行動も抑えられないぐらいだからな』

「あら、昼間の件が尾を引いてるの？　だいじょうぶよ、あの二人は」

アリスは優しく微笑むと、小声で付け加えた。

「その点は貴方は自信を持っていはいはずよ」

おやすみを言い合ってアリスが床に就くと、着替えた霊夢がやって来て私を抱き上げた。いつもは枕の脇に横たえられるのだが、霊夢は私を胸に抱いたまま布団の中に入った。

「……………」

しばらく黙ったままだったが、私は眠くならなかった。霊夢が目覚めたままだったからだ。そのことはお互いに分かるため、私は待った。

やがて霊夢はぼつりと言った。

「わたしはわたしのために行くんだからね」

『そうか』

「……………」

『おやすみ、霊夢』

やがて穏やかな闇が、私たちを包んだ。

くその13に続く

その13

十三

数日後の早朝、私と霊夢は魔理沙とともに博麗神社の拝殿の前にいた。

魔理沙の同行に関しては紫さんはあつさり承知し、ただし髪の毛を染めることを条件とした。金髪のままでは目立ちすぎるということだった。

服装もあらかじめ用意された。霊夢はいつもは後ろでまとめている髪を下ろし、セーターの上にダウンジャケット、下はジーンズをはいている。一方、魔理沙はグレーの厚手のコートを着こみ、頭には同系色のニット帽を被っていた。髪が濃い褐色に染められているので、別人のようだった。

空は晴れているが、空気はだいぶ冷えている。多少風もあるので二人とも少し寒そうな表情だ。

「紫がよこしたこの服、保護色って感じだぜ。外の世界には、女の子をとって食おうとするようなやつがうようよいるのか？」

ある意味では当たっている。いつもの格好のままで街中に出て行ったら、人だかりはできないまでも視線が集中するのは避けられないだろう。

「はつきりした色を好まない人が多いのかもね。特別な人だけが色のついた服を着るのかも」

霊夢も文句があるというほどではないにしても違和感はあるらしい。

『おそらく紫さんは二人が社会人に見えるような服を選んでくれたんだよ』

「シャカイジン？　なんだそれは。職業の一種か？」

魔理沙がニット帽からはみ出る前髪を左右に分けながら訊く。

『何かの職業について自活している人を指す言葉だ。簡単にいえば大人だということさ』

「わたしはすでに大人だぜ」

むっとしたような顔をする。

『ふだん魔理沙が着ているような服を外の世界の大人が着ている可能性は低いんだよ。見た目で怪しまれては行動しづらい。周りは知らない人たちばかりなんだからな』

と、いきなり眼の前に白い帽子を被った紫さんの顔が現れた。

「相変わらずチビちゃんが的確な解説をつけてくれるので助かるわ」

『おはようございます、紫さん』

「おはようございます。あなたは本当にいつも礼儀正しい人ねえ」

全身を空間の裂け目から出して石畳の上に降り立った紫さんは優雅に微笑む。今日の彼女は大人バージョンだ。

『単なる習慣ですよ』

「妖怪にきちんと挨拶する人なんて滅多にいないわ。その二人を見れば分かると思うけど」

「前触れもなしに出てくるような奴に挨拶するほど人間が出来てないぜ」

魔理沙はなぜか胸を張る。さつきはすでに大人だと言っていたのに。

「むしろあなたにとっては礼儀正しくされるとかえって困るんじゃないの？ 一種の言祝ぎだものね」

と霊夢が真顔で言う。なるほど、そういう見方もあるわけだ。

紫さんはそれには答えず、私の服を見て言う。

「そういえば、そのチビちゃんの服は最初に着ていたという巫女服ね？」

「そうよ。手がかりを探すからには、元の通りの服がいいと思ったから」

霊夢が答える。

「では、気づいてくれたご褒美にこれを差し上げます」

紫さんは霊夢に封筒を手渡す。中身を見た霊夢は首をかしげる。

「何これ……にほんぎんこうけん？」

「日本銀行券は日本の中央銀行が発行している正式な貨幣。外の世界ではこれがないと何もできないから。小銭も入ってます」

「外の世界の金か？」

魔理沙が驚いたように紫さんを見る。

「あとで返せなんて言わないだろうな？」

大人の発言とはとても思えない。

「余ったら返してもらっわ。幻想郷では役に立たない物ですからね。あと、あなたにはこれ」

紫さんは手提げの紙袋を渡す。

「中にも何枚か同じようなものが入ってるわ。荷物が増えたら使いなさい。これは外の世界の店が買い物客にくれる袋なの。こういうものを持ってる、案外それらしく見えるから」

「ふうん」

魔理沙はあまり意味が分からない様子だが、私から見ると用意周

到としか言いようがない。

「さて、そろそろ出かける時間ですよ」

紫さんは、石畳の向こうの鳥居を指さす。

「あの鳥居の中央に通路を作ります。今日の日の入りまでに戻ってきて頂戴。半日で得られる情報は限りがあるかもしれないけど、不十分ならまた後日考えましょう」

「向こう側の入り口にはなにか目印があるの？」

霊夢が訊くと、紫さんは答えた。

「見かけは違うけど鳥居があります。正午を過ぎてからそこに入れば戻って来られるわ」

私たちは鳥居の中央に向った。

「気をつけてね」

紫さんの声に、私が振り返って会釈しようとしたそのとき、ふっといきなり「画面」が切り替わった。

「うおっ！」

魔理沙が叫び声を上げ、小さく後ずさって周囲を見回す。同じ山中ではあったが、一瞬前とは明らかに違った風景が広がっていた。眼下に広がる緑色の裾野の向こうには白っぽい建物の群れが見える。幻想郷の人里にはあり得ない、近代的な街の造型だ。

「やけにあつさり出たわね……え、なに？」

霊夢は胸に抱いていてたチビ霊夢の器である人形を見る。

「ああ……そうか、動けないんだものね」

そう言つと、人形の首を回して正面に向ける。

「眼は視えるの？ ……そう、じゃあ周りの様子は分かるわけね」

「霊夢、何ぶつぶつ言ってるんだ？」

魔理沙が不審そうな顔をする。

「……やっぱりチビの声はわたしにしか聞こえないみたい」

「そうなのか？ もしかして直かに触ると聞こえるのかな。チビ、何かしゃべってみるよ」

そう言つて、魔理沙は人形の頬に手を触れるが、やがて諦めたように手を離れた。

「わたしには聞こえないな。ちえっ」

「……わたしと魔理沙の両方に声が聞こえると、人形と話ができる

つていう事実を共有してしまうからだろうって。それはこの世界の常識に反するのよ」

「霊夢とだけならいいのか」

「傍からはわたしが独り言を言ってるようにしか見えないから、それは問題ないのよ」

「不自由なんだな、外の世界は。ところで、ここもいちおう神社なのか？」

「そのようね。神社というより廃屋って感じだけど。でも、たぶんこれがこちらの世界の博麗神社ということみたいね」

霊夢は少し痛ましいものを見るような表情で森に囲まれた小さな境内の正面奥にある枯れ果てたような拝殿を見つめる。全体の大きさは四メートル四方もあるかないかという所だ。建物としての形はなんとか保っているものの、壁はあちこち破れ、銅葺きの屋根も腐食が進んでいる。

「せっかくだから今日の旅の無事を願って参拝しようぜ」

魔理沙の言葉に、霊夢はすこし意外そうな顔をする。

「あら、魔理沙にしてはすいぶん殊勝なことを言うのね」

「修行嫌いの巫女に言われたくないな」

拝殿に参拝したあと、二人は神社の境内から出て道を降り始めた。道といっても土が踏み固められたような跡がかるうじてつながって

いる、その程度のものでしかない。だが二人はとくにためらいのない足取りで降りてゆく。

「しかし、街までずっと歩いて行くのか？　ちょっとしんどそうだな」

「……広い道に出れば、何か乗り物が見つかるかもしれないって」

しばらく降りると、舗装された道に出た。そして、すぐそばにバス停留所の標識があった。二メートルほどの高さでオレンジ色の円板と長方形の時刻表示板が取り付けられている。

「これは前に見たことがあるな。たいていは横倒しになって転がってるんだが」

円板の名称表示には「上坂下」とレタリングで書かれていた。

「……ここに乗合バスとかいうのが決められた時刻に来るんだそうよ。それに乗ればたぶん街のほうまで出られるんじゃないかって」

霊夢は標識を見ながら言う。

「魔理沙、あなた霖之助さんから時計を借りたって言ってたわよね？」

「ああ、持ってきた。自動巻きだとかいう小さい奴だ。数字もろくについてないショボいやつだけど」

魔理沙はポケットから男物の腕時計を取り出した。

「七時三十分ちょい過ぎだぜ」

「ちょうど七時三十七分というのがあるみたい。それに乗って行きましょう」

魔理沙が眉を寄せる。

「なんだか、あらかじめ作られた予定に沿った行動をとらされてるような気がしないでもないな」

「別にかまわないわよ。紫に何か思惑があるんならこちらも相應のやりかたがあるわ」

霊夢は薄く笑みを浮かべる。

やがて、道の向こう側から古ぼけた感じのバスの車両がやって来て、エアブレイキの排気音を響かせながら、停留所に止まった。そして少女たちを乗り込ませると、ドアを閉じてエンジンの音を残しつつ坂道を街へ向かって下り始めた。

～その14へ続く～

その14

十四

『落ち着いてるな、霊夢』

「そう？ まあ、そうね……わたしももう少し勝手が違うかなと思っただけ」

私たちはバスの最後部の座席に座っている。隣の魔理沙は窓に張りついて道に沿って次第に変わってゆく光景に見入っていた。中心街まではまだ距離があるためか、他には乗客はいない。

「あんまり驚いていないのが自分でもすこし不思議かな」

霊夢は私の頭を撫でながらつぶやく。

「ただ、周りがすこしだけ遠く感じるこっぴどい感じって、懐かしい気がする……」

『そうか』

それは私が幻想郷に来たばかりのときの印象に近いのかもしれないが、おそらく霊夢が言っているのは、子供の頃のことだろう。言葉にできない、思考では捉えきれないものに包まれていた時代。それは、言わば神様に抱かれていた時間だった。

私はふとあの新太くんが言っていた『虹は龍神様の通り道』という話を思い出す。世界の捉え方は、さまざまだ。

「でも、あなたがいなかったら、そんな風に考える余裕はなかったかもしれない。自分が夢の中にいるような、ふわふわした感じになつて……。両方の世界を知っているあなたがわたしを繋ぎとめてくれるのよ」

『それこそ境界上の存在というわけか……』

バスが停まり、制服を来た若い女の子が二人と、年配の女性がひとりで乗り込んでくる。

『ここから先は、何かあったら独り言風に言ってくれ。そうしないと、周りの人が奇妙に思うだろうからな』

「なんか難しいわねえ」

霊夢は苦笑する。

「まあ少しおかしい奴だと思われてもわたしはかまわないけど」

駅前はずうど朝の通勤通学の時間帯で、ターミナルに横付けされたバスからは続々と人々が吐き出されて駅に向かい、逆に駅から吐き出された人々はターミナルへと流れてゆく。

「ここらへんの連中はかなり子作りに精を出したんだな」

交錯する人々の流れの中で魔理沙が言う。

「あんたが言うつと冗談に聞こえないから恐ろしいわ……」

霊夢は憮然とした表情で返す。

「冗談に決まってるだろうが。人の数が多いことはちゃんと知ってたぜ。それより、まるで本の中身が飛び出してばらまかれたような感じだな。そこらじゅうが字だらけだ。しかも意味がまったく分かんらん」

魔理沙は周りを見回す。

「それに、車の中から見てたらどこの店も入り口が鉄板で塞がれてたぜ。これは店をたたんだってことなのか？」

「……朝早くから店を開いてるところは少ないんですって。それよりあんまりそうやって物珍しそうに見ないで。目立ってるわよ」

霊夢はすこしうんざりしたような顔で魔理沙の手を引く。二人は人々の視線を集めつつも、人ごみから抜け出て駅前ロータリーから離れていった。

「わたしは別に目立とうとしてるわけじゃない」

「……外国人だと思われてる可能性があるって、チビが言ってるわ。髪を染めたぐらいじゃ誤魔化しきれないのかもね」

「わたしは生粋の大和民族だぜ。知っての通り、和食派だしな」

「そういえば、朝が早かったから食事してなかったわね。魔理沙は？」

「当然してないぜ。真っ暗なうちから起きてたからな」

「どこが当然なんだからよく分からないけど、とりあえず食事ができるところを……ん、ああ……あれ？」

霊夢は駅前通りの向こう側に暖簾が出ている店に顔を向ける。

「何だ、霊夢」

「食事するならあそこあたりがいいかもって、チビが」

シャッターを降ろしている周囲の店に比べると、その素朴かつ古くさが滲み出る店構えはひどく浮いている印象があり、営業しているのかどうか疑わしい感じだった。だが、店に近づいてみると、入り口には「朝食サービスメニュー実施中」と貼り紙が出ている。

「こんにちは……」

「はい、いらっしゃいー」

すこし掠れた感じの、しかししっかりとした響きの男性の声が返ってきた。

「空いてるお席へどうぞー」

とは言っても少々くたびれた感じの店内は右にテーブル席が二つ、左側に厨房を前にした横長のカウンター席という至ってシンプルな構造で、客は他に誰もいない。

だが霊夢は無造作にすたすたと歩いて行ってカウンターの席の中央に席を占め、魔理沙もその横の席に並んで座った。

髪も眉もかなり白くなっている店の主人らしき人物はカウンター越しに湯のみに入ったお茶を出すと、ふたりの手元に置かれているメニューを指し示して言った。

「朝食はこちらになってます。あ、お荷物は横の席に置いて下さって結構ですよ」

「わたし、この焼き鮭定食をお願いします」

と霊夢が言う。

すると、魔理沙は内容確かめるように横からメニューを覗き込むと、主人に向かって訊ねた。

「このご飯大盛りってのは、何割ぐらい多くなるんだ？」

「えっ？ まっ、そうだね……三割以上五割未満ってところかね」

「では五割未満の大盛りでわたしも焼き鮭定食をお願いするぜ」

「了解しましたっ」

主人は愉快そうに言うと、書き終えた伝票を置いて、調理にかか
る。

「それで、どこから当たる？ 人形のことを闇雲に訊いて回っても
効率が悪そうだ」

「……街とのからみだと神社のほうじゃないのかって」

霊夢はちらりと店主の背中を見て、付け加える。

「そういうことみたいよ。あそこを知ってる人っていうことになれ
ばこの街の中の人でも限られるだろうって」

「そうか？ しかしあそこにはさっき乗ったバスも停まるわけだし、
案外知られてるんじゃないか？」

「うーん……」

ややあつて、カウンターにトレイに載せられた食事がふたり分載
せられた。

「はい、こっちが普通盛り、こっちがご飯五割増しの焼き鮭定食で
す」

「おっ、早いな」

魔理沙はトレイを受け取りながら訊ねる。

「ご主人、東の山の端っこにあるボロい神社のこと知ってるかい」

すると店主はすこし驚いたような顔をした。

「神社？　へえ、あんたらそんなことに興味があるのかい」

「たぶん土地の名前は『かみさかした』だと思っんですけど……その近くにあるんです」

霊夢が補足して言う。

「ああ、上の坂に下って書く奴な。神社というのは知らんけど、場所は知ってるよ。あそこには山の入口を守る神様がいて話ばかり聞いたことがあるけどな。あそこを素通りすると祟られるから、バス停があるんだとか」

「面白いな。ご主人もそういう話が好きなのか？」

魔理沙が味噌汁をすすりながら訊くと、いやいや、と手を振りながら店主は答えた。

「近くに仏壇屋があつて、その親父から聞いたのさ。滝山っていうんだけどね」

表通りから一本奥の通りにあつたその店は、先ほどの食堂に負けず劣らず古めかしい感じの店構えで、褐色に塗られた木造の建物の入り口に掲げられている木製の看板には店名が右から左に向かって『滝山仏壇店』と刻まれている。まだ店は開けていないようだった

が入り口の近くで掃除をしていた年配の男性に訊いてみると、さきほどの話に出た滝山氏当人だということが分かった。すでに店の経営からは退いていてという滝山氏は、二人を裏口から招き入れると、店の裏手にある離れに案内し、縁側でお茶まで出してくれた。

「あそこは神社が建てられる前は道祖神を祀っていた場所だと言われているんですよ。まあ隣村との境界ということもあるんですが、神々や妖かしたちが住まう領域と人の住む領域を分かつための目印ということでもあります」

「ははあ……」

魔理沙とともに縁側に座った霊夢はお茶をすすりながら神妙な顔で耳を傾ける。

「道祖神の御神体にあたるものは残っていませんが、人形が御神体だったという話もあります。様々な災厄を防いでくれる身代わりとしてね。また、別の話では、その人形を依り代に神様を呼び出して、物の怪のたぐいを退治してもらったという話もあるようです」

「……………」

二人は顔を見合わせる。

すると滝山氏は微笑んで言葉を足す。

「いや、お持ちになっているその人形に無理に結びつけたわけではないんですが、人形がヒトが神聖な存在というものに人格を重ねて意識するようになる上できわめて重要だったのは間違いないんですよ。まあ、言うなれば神々と対面するための仲立ちとして一定の役

割を果たしてきたということです。実はこのあたりの話はわたしの知り合いの仏師からのまた聞きですが」

「ブッシ？」

首を傾げた魔理沙に、霊夢が短く説明する。

「仏像を彫る人のことよ」

滝山氏は霊夢の言葉にその通りです、とうなずき、その仏師がもととは神社で使う神具類などの制作をする家の血筋だったらしいとも話した。

「ところで、実はわたしからもひとつうかがいたいのですが……」

「はい、なんでしょう」

霊夢は背筋を伸ばす。

「そのお人形は……どこで手に入れられたのですか？」

滝山氏は霊夢の抱いているチビ霊夢を眼で示して訊ねる。

「ええと、知り合いから譲ってもらったんです」

「相手はけっこうなお金持ちのお嬢様だぜ」

と魔理沙が言わでものことを付け加える。

「そうですか……いや、実はその仏師の息子が巫女の人形を作って

いるという話を聞いたことがあったもので、そのお人形の作り手について何かご存知だったら教えていただきたいなと思ったのですが……」

「！……その仏師さんのお名前はなんていうんですか？」

霊夢は抑えた声で訊く。

「九藤というんですが……息子はなんて名前だったか。父親の方は九藤孝一郎といます。仏師として腕のいい人だったんだが、だいぶ前に亡くなつてねえ……そのあと外に出てた息子が戻ってきたという話を聞いて、すこし気になっていたんですよ」

くその15に続くく

その15

十五

私は霊夢に駅前からタクシーを使うのがいちばん早いと助言した。滝山氏に書いてもらった目的地を記した紙を渡された運転手は、とくに滞りなく市の郊外にある家の前まで二人を送り届けた。

親切にも門の表札の名前まで確認してくれた彼は、霊夢を出したお金を見るとすこし驚いたような顔をして、「伊藤博文はひさしづりに見たねえ」と言いつつ、お釣りを返した。

タクシーが去った後、あらためて家を眺めてみると古くはあったが高い塀に囲まれていて、いわゆるお屋敷風のたたずまいだった。塀の幅から見ても、敷地の広さはそれなりにありそうだった。

隣の家もそれなりの敷地がある古い感じの家で、どうやらこの近辺はこうした大きな家を持つ人が多いらしい。

「門は開いているぜ」

魔理沙はそう言うと、そのまま中に入っていった。

「勝手に中に入るのもどうかと思うが……」

「でも門番も呼び鈴もないみたいだしねえ」

そう言つと、霊夢も魔理沙の後に続いて中に入った。

相当前に建てられたのではないかと思われる二階建ての木造家屋を囲んでいる庭は手入れをしていないところなるといいうい見本だった。塀の内側に沿つて植えられている松は枝が伸び放題で、雑木林のようになっており、その下には雑多な枯れ草が不規則に広がっていた。本来なら鯉でも泳いでいたであろう池はどぶ川のようにどんよりとしていて、生き物の気配などまるでない。

「もしかして呼び鈴か？」

魔理沙が玄関の引き戸の脇にとりつけられているボタンを何回か押す。が、応答はない。

「二階は雨戸が開いてるし、空き家って分けじゃないと思うが……留守かな？」

私は二階の端の部屋から空調用のパイプが降りていて、まだわりと新しい感じのする室外機に接続されていることに気づいた。

『霊夢、あの機械、動いてないか？ ああの白い箱だ』

「……なに？ ああ、あれ？」

霊夢は室外機のそばに歩み寄った。

「何か音はしてるわね。あと、風が出てる感じ」

『それは部屋の空気を入れ換えて暖めるための機械だ。その空気の

管が二階の部屋につながっている。つまりあそこの部屋には暖房を使っている誰かがいるということだ』

「なるほどね……」

「何かなるほどなんだ？」

霊夢が空調のことを説明すると、魔理沙はにやりとして、コートの内ポケットから細い針金のような道具を取り出した。

「じゃあ、奥の手を使うしかないな。こういつとぎのためにお役に立つ魔理沙さんだぜ。チビ、文句はないだろうな？」

道義上の問題はおおいにあるが、時間制限がある以上はやむを得ない。それにダメだと言っても聞かないだろう。

『霊夢、魔理沙の前に立って、やってることが見えないようにしてくれ』

「……いいの？」

『正直、事が順調に運びすぎていて、何か罨があるような気もしないでもないが……いちおう当たりくじを引いているような気はする。霊夢はどうだ？』

「そうね……わたしもそう思う」

「やっていいんだな？」

魔理沙は霊夢の後ろに回り込む。

作業をしている気配がしていたが間もなく「終わったぜ」と軽い調子で告げた。

引き戸が静かに開かれ、私たちは建物の中へと侵入した。

玄関に入る。褐色の床とくすんだ色の壁に囲まれた薄暗い空間から、かなり年季の入った階段が急勾配で上に伸びている。

それを見上げた魔理沙が言う。

「なんだか転げ落ちそうでいやな感じだな。わたしが先に登る。霊夢は後ろからついてきてくれよ」

「……静かにね」

「分かってるぜ」

足音をたてないように上に登ってゆく。登り切ると、まっすぐに廊下が伸びていて、右側には明かり取り用の小窓がいくつかあり、左側にはくすんだ色の障子が並んでいた。障子の向こうには和室2つ分の空間があるようだったが、どちらにも人の気配はなかった。

そして、いちばん奥に褐色の引き戸があり、まるで何か畏でも仕掛けられているかのように、指数本分だけ隙間が開いていた。

二人は縦に並ぶ形で静かに廊下を進み、息を殺して中の様子を見たかった。

そこには？？。

人形があつた。それも、ぎっしりと。

並んでいる、というような表現ではとても追いつかないような量だった。棚、机、積み重ねられた箱の中、そして床の上。ものが置けそうなあらゆる場所がすべて人形で埋められていた。それらの周辺に散らばっているのも、人形の部品、素材、工具らしきものばかりだ。

そして、この奇妙な空間の中で人形以外のモノとしてかろうじて認識できるのは、黒っぽい画面上に動き回る奇妙な幾何学模様を表示している大型モニターとその手前に置かれたキーボード、そしてそれらを載せた専用デスクの足元に寝袋に入って眠りこけている一人の男性だった。

「こ……」

まともに言葉も出ないまま、動けないでいる霊夢の後ろから、魔理沙が軽い調子で言った。

「九藤さん、起きろよ」

「ちよつと、魔理沙！」

霊夢はびっくりして振り返る。

「こういつときは普通に声をかける方がいいんだ」

魔理沙がにやつと笑う。

「相手もその方が素直に……」

そのとき、寝袋がかすかに動いた。

ほとんど同時に、私は全身をなにかに引っ張られるような、奇妙な感覚に襲われた。

誰かの声が聞こえた。女の子の声？

「どうしたんだ？」

「きゅ、急にいなくなっちゃったの……」

「いなくなっただって、どういうことだよ？」

「わたしにだって……」

腕を伸ばし、眼鏡を探した。あった。

もう一方の手で寝袋を開いて、上半身を少し起こし、眼鏡をかけた。

すると驚いたことに、目の前に女の子がいた。しかも、二人だ。

だが、もつと衝撃的なことに気づいた。黒髪の女の子が手にしている人形。あれは。

私は一気に身体を起こした。その拍子に棚から人形が何体か落ちてきた。

「その人形！ それを一体、どこで！」

立ち上がろうとして、前のめりになりそうになり、両手をつく。さらにまわりの人形がガタガタと音を立てて転げ回る。眼鏡が落ちそうになり、あわてて顔に押し戻した。

女の子たちは私を見つめ、身体を寄せ合ったまま口元を引きつらせている。

私は息を吐いた。

「いや、すまない……というか、順番にいこう。君たちはいったい誰だい？」

くその16へ続くく

その16

十六

「つまり、そのお金持ちのお嬢さんから譲り受けた……そして、彼女には出所を一切訊くと言われた。けれども、誰がこの人形を何の目的で作ったかを知りたくて探していた……こういうことだね」

「はい、そうです」

「……まあ出所については置いておこう。なぜ作者を知りたいと思ったのかな？ それと、人形を作った目的が何かあるとなぜ思ったのかな？」

「それは……」

黒髪の女の子は少し躊躇して、それからぼつりと言った。

「この人形には、魂が入っているからです」

不思議な真実味がその言葉にはあった。

直感的に、レトリックではなく文字通りの意味だと思った。

「そうか、魂か……」

「はい」

隣に座っている褐色の髪の子は、黙ったままだが、かすかに眉を寄せている。

「……………」

少し間をおいて、彼女たちに状況を整理する時間をあげる方がいいかもしれない。

私はつとめて柔らかな調子で言った。

「興味深い話だとは思う。だが、その話をする前に、ちょっと顔を洗わせてくれるかい。なにしろ起き抜けなのでね、鏡も見えていない状態で、若い女の子と話するのはいささかつらい。おまけにこの部屋もごらんのようなありさまだから、落ち着いて話ができない。下の台所で待っていてくれるかな。私は洗面所に行って、すこし身なりを整えてくるから」

「分かりました」

私は先に廊下に出て、階段から下に降りた。後ろから女の子たちがついてくる気配がある。どうやら逃げたりはしないようだ。あの真剣な表情から考えると、怪しい目的ではないのだろう。

それにしても、さつきから何かおかしい感じがする。離人症という現実感の喪失のようなものがあるが、あれの裏返しのようなのだ。過剰に現実感があるような……それとも単なる緊張、ないし興奮だろうか？

台所に入ったときに後ろを振り返り、彼女たちに声をかけた。

「その椅子にでも座って待っていてくれ。そんなに時間はかからないから」

二人は神妙な面持ちでこくりとうなずいた。私は軽く手を上げ、奥の洗面所に向かった。

「どうするんだよ、あんなこと言って……」

「だって、正直に言うしかないもの。どう思われてもいいわ。この世界の常識では認められなくても、わたしたちにとってはそれがあたりまえだったんだから。無理につじつまを合わせようとすると、かえって話がこじれるだけよ」

「じゃあ、まあそれはそれとして……チビはどうなんだ？ 本当にいなくなっただのか？」

「……少なくとも、この身体の中からは感じられない。でも、分からない。わたしが感じ取れなくなっただけかもしれない」

霊夢は両腕でチビ霊夢の器である人形を抱きしめる。

「でもいまはとにかく、あの男の人から詳しい話を聞き出すしかないわ。やれることはきちんとやっておかなくちゃ」

すると魔理沙はうつむき気味だった顔を上げ、唇を緩めた。

「すこし安心したぜ」

「何が？」

「いや、案外落ち着いてるなと思って」

「冗談でしょ。でも、異変を相手にしてるときに比べればね……それにこんなことでめげてちゃ、それこそチビに顔向けできないわ」

「……すこしここの掃除でもしておくか」

魔理沙は身体を伸ばすと、裏口近くに立てかけてあった箒をとりあげた。

「魔法は使えないし、せめて怪しい訪問者としてはそれぐらいしておかないとな」

台所に戻ってみると、床がきれいに掃除されていた。掃いただけでなく、雑巾がけまでしてくれたらしい。テーブルの上も水拭きした跡がうつすら見える。

私に気づくと、霊夢がお茶を淹れ始めた。あらかじめお湯を沸かして用意をしてくれていたらしい。

「勝手にいろいろやっちゃったぜ」

椅子に座っている魔理沙が言う。

「待つてる間にぼーっとしてるのもなんだったからな」

「ああ……いや、かえって気を使わせてしまったね」

「普通だぜ。というか、髭を剃ったらちゃんとした男の顔になるぜ。さすが九藤さんだ」

何がさすがなんだか、よく分からない。

私が椅子を引いて着席すると、横からすつと霊夢の手が伸びてきて茶托に載せられた茶碗が置かれる。

「どうぞ」

「は……どうも」

まるでこちらが客になってしまったようだ。ごく普通のセーター姿の女の子なのに、「和風」としか言いようがない物腰が感じられる。

お茶が配られると、私の向かい側に二人がならんで座った。

「さて、さきほどの話の続きだが……その人形に魂が宿っているということだったね。つまり、意思を通じ合えるということかい」

「実は、ついさっきまで話ができていたんです。それが、あなたが起きたとたんに、できなくなってしまつて」

「ほう……」

普通に考えると、苦しい言い逃れのように思える言葉のはずだ。だがなぜだろう、今はひどくそれが真実味を帯びて聞こえてしまふ。

「この子の中にいる魂は、自分が何者なのかを知りたがっているんです。自分がどこから何を目的にしてやって来たのか……」

「……………」

完全に一線を超えたような領域に入ってしまったている、と思えるような発言だ。だが、なぜか共感を覚える。霊夢の言っていることはまぎれもない真実だと感じてしまふ。

私はお茶を一口すすってから、言った。

「……これが君たちにとっての答えにつながるかどうか、私には分からない。ただ、とりあえず私がこの人形を作った経緯と、それからんだ体験をお話ししよう」

くその17へ続くく

その17

十七

私はここから少し離れた大きな街で学校の教師をやっていたが、父親が死んだのをきっかけに辞め、この家に戻ってきた。

教師を辞めたはつきりした理由はなかったが、このまま教師を続ける理由もとくに見当たらなかった。まあ……とにかく、どちらに進んでいいか分からない状態だったのは確かだ。空っぽなまま、なんとなく生きていく日々がしばらく続いた。

そのうちに、素人でも人形を作ることができるということを知った。父がやっていた仏師という仕事は嫌いだったが、自分の手で彫像を作ることには元々興味があつた。学生の頃に彫刻の真似事をしたこともある。今はパソコンで型を設計して、樹脂を成形すれば、店で売られているようなものに近いものを作ることができるようで、少しの資金と、あとは時間さえあればいい。

大学の同期生にゲームの開発をやっている人間がいて、アニメーションやゲームで人気のあるキャラクターなどつくってみたらどうかと勧められた。キャラクターというのは簡単にいえば物語の中の登場人物のことだ。「一日だけの版權」というものがあつて、特別な催しでは、その日に限って他人がデザインしたキャラクターの人形を作って販売してもいいことになっているという。

試しに有名だと言われているキャラクターを自分なりにデザインして形にしてみたところ、その催しの当日で出品した物が売れてしまった。私自身は見たこともないそのゲーム作品がたまたまそのときは人気だったというのもあったらしいが、自分が作った物がどういう形であれ評価されたのは思いがけなかったし、嬉しくもあった。

味をしめて続けて製作しているうちに、自分が「巫女」のキャラクターに惹かれていることが分かった。理由は自分でもよく分からなかったが制作対象をその分野に集中するようになった。さらに年を経るにしたがって製作者としての知名度が上がってきて、定期的な発表の場に出るようになり、正式な法人から「仕事」としてのデザインまで受けたりするようになった。

仕事といっても教師だった頃の給料に比べれば実入りは僅かなものだが、最近では、貯金を食いつぶさなくても済むぐらいにはなってきた。

そんな頃、大きなイベントが終わって制作が一段落したとき、ふと思いついて父親が死んだ後そのままになっていた遺品の整理を始めてみた。すると、何かひどく古めかしい感じの文書が出てきた。読んでみると、どうやらある神社で使われる人形の製作資料のようだった。

人形そのものは制作にさほど技術を要しないようだったが、腹の中に神を宿らせるためのしるしを収めるというのが特徴だった。つまり人形に神を降ろして、その神様に村の境界を守ってもらった儀式に使ったらしい。

私はその儀式がどこで行われたのか知りたと思ったが、神社の名前も場所もいっさい記されていなかった。

そこで、昔の土地の境界にあたりそうな地点を調べているうちに、東の山の方に向かうバス路線の途中で誰も乗らないような中途半端な地点に停留所が置かれているという話を耳にした。その停留所の近くには境界を守る神様がいたので、その神様に許しを得るために特別に作ったのだという。

そのバスに乗って、運転手に聞いてみると、たしかにそういう噂のあるバス停があるらしい。

実際にそこで降りてみると、何の変哲もない峠道の途中にあつて、周囲にはこれといった建物も史跡らしきものもない。ただ、「上坂下」という停留所の名称に何かひっかかるものを感じた。

カミサカという音は神の坂に通じる。そして坂は境を意味するものでもある。神話のイザナギ・イザナミの話に登場する黄泉比良坂は代表的な例だ。あの場合は死者の国である黄泉と現世とを分ける境界ということだが、人間の立場から見た場合、神々の領域とヒトの領域を分ける境界という意味合いが重要だ。それはまさに「生死の境」でもある。そこに神を祀る場所があるのは自然なことだ。

そのうちに私はあることに気づいた。それは上り下りの二つの停留所の位置だ。停留所はお互いに進行方向にすれ違ったその先に置くのが普通だ。ところがこの停留所はすれ違う前の地点に置かれている。普通とは逆だ。しかも、お互いの位置も普通よりは近い感じがする。

私はこのふたつの停留所の位置関係に意味があるかもしれないと思って、それぞれを結んだ「線」上に何かないかと道路の真ん中、二つの停留所を結ぶ線を二等分する地点に立ってみた。そしてそれ

それぞれの停留所に向かう「線」の方向を見たところ、北側に向かう「線」を延ばしたその先に、山頂が見えた。そしてその少し下の位置に、並んでいる木々の一部がぼっかりと抜けて窪みのようになっているのが見えた。私はそこに何か重要なものがあると確信した。

道路からはずれて森の中に入ってみると、かすかにではあるが、ところどころに土が踏み固められた人が通ったような跡が残っていた。それに沿って進んでいくと、ついにその森の中に開いた穴のような空間に出た。そこに、廃墟同然の小さな神社があった。

「今となってみるとなぜそこまで儀式や神社の件にこだわっていたのか分らない。ただ、そのときは一種の達成感みたいなものはあって、その小さな神社にきちんと参拝して家に帰った。ただ、問題はそこからだった」

私は冷めかけたお茶を一口飲んだ。

「翌日の明け方に、夢を見た。夢というより、幻覚に近いものかもしれない。とにかく、かなり現実に近い印象だった。その中で、巫女の姿をした女の子が泣いていた。なぜか分らないが、私は彼女が一人ぼっちだと知っていた。そして、私はその子のために作った彼女そっくりの人形を、手渡そうとしていた……が、そこで目が覚めた。その女の子こそ、あの山にいる境界を守る神様なのだろうと思った。誰からも忘れ去られた神様は人形を必要としている。だからあんなに寂しがって泣いていたのだと、そう確信した」

「……………」

黙りこくったまま話を聞いていた霊夢と魔理沙に、私はすこし自嘲気味に言った。

「馬鹿馬鹿しいと思うだろう？ 私は信心深い人間じゃないし、神仏のたぐいとは無縁だった。初詣さえろくに行ったこともない。でも、その夢の中の女の子だけは神様という存在とごく自然に頭の中で結びついた。そして、数ヶ月掛けて人形を制作した。できるだけ人間の身体に近い動きができるように、球体関節もつけた。部品が多くなって、ほとんど手作りといっていい状態だった。そして、ついに完成した……それが二ヶ月ほど前のことだ。さて、ここから話はもっと荒唐無稽になるんだが……大丈夫かい」

「大丈夫です」

「大丈夫だ。真剣に聞いているぜ？」

二人の返事に、私はうなずいて言葉を継いだ。

「私は完成した人形をもつて、例の路線バスに乗り込み、山へ向かった。ちょうどその日は秋分の日だった……」

上坂下の停留所に着いたときはもうかなり日が西に傾いていた。私は日暮れ前に人形の「奉納」を終えなければと思っていた。夜になってしまつてはろくに道もない山の中を歩くのは危険だから。だが……その日はなぜかなかなか神社に辿り着けなかった。ただ、道に迷っているという感じはなかった。確かに前に一度来たことのある同じ道を進んでいる。それなのに、時間はどんどん過ぎてゆく。

だがその一方で、どうしても届けなければならない。それも、今日、今この時に届けなければならない、そういう気持ちが強くなっていた。理由は分からない。

そして……ここからがもうほとんど夢の世界に近いんだが、私はいつのまにか鮮やかな赤に染まった光の中を歩いていた。それが夕日なのかどうかさえ、よく分からなかった。ただ、正面に小さな人影が見えた。その人影は、私の方を見て手を振って駆け寄ってきた。そして、私はその人影に向かって手にしていた人形を確かに手渡した……。

「その人形が、いまきみが抱いているそれだ。見間違えようがないし、この世に二つとないものだということも、少なくとも私にははっきりしている」

言外にその人形を手をしている君はいったい何者なのか、という問いも含めたつもりだった。

「……………」

霊夢は視線をゆつくりと上げ、私の眼を正面から見つめた。そして、はつきりとした口調で言った。

「わたしは……この人形を必要としていた者です」

「……………！」

「でも、わたしは間違いなく人間で、神様ではありません。ここか

らはだいぶ遠いところにある山の上の神社の巫女をしています」

「……………」

「正直に言つと、巫女としてのわたしは、あまりたくさんを知りません。だから、うまくお話できる自信がないですけど……例えるならこういうことです。世界には、深さみたいなものがあつてある深さを越えたところで起きたことは見聞きするのが難しいことがあります。でも、何かの拍子に深いところと行き来できる場合があります。中には行きつぱなしになる場合もあります」

「行きつぱなしというのは……神隠しのようなものか？」

「そう呼ぶこともあるみたいです。でもそういうことが起きること自体に特別な意味はありません」

霊夢は落ち着いた口調で答える。

「この人形がどこから来たのか、ずっと調べていたんです。それでわたしたちはここまで辿り着いたんです……」

彼女は椅子を引き、立ち上がった。

「あらためてお願いします。この人形をわたしに譲ってください」

腰を折り頭を深々と下げるその姿に、私は驚きで声も出せなかった。どうして、ここまで……？

「あなたが視た女の子がわたしかどうかは分かりません。でも、もうこの人形はいまのわたしにはどうしても必要なものなんです。こ

の子の中にはわたしを視てくれている魂がいるんです。空っぽだったわたしに生きる人としての形を与えてくれます。それは……わたしの生命と同じぐらい大事な存在なんです」

どうして……？

めまいのようなものを感じた。頭の芯がめくれ上がるような……そこで私はまた全身を引っ張られる感覚に襲われた。

くその18へ続くく

その18

十八

バスの窓の外に流れる風景は木々に覆われた山並みに変わりつつあった。カーブが近づくとバスのエンジンを響かせて減速と加速を繰り返す。昼下がりの半端な時間帯ということもあって、乗客はまばらだった。

「……チビはまだ眠ってるのか？」

魔理沙がとなりのシートに座っている霊夢に訊く。

「ええ。でも大丈夫。もうこの中に戻っているわ」

霊夢は膝の上の人形の髪を優しく撫でた。

「それは分かるから」

「そうか……まあ、何にしても人形の由来は分かったわけだが、霊夢としてはこれで終わりなのか？ チビの正体に関することは」

「別に、終わりがどうかとか考えてないわ。それはわたしが決めることじゃないもの」

「でも、チビが何者なのかっていうことについては、もう答えが出

た感じじゃないのか」

「さあ。わたしはともかく、チビはたぶん何か分かったのかもしれない。だから帰ってから、あの人……九藤さんがした話を聞かせて、その上でチビがどう考えたかを訊くわ。それが物事の順番でしょう」

「それはそうだけだな……」

カーブが迫り、バスのエンジン音が轟く。直線コースに戻って音がおさまったところで、ふたたび魔理沙が問いかける。

「じゃあ、あの九藤ってやつのはどう思った？」

「どう思っつて……まあ、ありがたいと思っただわ。いきなり家に入り込んできたわけの分からない奴に自分が作った人形を正式に譲ってくれると言ってくれたんだもの。できることなら何かお礼をしたいと思うぐらい」

「そっか……」

魔理沙は首を傾げる。

「でも、見当違いかもしれないが……なんだかお前、さっきからずっと浮かない顔をしてるぜ？」

霊夢はそこではじめて魔理沙の顔を見た。

「何言ってるのよ。なんでわたしが浮かない顔をしてなくちゃいけないのよ」

「それはわたしが言いたいぜ。今日はけっこういろいろなことが分かったんだし……もつとスッキリした顔しててもいいじゃないか」

「そんなこと言われても仕方ないわよ。本人がこの有り様なんだから」

霊夢はそう言いながら、人形の頭をぽんと叩く。

「とにかく帰ってからじゃないと、スッキリのしようもないわ」

「ま、そうなんだけどな」

魔理沙は霊夢の膝の上の人形を見つめ、腕を伸ばして指先でその黒い前髪を撫でた。

「困ったやつだ、お前は」

九藤雅樹は少女たちが帰ったあとも、台所のテーブルに向かって椅子に座ったままぼんやりと天井を見つめていた。何か、ついさっき起こった出来事のはずなのに、懐かしい思い出のような遠さを感じる。それでいて、やはりお互いのやりとりは妙に生々しく脳裏に刻まれている。

「……空っぽだったわたしに生きる人としての形を与えてくれますか」

あの女の子にそこまで言わせる存在というのは、いったい何なのだろうか？

人形に宿った魂……いま思い返してみるとあまりにも現実味が無い。しかし、あの話を聞いた時にはそれを自分は真実だと認めていた。だからこそ、無条件であの人形を譲った。

そういえば、と九藤は自分の左手を見つめる。

あの人形には、母の形見である指輪が納めてあった。それはいつか結ばれる相手への贈り物として持っているようにと言われていたのだが、「あの女の子」に贈ることにしてしまったのだ。おそらくこの世では自分には結ばれる相手はいない、ならばあの女の子に贈ってしまおう、そう思ったのだ。だが……果たして気づいてくれただろうか？

「！」

九藤はあることに気づき、立ち上がった。その勢いで、椅子が後ろに倒れてしまった。

名前。あの黒髪の女の子の名前を聞いていない。

九藤は額に手を当てる。あのとき、たしかに自分はあの女の子の名前を分かっていた。しかし、名前をたずねただろうか？

そもそも、自分の名前を名乗ったという記憶がない。とすれば、やはり彼女たちの名前も訊いていない。なぜ訊いていないかといえば、既に分かっていたからだ。だから訊く必要がなかった。

それなのに、いまはどうしても思い出せなかった。

「どういうことだ……」

『……戻ったのか？』

「チビ……！」

霊夢の声と同時に身体が浮き上がる。ほっとしたような、それでいて泣きそうになっているような霊夢の顔。

『ここは博麗神社だな』

頭を上げて、周りを見してみる。ふだんと同じように身体も動く。

と、もうひとつの顔がすこし怒ったような声を出す。

「ちょっと心配したぜ。お前は周りを心配させる名人だ」

『その称号はなるべくなら返上したいところだな』

だが、それは私自身ではどうにもならないこともある。

『戻ってくるときにはとくに問題なかったようだな』

「ええ。鳥居を入ったときとは逆側からくぐったらすぐここに出た

わ
」

「例の狐が張り番をしてたぜ。お疲れ様とかなんとか行つてすぐいなくなつた。だが、今のところご主人様は出てこないみたいだな」

『そうか……』

紫さんはあえて報告のようなものを求めたりはしないのかもしれない。何が起きるかある程度見通しを立てた上での提案だったということは十分考えられる。

「とりあえず母屋に戻りましょう。着替えもしたいしね」

「そうだな。この服はやっぱりちよつと窮屈だぜ」

私は指先の感覚を確かめてみた。力は吸い込まれている。どうやら幻想郷にいればこれまで通りということのようだ。

「まったく、肝腎なときに気絶しやがって……おかげで霊夢はいろいろ大変だったんだぜ。あの九藤さんと交渉しなきゃならなかったし」

『交渉？』

すると霊夢はすこし慌てたように手を振る。

「そんなたいしたことじゃないのよ。まあ詳しいことはまたあとで話すから、ね」

『分かった。とにかく、二人ともお疲れ様』

私は意識が途切れる直前の奇妙な感覚を思い出していた。あれは、あの溜池の一件で体験したあの抜け出す感じとも違う。

原因についてはだいたいの見当はついていたが……それはまた、あとにしよう。

魔理沙が帰ったあと、炬燵に入った霊夢の膝の上で私は気絶していた間に起きた話をあの男性がしてくれたという話を含めて聞いた。

「そういうことか……しかし、その九藤という人は霊夢の話をかなり真剣に受け止めてくれたようだな」

「そうね。まあ山の神社……つまり表側の博麗神社といってもいいけど、そこで起きた事がただの幻じゃないと考えているからだと思うわ。実際、自分のもっていった人形がそこで消えてしまったわけだしね」

『それでも、普通なら自分ひとりの思い込みとかなんとかで、適当に辻褄合わせをしようとするものだな……』

そこで、私は思い切って訊いてみた。

『九藤さんって、どういう感じの人だったんだ？ 正直、私は顔もろくに見てないんだ』

「……そうね」

霊夢はすこし間をおいてから答えた。

「喋り方が……少しあなたに似ていたわ」

『……………』

もしや……霊夢も分かっているのか？

「ま、あの人も人形を作る前は学校の先生をやっていたそうだし、そういう意味では似たような喋り方になるのかもしれない」

『そうか……………』

「ただ、あの人が視たという女の子は、たぶんわたしじゃないと思うのよね。もしかしたら言っていた通り、境界を守る神様だったのかもしれない。実際、泣きたくもなると思うわ。あの神社はもう捨てられたような感じだったもの。下手をすれば祟られてもおかしくないような扱われ方よ。それを感じ取ってくれたんだとしたら、神官としての素質もあるのかもしれないわね」

『なるほどな』

すると、霊夢は膝の上の私の身体を回し、お互いに向き合う形にした。

「わたしは、今回の旅は行って良かったと思ってる。すこしだけ驚くような体験をしたから」

普通に考えれば驚きの連続だったと思うが。

『どんな体験だ？』

「自分が何を想っていたのかが、分かったの」

『…………？』

「ふだん想っていることは……頭の中では言葉になってないんだと思う。言葉になっていないから、自分でも視えていない。でも、何かの拍子に、ぱっとそれが言葉になることがある……ということが分かった」

想いは言葉になっていない、か。確かにそういうこともあるかもしれない。言葉であれなんであれ、自分の想いを他者に伝えるのは難しい。

『で、想っていたことは何だったんだ？』

「それは……まあ、あれよ。言葉そのものは忘れちゃった」

『なんだそれは』

「でも、いまは別の言い方もできるわよ」

霊夢の眼が私を正面から見る。

「あなたがどこの誰であろうと、今このときにわたしが感じているものは同じ。あなたから得るものは同じ」

『靈夢……』

たとえ中身がヒトの魂に似た偽物であっても、ということか。

「この気持ちには、自信があるわ」

先手を打たれてしまった。だが、本当にこのままでいいのだろうか。私はきみに何かを与えている存在として、安住してしまっているのか。

『思い起こせば……いちばん初めはきみの心の中に飛び込んでしまった、自分自身でも訳のわからないモノだったんだが』

「そうね」

靈夢はくすりと笑う。

「でも、いまは違うでしょう?」

『そうだな』

どう言ったらいいのだろう。靈夢が言ってくれたことに、どう答えたらいいのだろう。

「あなたは今まで自分のやりたいようにやってきた。そうよね?」

『ああ』

「それなら、わたしも同じ。これから、それでいきましよう?」

霊夢は屈託なく笑う。

その笑顔に私は甘えてしまっていていいのだろうか。

くその19へ続くく

その19

十九

可愛らしいエプロンをつけた少女の姿をした人形が二体、協力しながら火バサミを器用にあやつって暖炉の中に薪炭を追加した。

炎の明るさが次第によみがえってきてテーブルに向かい合う二人の少女の姿を照らし、落ち着いた雰囲気洋間の天井に揺れる影を映し出す。

「じゃあ、チビさんの正体は人形を経由して飛び込んできたその男性の想いだってこと？」

「うーん……そう言い切れるのかどうか、わたしには今でもよく分からないんだけどな」

魔理沙は椅子の背によりかかった格好で、アリスが器用な手つきで人形サイズの小さな外套にボタンを縫い付ける様子を見るとともにに見ている。

「ただ、いちばん初めるとき……わたしが例の蒲団をかついで来る途中で、声を聞いたような気がするんだ。『届けに行かなきゃならない』っていう」

「あら、そんなの初めて聞いたわね」

「初めて話したからな」

魔理沙は自分の眉間のあたりを指先で撫でる。

「ま、声というより気配に近い感じのものだったし……でも、いまから思えば人形を届けたっていう思念みたいなもんを感じたのになって」

「いずれにしても、彼がここに來た理由ははっきりしたわけね。そして今や、目的は果たされた」

「めでたしめでたし、なのか？　なんだか話がすっきりし過ぎてるような……やっぱりすっきりしてないような」

「例の境界の妖怪の立ち回りかたが気に入らないとか？」

アリスは付け終えたボタンの並びを確かめるように、服をすこし手元から離して見る。

「まあな、それもある」

身体を起こした魔理沙はテーブルにひじをつき手を組んであごを乗せた。

「唐突にあの結界越えの話を持ってきたのは、あいつが急いでそうせざるを得なかった理由ってのが何かあるような気がするんだ」

「あのときは、直前に子供が池に落ちてそれを助けようとしたチビさんが頑張りすぎたっていう事件があったけど……それはとくに関

係はない感じがするわね。人助けをしようとしただけだし」

「そうだなあ……」

「よし、これでできた」

アリスは完成した外套を魔理沙に見せた。

「どう？　なかなか素敵でしょう」

赤に褐色のチェック模様の生地に暖かそうな襟がついている。

「うん。さすがだな……よくできてる。きっとチビも喜ぶだろう」

魔理沙は息を吐く。

「アリスが羨ましいよ。わたしもほんとは、何かあいつにしてやることでも考えたほうがいいんだろうけどな」

「今までも十二分にしてあげてるんじゃない？　わたしはそう思うわよ。結界越えでもあなたの同行は役に立ったじゃないの。霊夢ひとりならチビさんが気絶したとききつと大変だったでしょう」

「その程度じゃ借りを返せない……このあいだの無縁塚の件もあるしさ」

「縁起でもないかもしれないけど、あの無鉄砲な彼を助けなきゃならない場面はこの先いくらでもありそうなもの……そのときに返せばいいんじゃない？」

「ま、それもそうか」

魔理沙は苦笑した。

「ほんと、危なっかしいからな、あいつは」

レミイがふらっと一人で神社にやってきた。結界越えの件を聞きつけたらしい。

「なるほどね……でも、こうして改めて話を聞いてみると、ずいぶんとあぶない橋を渡ったようね」

掘り炬燵に身体の半分以上を埋めた状態のレミイは、軽く前後に身体を揺すりながら言う。

『いや、まあ外の世界とはいえ言葉は通じるわけだし、住んでいるのは人だけだから……』

「わたしが言っているのはそういう意味ではないわ」

レミイは少し眉を寄せる。

「要するに話の流れとしては、その九藤という男はいわばあなたのドッペルゲンガーだったということなんですよ。つまり、あなたが意識を失ったというその時、その男に一体化しかけていたのじゃないの？」

思わず後ろを振り向いて台所にいるはずの霊夢の様子をうかがった。どうやらお茶の支度に集中しているようで、こちらには意識を向けていないようだ。

私は顔を戻して言った。

『……しかし、そうなれば、ある意味では私はあの肉体をもつ彼の中で、本来の自分を取り戻したのかもしれない。そもそも、ドッペルゲンガーという言葉を使うなら当てはまるのは私の方だからな』

九藤さんという男性の、彼が視た「女の子」に人形を贈ろうとした想い。それが一部「転写」される形でこの幻想郷に入り込んで今の私を形作つたのだとしたら、それはオリジナルに対する部分コピーのようなものだ。

「でも、一体化した魂があなたそのものである保証はどこにもないでしょう」

『そうだな。しかし、そこが複製としての私が本来戻るべき場所だったとも考えられる』

すると、レミイは怒ったような表情で小声で言った。

「そんなの……ダメよ」

『えっ？』

「ああ、なんでもないわ。とにかくあなたがここに来た経緯はすべて明らかになったんだし、あなた自身が何者なのかっていう議論も

もうあまり意味はないわけでしょう？」

『……前に、この腕輪をパチュリーに着けてもらった後に話をしたじゃないか』

私は袖の上から左の腕にはめられた腕輪に触れた。

『傍から見れば存在感が薄い人形だからこそ、私は霊夢のそばにいられるんだと……しかし今となっては、私は一種の人外であるということが分かったわけだ。しかもその魂のオリジナルは外の世界の男性だった。これをレミイとしてはどう感じる？』

「そうねえ」

レミイはすこし困ったような顔をした。

「でも、正直なところわたしはあなたのことを妖怪の一種だとは感じられないわ。ヒトそのものではなくても、やっぱりヒトに準じる存在だとは思えない」

『だとしたら、なおさら問題じゃないか。人に準じる存在で、しかも中身は男だぞ』

「いいんじゃない？ いっそ、あなたが博麗神社の神様になってしまうというのもそれはそれでありだと思うわ。境界に生まれた魂が人形に憑依したなら……むしろ相応しい気もするわよ」

『それはちよつとな……本物の神様に怒られるよ』

前に妹紅か誰かが似たようなことを言っていた気もするが、とて

もじゃないがそんな柄じゃない。

「どっちにしても、わたし自身は違和感はないわ。それは本当よ」

『まあ妥当な存在感というわけかな……そういえば、以前ある人に言われたんだ。魂が薄いから、自我がないに等しい。だからどんな相手でも受け入れてしまうんだと。実際、的を射た意見だと思ったよ』

「ずいぶんな言われようね。そんな斬り込むような物言いはわたしでもちよつと……」

そこでレミイははつとしたような表情になった。

「……それってあの本を借りに来た日のこと？」

『そうだ』

「もしかして、妹に会ったのね？」

気づいたか。探りを入れるような言い回しになってしまったが、仕方がない。

『いろいろと参考になったよ、彼女の意見は』

レミイの表情が曇る。

「あの日、しばらくあの子が外をふらふらしてたらしいって聞いたのよ……きつと無作法なことをしたんでしょうね。驚いたでしょう？」

『いや、もう一度会って話をしたいと思ったくらいだ。それに、自分の正体を知る上で彼女の示唆はとても役に立った。実際、感謝しているよ』

「そう。落ち着かない子だけれど……わたしに免じて許してやってちょうだい」

『そんなに気にしなくても大丈夫だ』

言わない方が良かったのかも知れないが、あの場にはアリスや魔理沙も居合わせたし、人づてに聞くよりはいいだろう。

引き戸が開き、霊夢が入ってきた。

「紅茶淹れるのなんて久しぶりだったんで、時間がかかったわ。まあ味はまったく保証できないけどね」

するとレミイがにやりとして言う。

「霊夢の血をひとたらししてもらえばきっと完璧な味になるわ」

「ヒトの血は当神社ではご提供いたしかねます」

皿に乗せたカップをレミイの前に置きながら霊夢は応じる。

「……そういえば霊夢、冬至の夜はむやみに外に出ないほうがいいわよ」

レミイはすこしまじめな顔つきになる。

「今年の冬至は満月だから、吸血鬼の魔力が最大になる」

「へえ、そうだったんだ。でもわざわざわたしにそう言っつてことは当日は自重してくれるわけね？」

「それは分らないわ……妖怪は気まぐれだから。まあ正直なところ、そんな日に好き放題に暴れても割が合わないけど」

吸血鬼のお嬢様は苦笑を浮かべ、付け加えた。

「いまとなつては、ね」

「まあ……白いものがちらほらと見えてきたわ。ほら、ねえ紫。雪よ」

冥界の白玉楼の主、西行寺幽々子は整えられた上品に整えられた庭に面した縁側に立って上空を見上げ、嬉しげに言う。

一方、廊下を隔てた座敷でお茶を飲んでいた八雲紫は、やれやれという感じの笑みを浮かべる。

「実はわたしはあんまり寒い冬は好きじゃないのよ……」

「でも、あなたのお陰でこの白玉楼でも四季というものが感じられるようになったのは、わたしとしては感謝しているのよ。前は本当

に景色に変わり映えというものがなかったもの。空の色も青なのか灰色なのかさえ分からなかったし……」

「まあ、変化を観るのは大事ね。自分も変わりゆくものだと自覚させられるから」

「……………」

幽々子は笑顔のまますこし首をかしげ、ゆったりとした所作で座敷に戻り、座布団の上に座りなおして紫と向かい合う。

「もしかしたら、また何か悩み事？」

「わたしは悩んだことは一度もありません。変化に対しては、こちらでも変化することで対処するしかないのも分かりきっているし……ただ、問題は変化には偶然と必然があるという点ね。そして困ったことに、偶然と必然の区別がつきにくいこともままあるの」

「……………」

「ふっ」

紫は笑みを浮かべたまま息を小さく吐く。

「ま、ここのところ手がけていたことが一区切りついたから、すこし冥界のぼんやりとした雰囲気味わいたいなあと思って来ただけよ」

「つまり冥界はのんびりするにはいいところだと言っている……そう受け取っていいのかしら」

「……何事にも好意的な解釈をする者が周りから愛されやすいのは確かね」

幽々子はいまひとつ得心のいかないという表情で紫を見たが、やがて顔を廊下に向けて声を出した。

「妖夢、いる？」

すると、廊下の端にひとりの小柄な少女が現れた。その身体の近くには、彼女の半身である霊魂が浮いている。

「御用でしょうか、幽々子様」

「お茶のおかわりをふたり分持つてきて。あとね、小腹が空いたから、何か温かい食べ物を所望するわ。甘いものならなお良し」

「……かしこまりました。しばらくお待ちください」

少女が引っ込むと、幽々子は紫にふたたび眼を向けてのんびりと言う。

「力があるって、損なことが多いみたいねえ」

「初めから損も得もない」

紫は外にちらつく雪を半ば閉じた眼から眺める。

「そついう風に在るしかないものなのよ、わたしは」

くその20へ続く

その20

二十

幻想郷に本格的な冬が訪れ、雪が降り積もる日々が続いた。

ようやく晴天が訪れた朝、外に出てみると庭の雪は縁側をはるかに越える高さになっている。屋根にも相当な量が積もっていた。この分だと拝殿も似たような状況だろう。

「参ったわねえ……まあ毎度のことではあるけど」

霊夢はうんざりしたような顔をする。

『雪おろしはしないとまずいだろうな。しかしどうするんだ？ 符を使ってもいいか？』

私は懐からお札を取り出した。以前よりは制御できる札の数が増えたので、うまくやれば効率よく除雪ができるだろう。

「今回はけっこう量が多いしね……それじゃ、ここの屋根をやってみて。でも無理はしないでね。わたしは拝殿のほうをやるから」

『ひとりで大丈夫か？』

「まあ屋根から落っこちるってことはないから心配しないで。あなたのほうこそ、力加減に気をつけてね。こんな時期に屋根に穴でも開けられたら目も当てられないわ」

『分かっているよ』

私たちはいったん中に戻り、霊夢はこの間結界越えのときに使ったダウンジャケットを、私はすこし早めのクリスマスプレゼントだと言ってアリスが贈ってくれた外套を着け、再び外に出て作業を始めた。

母屋の屋根はいちおう瓦ぶきだが大きな衝撃を与えては瓦ごと落ちてしまう。わたしは五枚の符を操りながら、屋根の縁から順に小刻みに叩くようにして少しずつ雪を落としていった。

霊夢も霊弾のたぐいを使うのかと思ったが、どうやらそんな気配はない。さすがに拝殿の屋根にそんなことはできないということかもしれない。

「年の瀬も押し迫ってるのに、大変ねえ？」

『……！』

顔を上げると、万全の冬装備という感じの幽香さんがふわふわと空中に浮いてこちらを見ていた。コートもスカートも厚手で、首には毛糸のマフラーを巻いている。

『ご無沙汰してました、幽香さん』

「こちらこそ。まあ、連日の雪だったから、こっちはどんな具合かと思って来てみたんだけど。それにしても器用なものね、雪おろしまでやるなんて」

『まあ居候ですから、多少の役には立ちませんとね……』

「でもあなたのおかげで、前に較べてこの神社も人里で少し知られるようになったんじゃない？　そういえば、このあいだ新聞を読んだわよ」

『ああ、あれですか……』

少し前に烏天狗にして新聞記者だという女の子が私を取材したいと言って神社にやってきた。訊かれるままに幻想郷に来てから今に至るまでの経緯について話をしたのだ。

「天狗の新聞にしては割とまっとうな記事だったように思ったわ。というか、まっとう過ぎる。まるであなたが話したことをそのままきちんと周りの連中に伝えようとしているような感じさえる」

『ははあ……』

「いや、それがダメだというわけじゃないのよ」

幽香さんは苦笑する。

「ただ、ちよつと思つたの……これって誰かの意向を汲んだ上でのことじゃないかって。もちろん、霊夢やあなた自身のことじゃないわよ。もっと別の立場にいる者よ」

そう言われれば、だいたい察しはつく。

『例えば……紫さんですか？』

幽香さんは小さくうなづく。

「ま、山の妖怪なんて一筋縄じゃない連中ばかりだしね。新聞を作る技だって、大元は外の世界からのものに決まってる。そのための便宜を誰が図ってるか、ということになればね……しかも直前に、いわばお墨付きをもらう形で結界の外に出かけて行っただしよ？ 段取りが良過ぎるというものよ」

幽香さんは空中を滑るように移動して、私のすぐそばまで近づいてくる。

「それで、どうなのかしら。あなた自身はどう思ってるの？ この成り行きについて」

見かけは柔らかな態度ではあるが、生半可な対応はとれない。

『……前に言いましたよね。私は逃げるつもりはない、と』

「ええ、そうね」

幽香さんは微笑んだ。

「ちゃんと憶えているわ」

『正直、ここから先どうするかは白紙です。私の正体もだいたいはあの記事の内容で察してもらえるとと思いますが……』

霊夢との関係を、どうけじめをつけるべきなのか。

言いよんどんでいると、幽香さんが私の考えを察したように言った。

「……このままならあなたは単にヒトによく似た心をもつ妖怪の一種ってことになるものね。ただね、ひとつ気になることがあったから教えてあげる」

『え……?』

幽香さんはすつと腕を伸ばしてきて、私の身体を引き寄せた。そして自分のコートのポケットから小さな紙包みを取り出す。

「このあいだの池の騒ぎのとき、あなたが木を倒そうとしてたわよね? あのととき、近く的空間に妙な影みたいなのが浮き上がっていた……わたしには人影みたくに見えた。誰かさんによれば、それは幻想郷にとつてとても危険なものらしいわ……」

包みから出されたのは毛糸のマフラーだった。かなり細い糸を使ったのだろうが、サイズ的には私の首にちょうどいい。

「これは、ちょっとしたおまけ。あさつてはクリスマスなものね」

幽香さんはマフラーを私の首に指先で器用に巻きつける。

『あ……ありがとうございます』

私はすこし当惑してしまった。

「ふふ。これは深い意味はないのよ、別にね」

ふわり、と幽香さんの身体が離れてゆく。

「実はこの話をするかどうかはけっこう迷ったの……でもやっぱり自分に誠実でなくちゃと思ってね。健闘を祈るわ、チビさん」

そう言うつと、幽香さんは小さく手を振り南の山の方へとスカートを揺らしながらふわふわと飛び去って行った。

『……………』

もしかしたら、幽香さんは現状維持でもいいかもしれないと考えはじめていたのだろうか。でも、私に関する新たな手がかりとなる情報は提供すべきだと考え直したのかもしれない。

それにしても、あの場面に幽香さんが居合わせたとは知らなかった。

私は、極限的な状況で意識が抜け出してしまったあのときの感覚を思い出していた。空間に影……なんだろう。まだ私の正体に埋められていないピースが残っているということなのか。

昼を過ぎてから、神社に突然の来訪者があった。慧音さんと、妹紅だった。

慧音さんは心なしか憔悴したような顔つきだった。

霊夢が茶の間に二人を通し、お茶を淹れてくるから、と台所に引っ込むと、慧音さんは私に向かって頭を下げて言った。

「……申し訳ありません、実はどうしてもお願いしたいことがありますして」

『改まって、どうされたんですか』

言いながら、私は妹紅の顔を見た。こちらもう少し表情がこわばっている。

「わたしのほうから説明するよ、慧音」

妹紅はなだめるように慧音さんの肩に手を置いた。

「実は……このあいだ里の池で面倒かけたことがあっただろう、子どもが落ちてしまったあの件だ」

『ああ。なにかその後まずいことでも？』

「いや、そちらとは直接の関わりがない。ただ、あの日、慧音のところに紅魔館のメイドが来ていたらしいんだ。なんと言ったか、いざよい……？」

『十六夜咲夜さんだな』

「そう、それだ。ちょうどお前さんが来る直前だったようだ。それで彼女は、冬至の夜には里の人間たちに決して外出しないように警告して欲しいと慧音に言った。主人であるレミリアにそのように伝えろと命じられたらしいんだ」

『ああ、それなら前にレミィからも言われたよ。なんでも今年は冬

至が満月なんだそうだな。魔力が一段と強まるそうだな」

「その通りだ。そうか、こっちにも連絡はしていたのか……」

そのあとを引き取るように慧音さんが口を開く。

「わたしは満月の夜にはワーハクタクとしての本来の姿に変身してしまうのです。この姿は里の人々には見せたことがまだありません……恐怖を与えるのは確実ですから。なので、今夜も里を離れるつもりだったのですが、そこに思い至ったとき、あの従者の冬至の夜の警告とは吸血鬼と満月に関わるものではなかったかと気づいたのです」

『なるほど……』

と、台所から戻ってきた霊夢がお茶を配りながら話に加わる。

「わたしも吸血鬼に関しては詳しくは知らないけど……おそらく満月と冬至が重なるっていうところに意味があるのかもね。冬至は一年でもっとも大地が太陽から遠ざかる日。そして満月は月が太陽から遠ざかる位置。つまり陰陽の理でいえば、どちらも『陰の極み』ということになるわ。そして陰と鬼は同じ性質をもつもの……だから、吸血鬼としての力がさらに割増しになるってことね」

「だが、ただ力が大きくなるということぐらいでわざわざ警告に来るだろうか……？」

妹紅が疑問を呈すると、霊夢はそうね、とうなずき。

「もしかするとだけど、魔力がどうこうというより、自分の心を安

定に保つことが難しくなると考えてるんじゃないかしら。ただ、里を襲ったりするのは取り決めに反することだし……そうしないための工夫も自分ですると思うけど。わたし、パチュリーがレミリアと一緒に住んでるってことは偶然じゃないと前から思ってたもの」

私はすこし驚いて訊いた。

『それはどういう意味だ？』

「自分の行動を抑える誰かが必要だったってことよ。自分自身で力を封じたりするのは難しいもの。魔法使いとしてのパチュリーにはそういう役割があるのかもしれない」

『なるほどな』

妖怪退治の専門家である霊夢ならではの洞察だ、と感心した。

『話を戻しましょうか……それで、慧音さんのおっしゃるお願いしたいこと、というのは？』

「今夜、できればお二人に里に出向いていただいて、一晩だけ里の守りをお願いしたいのです。吸血鬼の警告もありますが、わたし自身は満月の夜には気が立っていて冷静な行動ができる状態にあるか自信がありません……里にいてもかえって迷惑をかけるだけです」

私は霊夢の顔を見た。

「かまわないわよ。警告は必ずしも、レミリア自身に関することじゃないかもしれないし……むしろ、他の妖怪連中だってこの特別な夜に跳梁跋扈するかもしれないものね」

そこでふと、レミイ以外のもう一人の吸血鬼のことについても考えがおよんだが、ここで言うとき余計に慧音さんを心配させることになりそうなのでやめておいた。

『じゃあ、私も霊夢の付録としてついていくことにしますので……』

「付録？ 冗談じゃないわよ」

霊夢は私の頭を軽く叩く。

「いざとなったらきつちりと働いてもらうわ。なんのために稗田家まで行ってお札の材料もらってきたと思ってるの」

里の人々を守るためならいくらでも働こう。私は寺子屋の子供たちの顔を思い浮かべ、気を引き締めた。

くその21へ続くく

その21

二十一

赤を中心にした配色の壁に囲まれた薄暗い廊下を、レミリアとパチュリーが進んでゆく。小窓からは外からの光がわずかに入り込んではいるが、窓ガラス表面に施された波のような細かい凹凸の加工によって散り、天井の周辺を薄く柔らかに照らすにとどまっている。

レミリアはふだんと違って、帽子からドレスや長靴下にいたるまで、すべて白で統一された服を着けている。ベールでもかぶっていない、結婚式に臨む花嫁かと思わせるような姿だ。

「それにしても、流れを変えたのがフラン自身だったとは思わなかったけど。おそらく、森でチビと会った件があのスキマおばさんを動かしたのね。これで霊夢を巻き込んでガタガタした日には何が起きるか分からないと思って手を打ってきたとか……まあ、それで結果としては良かったのかもしれない。彼は当分は神社にいることになるでしょうし、また機会はそのうち巡ってくる」

「じゃあ、あのロケットは……」

「そのまま持っていてもらえばいいわ。少なくともフランが彼に関心をもったのは確かだしね。何か一波乱あるだろうと踏んでいたんだけど……正直なところ、現状からの流れについては、どういいうわけがよく視えない感じなのよ」

「そう……」

「まあ、今夜は無事に過ぎてくれることを望むわ。幻想郷に来てから初めての冬至の満月だしね……どの程度の影響が周りになるかわからないし。準備はもうできているのね？」

レミリアの問いかけに、パチュリーは小さく頷く。

「必要なものはすべて配置してある。あとは起動させるだけ」

「封印の効果は強くしているんでしょね？」

「あまり強めになると、封印中に体力を削ぐことになる……でも、月の力と連動している術だから、魔力の状態に応じて自動的に強度を調整できる。いずれにしても、わたしもそばで見ているから」

「そう……悪いけど頼むわね。そう何度もあることじゃないから」

廊下の終わりでパチュリーが手にしていた燭台に火を灯し、ふたりはその先にある螺旋状の階段を降りてゆく。それを降り切ると、さきほどよりも狭い廊下となる。そしてその突き当たりにある扉の前に辿りつく。

レミリアは眼の前の黒塗りの頑丈そうな扉を見上げると、小さく息を吐いてから言った。

「咲夜、開けてくれる？」

扉が横に動き始め、重苦しい音を立てて空隙が開いてゆく。

咲夜が会釈をし、二人を迎え入れる。

円形の床と石壁に囲まれた薄暗い空間。壁はさらに上に向かって円筒状に伸びており、その終端近くに設けられた格子付きの小窓から洩れ出る光が、円錐のようにすばまった空間をわずかに照らしている。

真ん中あたりに二つ、石造りの椅子が置かれていた。どちらにもその表面には、修飾用の模様ではなく、文字と記号が複雑な配列を描いて刻まれている。その一方に、姉と同様の白い衣装を着けたフランが座っている。

「毎度お疲れ様です」

フランは微笑を浮かべる。

「お互い様にね」

とレミリアは応じ、もう一方の椅子に座る。

「ところでお姉さま、今回の封印の前にすこしお話したいことがあるんです。まだ日の入りまでに時間はありますよね？」

「……まあ、封印中も話ができないわけじゃないけど、いいわよ。咲夜、終わったら呼ぶから」

「はい」

咲夜とパチュリーは扉を開けて外に出て行く。

扉が閉まってから、フランは静かな口調で問いかける。

「実は例のお人形さんの件なんですけど……あれに対するこれまでの扱いについては、お姉さまとしては何かそれなりに目論見があったことなんですか？」

「目論見……そうねえ」

レミリアは特に表情を変えない。

「とりたてて目論見と言えるほどのことはないわよ。ただ、なんていうのかしら……彼はこれまでに出会ったことがないような存在だと感じているの。だから、それにわたしが関わることによって、なにか面白いことが起きるのじゃないかと思ったわけ」

「そうですか。ただ、どうなのでしょう……」

フランの眼つきが少し鋭さを増す。

「あの人がお姉さまのために残したロケットまで預けるっていうのは……いささか腑に落ちませんね」

「……気がついていたのね。まあ、あれはちょっとした実験よ」

「実験ですか」

「ええ。彼の正体を見極めるためのね」

「そうですか……まあ、それならそれでいいんですけど。ただ、

わたし自身はあの人形に宿っているモノはとても危険だと感じています。できれば、関わらないでおいたほうがいいように思いますけど……もう今さらという感じでしょかね」

「珍しいわね、あなたがそんな風に他人のことを言うなんて……」

「まあ不肖の妹がこんなことを言うのもなんですけれど、割とこの危険に関する勘ははずしたことがありますから」

「そうね。よく心に留めておくわ」

姉の穏やかな返事にフランはかすかに眉を寄せたが、それ以上は言葉を重ねなかった。

「……それじゃ、とりあえずこの件はいいわね？」

「ええ」

レミリアは咲夜とパチュリーを呼び、ふたりが扉を開いてふたたび入ってきた。

それでは、とパチュリーは姉妹にうなずきかけ、両手を自分の顔の前に広げると静かに呪文を唱え始めた。

二つの椅子は魔法円に囲まれ、彼女たちの身体を包むように薄白い輝きを帯びた封印障壁が形成されていった。

私と霊夢は里から少しはずれた場所にある慧音さんの家で、万一の事態に備えることになった。そして家の主である慧音さんは竹林の近くにある妹紅の住まいで待機し、様子を見るということで、二人はそちらへ向かった。

残った私たちは、ここで一晚過ごすために必要なものを確認した後、とりあえず座敷に落ち着いた。

「自由に使ってくれとは言われたけど……人の家だし、あまりあちこちいじるわけにもいかないわよね」

霊夢は囲炉裏の火を起こしながら言う。

「押入れもさつきちょっと見たけど、客用の蒲団とか勝手に出していいのかな」

「まあ、いいんじゃないのか。急に頼まれたんだし、多少のことは大目に見てくれるだろう」

私はあらためて座敷を見回す。この慧音さんの寺子屋を兼ねた家は以前に里の人が住んでいた空き家を譲り受けたということだが、たぶん元の持ち主はそれなりの財力の持ち主だったのではないかという気がする。この座敷も古びてはいるが柱も壁もしっかりとした造りだ。

「それにしても、レミリアの言っただけのことなんだか思わせぶりよねえ。結局何が起きるのかってことははっきりしないわけだし……」

『そうだな。いつもの彼女らしくないという感じではあるな』

「たくらみが何かあるっていうなら、それはそれでかまわないんだけどね。妖怪は気まぐれなものだし……でも、そういうのともちよつと違う気がする」

『……………』

と、ふいにドンドン、と雨戸を叩く音が聞こえてきた。何か人のような声も聞こえる。

障子を開けて雨戸の様子をうかがうと、「アリス、ここでいいんだよな?」とか言っている。

『その声は、もしかして魔理沙か?』

「おっ、チビがいた。やっぱりここなんだな」

雨戸越しに声が響く。

『無理に開けようとするな。玄関は東側にあるからそっちに回ってくれ、雪かきして通れるようになってるだろう』

「はいはい、分かったぜ」

雪を踏む足音が遠ざかってゆく。

「どつしたの?」

霊夢が不審そうな顔をする。

『客が来たらしい』

「お客？ 里の人？」

すると、玄関から声が聞こえてきた。

「勝手に入っちゃったぜー」「魔理沙、ちょっと待って」

廊下から足音が近づいてきて、座敷の入り口が開く。

「こちらにチビ先生はおいでですか？」

分厚いコートを着た魔理沙が満面の笑みで入ってくる。

『その呼び方はやめてくれって前も言っただろう……』

「人の嫌がることをしろって、昔よく言われたぜ。まあ冗談だ。神社に行ったらちようど行き違いでな、拝殿の書き置きを見たからここに来たんだ」

「でも魔理沙、あんた……」

霊夢がすこし口ごもる。

「ああ……まあここは里のはずれだしな」

魔理沙は苦笑いを浮かべる。

「それより、今夜はなんだかえらいことになってるらしいじゃないか？ もうどこの家も戸締りがきっちりだぜ」

後から入ってきたアリスが、魔理沙の言葉を引きとって言う。

「わたしが里で知り合いの人に少し話を聞いたんだけど、今夜は外に出るなっていう警告されてるんだってね。もしかしてそれと関係があるの？」

「ええ、そうよ。話せば長くなるけど」

霊夢は肩をすくめる。

「まあ、とりあえずふたりとも上着を脱いで。いまお茶を淹れるから」

「あ、そのまえにだな」

魔理沙が手を左右に振って言う。

「せっかくだから見て欲しいものがあるんだ。ちょっとだけ外に付き合ってくれ」

「外に？ いったいなんだ」

「まあ、たいしたことないけど、見ておかないと損って感じがするものだぜ」

いったい何なのだろう。霊夢と私は顔を見合わせたが、結局魔理沙に促されて外に出ることになった。

「アリスは知ってるのか？」

「いいえ、教えてくれないのよ」

「せっかくの驚きはみんなで共有しないとイケないぜ」

雪が積もった庭に出ると、魔理沙が東のほうの山の端を指さす。

「ちょうどうまぐあい雲が切れかけてるな……たぶん、あそこらへんだ」

「いったい、なんなのよ……」

霊夢が寒そうに手に息を吐きかける。

『何かあそこに見えるのか？』

「まあ、いいから黙って見てろって」

と、なにか奇妙な形の光が見えてきた。あれは、月……なのか？

おおきく欠けた月だ。しかも三日月よりもさらに細い感じがする……。

「ええっ！」

アリスが突然、声を出す。

「もしかして、今夜は月蝕なの？」

「その通り！」

魔理沙は得意げに言う。

「今日は冬至の満月で、しかも月の出から皆既月蝕が起きるという珍しい日だ。実に何百年か振りの現象なんだぜ！」

くその22へ続くく

その22

二十二

封印障壁に囲まれた椅子に座っていたレミリアが、突然苦悶の表情を浮かべた。

「ぐ……がつ……！」

と、見る間に頬が赤みを帯び、顔全体がさらに歪む。苦しげに震える左右の手が椅子のひじ掛けを掴む。と、つかんだ箇所から亀裂が走る。

「お、お姉さま？」

フランがレミリアの席に顔を向けるが、封印障壁のためにそれ以上の身動きがとれない。

「レミィ？」

パチュリーがすぐさまレミリアの前に駆け寄る。

「！……身体の状態がおかしい。レミィ、わたしが分かる？」

レミリアは顎をかくかくと震わせながら、うなずくような動きをすると、喉の奥から搾り出すように言った。

「あたま……が」

びしつと鈍い音がする。石の椅子にさらに亀裂が拡がった。

「う……ぐあつ」

レミリアの顔はさらに紅潮し、両腕も赤みを帯びてくる。身体全体が熱くなっているようだった。

突然、ドン、という音と共に椅子が粉々に碎け散った。同時に障壁も光の霧となって消滅する。

「……！」

とっさに後ろに飛びすさるパチュリーに飛び散る石の破片が襲いかかったその瞬間、彼女の身体は部屋の隅へと移動していた。

咲夜がパチュリーの身体をかばうようにして立っていた。

「……ありがとう」

「どついたしました。それより、これはいったいどういうことでしょうっ？」

「妹様の封印には異常がない……レミィ固有の要因かもしれない」

すると、椅子のあった位置にできた窪みに呆然とした表情でたずんでいたレミリアが、ふと顔を上げ、つぶやくように言う。

「いやぁ……実はたいしたことじゃないのよ、魔法使いさん」

「えっ」

パチュリーは驚いたように眼を見開き、咲夜の背後から顔をのぞかせてレミリアを見る。

「これはねえ、ここのところずっと冬至の満月のたんびに封印魔法なんかで力を抑えてたのがかえって仇になったのねえ」

一方、フランも仰天したような表情でレミリアを見つめている。

「……お姉さま？」

「だから、ちょっとしたきっかけでその反動が一気にきちゃうのよ。外部の条件の一部がひっくり返るとかでね……つまり、今夜みたいな月蝕とかね」

「月蝕……！」

パチュリーは衝撃を受けたような表情をする。

「だけど、月蝕はいままでに何度もあった……」

「だから、冬至の満月っていう条件で力を溜めちゃってたからよ。いつもの満月のときは力を抑えたりしなかったでしょ」

「……あなたは……いつたい」

「何者かって？ もちろん、レミリア・スカーレット本人よ。ただ

まあ、『言葉になつていなかったレミリア』とでもいえばいいのかしらね。わたしはけっこう現実から眼をそむけてたからねえ……そこへいくとフランは物事をきちんと正面から受けとめてるし、自分で適当にガス抜きもするし。わたしのほうが性格的にはよっぽどいびつな奴なのよ」

「あの……」

フランはどうしたらいいの、という表情でパチュリーたちを見る。

「さて、それじゃあひとつ走りして、あのお人形を霊夢から取り返してくるわ。とりあえずあれは貸してあるだけなんだからね……おっと?」

レミリアの右手がすつと上がり、手の周辺に光輪が現れ魔法円の形をとったかと思うと、一気に拡大してパチュリーの身体を取り囲み、蛇のように変形してその四肢を縛り上げた。

「な……何をするの」

「少しの間、ここに留まっていてくれればいいのよ。これはわたしだけの問題だからね……それにしても」

レミリアは妖艶な微笑を浮かべる。

「この運命の流れの中に、こういう形でわたし自身が組み込まれていたとは思わなかったわ……でもそれもまた必然ね。占い師が自身自身のことを占えないように、運命を視る者には自身の運命は視えない」

背中が広がる。

「レミィ……やめて」

パチュリーが顔を苦痛に歪めながら声を出す。

フランは呆然とした表情のまま姉を見つめている。

「ほんのひとときのあいだだけど、わたしは自由を得たわ。あとの始末はレミリア・スカーレットにお任せする、と伝えておいてちょうだい。変な話だけどね、それもわたし自身なんだから」

空気を圧迫するような金属音が響いた。同時に壁が震え始め、天井にまるで巨大な握りこぶしを強烈な力で押し当ててられているかのような凹みが広がったかと思うと、一気に瓦礫の塊となって吹き飛んだ。開いた大きな空隙の向こうには黒い夜空が現れた。

レミリアは軽く床を蹴って翼を羽ばたかせると、その黒い空隙を通り抜け、またたくまに飛び去って行った。

レミリアが紅魔館から飛び去るほんの少し前、咲夜はその能力を使い、時を止めて建物の外に出ていた。だがこの時止めの能力も空間的な限界がある。外部に連絡するなら、とりあえず門番の美鈴か……しかし、移動能力は咲夜自身と大きな差はないだろう。さりとて、メイド妖精では状況を正確に伝えられるものかどうか怪しい。

必死に考えをめぐらせるうちに、庭の茂みの陰に何か潜んでいるのが見えた。近づいてみると、それは以前見たことのある妖怪兎だった。そういえば、妖怪兎には確か特有の能力があるのではなかったか……？

おそらく、と咲夜は推測した。この兎は何らかの理由で紅魔館の様子をうかがっていたのだろう。とすれば、周辺に他の要員もいるかもしれないし、本拠地である永遠亭に連絡する手段もあるのかもしれない。

いまは一刻を争う。咲夜は決断し、時止めを解除した。

「わっ！」

妖怪兎のリーダー、因幡てゐは突然眼の前に現れた咲夜に驚き、飛びすさった。

「待って！」

咲夜は手を上げて言う。

「あなたにお願いがあるの」

その言葉とほとんど同時に、地面が震え、紅魔館の建物の一部が爆発するような音とともに吹き飛んだかと思うと、地面と壁にまたがって開いた穴から黒い影が恐ろしい勢いで飛び出し、空気を切り裂きながら上空へと駆け去っていった。

「な……なんなんだい、いったいあれは」

てゐはあちこちをうるたえたように見回す。

「いまのはうちのお嬢様よ。ただ、ふだんとは違う状態なの……」

咲夜は一瞬ためらったが、付け加えた。

「ちょっと気が狂ってるのよ」

「ええっ？」

てゐは怯えと呆れがいり混じったような表情を浮かべる。

「それは……かなりまずいんじゃないのかい」

「お嬢様は、巫女のところへ行くと思う。というか……目的はあのチビさんなんだけど」

「……！」

咲夜は冷静な口調で言葉を継ぐ。

「なんとか、先にあの人たちに知らせたいの。いまのお嬢様が正常じゃないこと、そして狙われているってことを」

「……分かった。そういうことなら任せな。うちの連中にいま連絡をとるから」

少し間があつてから、てゐは口を開いた。

「巫女は里の方にいる。例の獣人の家にいるらしい……うちのやつ

が近くににいるから、連絡させる」

「そう。ありがとう」

「いや……まあ、ついでだからいいんだけど。連絡できたかどうか報告が入るまでは少しかかるよ」

「その確認はいいわ。いまは時間がない……わたしは周りの状況を確かめてからお嬢様の後を追う。それじゃ」

咲夜の姿は一瞬でかき消える。

「……なかなか大変そうだね、ああいうのに仕えるってのも。まあこつちも似たようなもんか」

独りごちつつ、てゐも庭園の向こうに姿を消した。

空には赤黒い月が静かに昇りつつあった。

私たちが家の中に戻ろうとしたとき、いきなり庭先に現れた妖怪兎は、驚くようなことを言い始めた。

「レミリア……ふつつ、ちがう……狂ってる？……巫女と人形のところ……来る……分かる？」

てゐに似ているが姿は幼い感じの妖怪兎が一生懸命に言葉を繰り返す。

返す。何が起きたのかはまだ判然とはしないが、ただことではないのは確かだ。

「とにかく、レミリアがこちらに向かっているというなら、迎え撃つ形で行くしかないわ」

霊夢の口調はすこし緊張しているようだ。

「だけど、紅魔館で何が起きたのかも知っておかないと……魔理沙、アリスと一緒にしてくれる？」

「それはいいが、大丈夫か、その……二人だけで？」

心配そうな魔理沙の問いに、私は答える。

『逆に独りで紅魔館に行くのは危険だ。何が起きているのか分からないし、連絡に戻ってくるにも一方が残れるようにしておくのが常道だろう』

「……そうね。状況を把握するにはそのほうがいいわ」

アリスはうなずき、私たちの様子を心配そうに見つめていた妖怪兎に私たちの行動を短く説明した。兎が分かったというようにうなずいて姿を消す。

「じゃあ行きましょう、一刻を争うようだから。あ、それからあなたたちは北側の山沿いに行つて」

霊夢は二人に向かって言う。

「わたしたちは南寄りに行ってできるだけレミリアを引きつけるようにするわ。そうすれば、そっちには妖精が湧いたりしにくいと思うから」

「了解したぜ」

魔理沙は帽子をかぶり直す。

「じゃあ気をつけてな」

「そっちもね……行くわよ、チビ」

霊夢が私を抱き上げる。

「これまでの経緯がどうあれ、妖怪との戦いに容赦は無用よ。そこはきちんとけじめをつけてね」

『分かってる』

どういう事情なのかは知りたいが、まずは本人と相対してみなければ分からない。

霊夢は、私を抱いたまま空中に飛び上がり、一気に里から離れて魔法の森の上空へと向かった。

飛行の速さを上げながら霊夢が言う。

「場合によってはルールから外れた戦いになるかもしれない……でも、心配はしないで。そういう戦いもけっこうやってるからね。相手がたとえどれほどの力の持ち主でも、ただ力をぶつけ合うだけの

戦いはしない」

『私はどうすればいい?』

「とりあえず、影響を受けて飛び出してくる妖精のたぐいが来るから、そいつらの相手をお願い……ただ、レミリアの相手はわたしよ」

『……………』

「あなたはレミリアとは戦えないわ。それに、たぶんレミリアもあなたと戦うつもりはないでしょう」

霊夢は静かな口調で言う。

「どっちにしろ、そういう役目はわたしなのよ」

くその23へ続くく

その23

二十三

魔法の森の中央部を迂回し、北寄りの山に近い方のコースをたどって飛んでいた魔理沙とアリスは、左後方に小さな光の群れのようなものが現れたのに気づいた。

「あれはもしかして霊夢たちが、レミリアに遭ったのか？」

魔理沙が訊くと、アリスは小さく首を振る。

「いや……まだでしょう。たぶん、妖精たちとの前哨戦よ」

「露払いはチビがやってるのかな。怪我しなきゃいいが……」

二人はさらに霧の湖の縁に沿って回りこんでゆき、紅魔館の建物が見えるところまできた。

「なんだあれは」

建物の一部が崩れ、その近くの地面も吹き飛ばされたような穴が開いている。

「行ってみましょう」

二人は高度を下げ、建物が壊れている場所のすぐ近くで降り立つ

た。

「誰もいないのか……？」

周囲を見回しながら穴に近づいて行って、のぞきこむ。と、奥に人影が見えた。

「そこに誰がいるか？」

と魔理沙が問いかけると、「いますよ」と冷静な声で返事が聞こえた。

「……その声は」

魔理沙は穴から地下の部屋へと飛び降りる。アリスも続いてふわりと降り立ち、顔を上げたたん悲鳴に近い声を洩らした。

「パチュリー！」

アリスが悲鳴に近い声を出し、部屋の隅へと駆け寄る。

ぐったりとしているパチュリーの身体は蛇のようにうごめく力場の束によって壁際に固定されていた。

「どうしたの？　これはいったい誰が……」

すると、パチュリーは薄く眼を開いて答えた。

「大丈夫……これは、もうすこし時間が経つと自動的に解ける」

石の椅子に座ったまま封印障壁に囲まれているフランが無然とした面持ちで言う。

「こつちもけつこう悲惨な状況なんですけどね」

「……いつたい、何があつたんだ？」

魔理沙の問いに、フランは魔力を抑えるための時限式の封印魔法をかけていたこと、月の出とともにレミリアの人格が豹変し、封印を破り、逆にパチュリーを束縛する魔法をかけてから飛び出していたことを説明した。

「あのお人形を取り戻すと言ってましたよ」

「取り戻すって……いつたいどういう意味だ」

「まあ簡単に言えば、お姉さまもあなたと同じような理屈であのお人形さんに惹きつけられていたんでしょうね」

「同じような理屈ってなんだよ」

魔理沙は眉を寄せる。

「このあいだ言ったでしょ？ あのお人形さんは中身が空っぽだから、わたしたちはそこに自分が見たいものを見ちゃうんですよ。わたしやお姉さまだっていちおうは元人間ですからね、いろいろな意味で心の傷の一つや二つはあるんです。そういう傷が、幻想の足がかりになってしまうこともある。でもまあ……もしかすると」

フランは小さく溜息をつく。

「お姉さまのほうで、わたしよりは傷が深かったのかも知れませんか」

「……………」

「ま、それはともかく……今はこの封印をなんとかしてほしいんですね」

フランが自分を取り囲んでいる薄白く光る障壁を見回す。

「それは必要だからかけたんだろ」

魔理沙はそつけなく言う。

「でも、いまは非常の時ですよ。もし巫女が倒せなかった場合……今のお姉さまを止められる者が他にいますかねえ？」

するとパチュリーの体力を回復させるための作業をしていたアリスが言う。

「霊夢は幻想郷のパワーバランスの中心にいる存在よ。自然の復元力の代理人と言ってもいい……彼女の才能も幸運もそのためにあるんだと思う」

「なるほど」

フランはにやりとする。

「つまりあの巫女は幻想郷という仕組みの一部であり調整機構とい

うわけですね。しかし、その仕組みそのものから外れかねないような独自の意志を持ってしまったら、どうなりますかね。あるいは、巫女にとって特別な存在が何かできたとしたら？」

「……！」「まさか、お前……！」

アリスと魔理沙は動揺を隠せなかった。

雨あられ、とはまさにこういう状態のことを言うのだろう。

あらゆる方向から飛来する妖精たちを、私は五枚のお札を駆使してたたき落とし続けた。妖精たちには悪いが、まるで集まってくるハエを空中でハエたたきで落としているような感じだった。妖気の影響を受けた結果攻撃的になっているだけらしいが、ダメージが弱いと回復してリベンジを図ってくる連中もいるので、気の毒ではあったが二度と反撃できないぐらいのダメージを与えるように努めた。

「そろそろ来るわ」

後ろにいた霊夢が私のそばに近づいてきて言った。

「確実に安全なところまで下がって。ここから先はわたしの領分だから、今回は大人しく見ていてちょうだい。割り込みは不許可よ」

『分かった』

無縁塚の一件があるからだろう、しっかりと釘を刺された。

正直、レミィに何が起きたのか事情が気になったが、そこにこだわって霊夢の足手まといになっては本末転倒だ。

私は言われたとおり、霊夢の後方に下がる。

霊夢の姿がほとんど見えなくなりそうな位置まで来たところで、前方から強い気配が近づいてくるのを感じた。

どうやら、それらしき姿が見える。白っぽい点に見えるが……レミィのようだ。

『……………』

また、あの焦燥がくる。奥底から何かが浮き上がってきそうな。見ているだけ……見ているだけのこの状態。いつそ当事者でありたい。この想いを抱いたことは以前にもあったような気がする……。

霊夢とレミリアは、お互いの声がかろうじて届くぐらいの距離で魔法の森を見下ろす空中で対峙していた。東には赤黒い月。そしていくつもの雲の層が重なりあって上空を覆っている。

「いったい、何があったの？」

「まあ、説明すると長くなるからやめておくわ。簡単に言うと、チ

ビを返してもらおうと思って。あの人形は、いちおうわたしの持ち物だからね」

「口調とかはあんまり変わらない気がするわねえ……」

「あ、吸血鬼に多重人格なんてないわよ。ただ、おさえつけてたものが表に出るようになっただけ。酔っ払うと本音が出るとか言うじゃない……あれと似たようなものよ」

レミリアはくすくすと笑う。

「自分じゃあかなり好き勝手にやってきたつもりだったのに、その好き勝手が一種の演技だったなんて、お笑い草よね」

霊夢はふう、と息を吐く。

「……何にせよ、チビは物ではないし、ただの人形でもない。あの子には魂が宿っているし、自分の身の振り方を決める自由があるわ」

「もちろんそんなことは分かっているわよ。ただね、肝心な点はそこではないわ」

「じゃあどこよ」

「つまりね、あなたはチビを必要としている……けれど、果たしてチビはあなたを必要としているかしらね？」

「……！」

霊夢の眉間に一瞬深い縦皺が入った。

「図星ね？ でも、いちばん気になっているところでしょう。彼はあなたのことが必要だと、これまでに言ったことがある？」

「そんなことをあんたに説明しなけりやならない筋合いは、ない」

「わたしはね、あなたが彼に惹きつけられる理由は十二分に分かるわよ」

レミリアは微笑を浮かべて言う。

「あなたのような精神……それこそ神の魂とでもいうべき次元の精神の持ち主が、肉体をもつ異性に関心をもつなんてことはまずあり得ない。もしそうなたら、その瞬間にあなたは博麗の巫女ではなくなるわ。そこらへんの仕組みを全て知っているのは例のスキマおばさんでしょうけど、わたしにだって原理的なことは分かる」

「……………」

「けれど、あの人形に宿った奇妙な魂ならば、あなたのすぐ隣に立っていることができる。彼はいつもあなたのことを見守っていてくれる。そして、あなたは彼に語りかけることができる。理想の関係と言える……けれど」

レミリアは口を開き、笑い声をもらす。

「それはまずいのよ。それじゃ彼はあなたにとっての神様そのものじゃないの。博麗の巫女が神を得てしまったら、幻想郷は唯一神が支配する地になってしまう！ 人と妖怪、その他有象無象があなたという空白の中心を取り囲んで成立しているのがこの幻想郷なのに

……だから、運命がわたしにお鉢を回してきたのよ。すべてのバランスを復元させるために」

「……勝負の条件を言いなさい」

霊夢が厳しい顔つきで言うと、レミリアは笑顔のまま応じる。

「このわたしがわたしである期間はその月蝕が終わるまで。だから、その間持ちこたえたらあなたの勝ち。そして、あなたが二度と博麗の巫女として戦えないほどの恐怖を与えられたらわたしの勝ち。博麗の巫女でなくなったあなたに、あの人形は必要なくなるでしょう。そうなれば彼はわたしの所に戻ってこざるを得なくなる」

「つまり、そっちは殺す気で来るといふことね？ でも」

霊夢は決然とした口調で告げる。

「わたしは絶対にあんたを殺したりはしないけどね」

「それは当然でしょう」

レミリアはうなずく。

「あなたの神がそんなことを認めるわけがないもの」

くその24へ続くく

その24

二十四

突然、暗闇に光が花火のように拡がったかと思うと、上空の二箇所から輝く光の群れが噴き出し始めた。淡い光を帯びて曲線を描くように動くのはおそらく霊夢、そして輝く線を残像のように描きながら飛ぶ光弾はおそらくレミイのものだろう。打ち出される攻撃の源がめまぐるしく動きまわり、空間が乱雑にかき混ぜられているように見える。

と、ふいに誰かが私の近くに姿を現した。

「！……咲夜さん」

「始まってしまいましたね……」

沈痛な表情をした咲夜さんの横顔が、光の群れの明滅によって薄く照らし出される。

『いったい、レミイに何が起こったんですか？』

「それを話しに参りました」

咲夜さんはこれまで冬至の満月に魔力がピークに達するため周囲への影響と万が一の事故発生を考慮してパチュリーが時限式の封印魔法を姉妹に施していたこと、それが今日の月蝕と重なってしまっ

たために、予想外の現象として人格の変化のようなものが起きて、封印を自ら破り、今回の行動に至っていることを説明してくれた。

『でも、今のレミィの最終目的は何なんですか？ なぜ霊夢と戦っているんでしょう』

「それは……正直なところ、わたしにはよく分かりません」

咲夜さんは眼を伏せる。

「お嬢様がおっしゃっていたこともどう解釈していいのか判断しかねるところがあつて」

『咲夜さんの立場では、手出しできるような状況ではないでしょうね』

「立場はともかく、あの戦いの中に第三者が介入するのは技術的にも物理的にも難しいと思います」

『そうですか……』

このまま黙って見ているしかないのだろうか。

すさまじい数の大小の紅い光弾が打ち出されては群れをなし、次々に拡がっては霊夢の身体の側を高速で通りすぎてゆく。実際には、霊夢の身体は小刻みに、しかも必要最小限の動きだけを繰り返して

いる。

光弾を撃ち出す敵の姿はほとんどおぼろげにしか見えないが、弾が打ち出される中心ははっきりしている。霊夢の眼はその動きをつねにトレースし、それに合わせて身体の向きも変化している。ほとんど自動的といったいいその挙動は、霊夢の優れた動体視力と積み重ねられた認識パターン、そして天性の運動能力が一体となって機能している証左である。

だが、彼女の戦いの専門家としての真の根幹は、ジャイロのように安定した精神の均衡にある。それは恐怖を生み出さないための均衡といってもいい。

ただ、この激しい戦いの中で、彼女のこの均衡はごくわずかながらではあるが、齟齬を生み始めていた。

ひとときわ高速の光弾の群れが通り過ぎる。と、一瞬ではあるが、弾に対する反応がずれた。

「！」

かろうじてそのずれは次の瞬間に修正され、事無きを得る。だが、霊夢の意識の底、言葉になる直前の認識の層に、自分自身への戒めを示すサインがほんの一瞬、現れる。その間にも光弾の群れは撃ち出され続けている。

吸血鬼であるところのレミリアの体力は、特別な能力をもつてはいても所詮ヒトに過ぎない霊夢に較べれば桁違いに大きい。魔力が満ちていれば、再生能力も強靱だ。まともに殺し合いをしたら勝負にはなり得ない組み合わせなのである。

霊夢は赤い光弾の間隙を縫って霊氣を乗せたお札を弾丸のように撃ち込む。それは直線的のようできて敵の動きに合わせて追尾する動きを見せ、敵を捉えたかに見えたが、わずかにそれる。

ふいに、レミリアが霊夢に接近してくる挙動を見せた。こちらに向かってくる光弾の見かけ上の密度が急激に増える。一瞬、霊夢の中に後方に下がりたくなる衝動が生まれるが、反射的に抑える。

（おかしい）

短い言葉で、疑念が霊夢の脳裏に走る。

間合いを詰めるか否かは、そのときの一瞬の判断でしかない。だがそこに恐怖感が入り込んでしまうと正しい動きはできなくなってしまう。現に、衝動を抑えるという不自然なことをしてしまったために、間合いが近くなりすぎて意識的な再調整を余儀なくされ、動きがぎくしゃくしてしまった。

（まさか）

その疑念そのものが、すでに心の均衡の破れのあらわれであることを、霊夢は自覚出来ていなかった。

私と咲夜さんは森の中でも比較的高さのある大木の枝の上に立ち、戦いを見守っていた。

空中で交差する輝線の動きを眺めているうちに、霊夢が押されているな、と私は感じた。

それは弾幕による攻撃よりも、お互いの位置の取り方から読み取れる。霊夢は本来なら弾を回避しながら接近して近距離から有効なダメージを与えるとというやり方を得意としていたはずだ。だが、間合いを詰めるどころか、むしろ相手から詰められては回りこむように下がっているように見える。

このままではまずいのではないか……？

「チビさん！」

背後からの声に振り向くと、空中を飛行しているアリスが近づいてきていた。

『紅魔館に行ってきたのか？』

「ええ……あ」

一瞬アリスはそばに咲夜さんがいることにすこし驚いたようだったが、すぐに言葉を継いだ。

「魔理沙に霊夢たちがどういう状況か見てこいって言われたんだけど……いったいのぐらい続いているの？」

咲夜さんが懐中時計を取り出して言った。

「もう三十分近くは経っています」

「そんなに……！　それで決着がつかないなんて……　ちょっとおかしいんじゃない？　スペルカード戦なら、使うスペルの数が有限なんだから、出し尽くせば終わりになるはずよ」

『どういう取り決めになっているのか分からないしな』

「……もしかしたら、通常のルールでの戦いではないかもしれないかもしれまん」

咲夜さんが眉を寄せて考えこむような顔をする。

「なにしろ、わたしがこう言うのもなんですが、お嬢様もまともではないようなので……」

「それは問題ねえ」

誰もいない空間から聞き覚えのある声がした。

「こんな嫌な感じの晩に吸血鬼さんと戦おうっていうのもどうかしてるけど……　そもそも、ルールから外れた戦いを巫女自身がやるというのが間違いね。常軌を逸してるわ。何か、よほど頭に来る条件でも出されたのかしら？」

すると紫さんの全身が現れる。

咲夜さんが、少したじろいだような顔をする。

その反応に何かを感じ取ったのか、紫さんが問いかける。

「もしかして、メイド長さんは知ってることがあるんじゃない？」

「あ……あの」

咲夜さんが辛そうな顔をして私を見た。

するとアリスが、はっとしたように言う。

「もしかして、聞いてないの？ レミリアが飛び出していったときに、あの人形を取り戻しに行くって言ったらしいのよ」

『！』

じゃあ、あの戦いは……！

「いけないわよ、チビちゃん」

鋭い声だった。

紫さんの顔つきは厳しい、というより無表情に近かった。

「あの戦いはわたしたちの誰にも止められないし、介入もできない。戦いの理由がなんであろうとね」

『……ですが、間違った戦いだと先ほどおっしゃいました』

「ええ。でもね……時として間違いをただそうとすると、間違いに見えることがあるの。これは、言葉遊びではないのよ」

『……………』

「もうすこし辛抱してみてちょうだい。おそらく、最悪の事態にはならないはずよ……それとね、言わずもがなのことだけれど」

紫さんは眼で咲夜さんを示した。

「見守るのが辛いのは、あなただけではないのよ」

くその25へ続くく

その25→26（最終話）

二十五

大きな光弾の群れが波のように押し寄せ、霊夢は眼の前全体が光に包まれたかのような錯覚に陥る。ほとんど反射的に避けた群れが通り過ぎた後、一瞬の気の緩みを突くかのように、小さな弾の群れが襲いかかってくる。

霊夢の服はすでにあちこちが破れ、焦げていた。

どれぐらい戦い続けているのか、彼女自身には分からなかった。思考と言えるものはもはやない。感じとり、身体を動かす。その繰り返し。

だが、そのサイクルの中にふいに広がる恐怖があった。それが流れるようにつながるはずの動きを阻害する。いちどつまずくとそのつまずきは連鎖し、さらに尾を引いてしまう。

こんなことは、今までの戦いではほとんどなかった。

「怖くなんか、ない」

ほとんど無意識に小さな声を出す。

弾の密度が波のように動くのは、敵との距離が絶え間なく変化するからだ。心理的な揺さぶりという意味ではきつかった。

ふいに、光弾の中に翼をもつ身体のシルエットが浮かび上がる。

「そろそろ終わりかしら！」

笑い声のような言葉が耳に突き刺さる。同時に拡がる光芒。

霊夢の身体は、空中でバウンドするように何度も位置を変え、太い輝線の連射を避ける。

さらに襲いかかるランダムな光弾の群れを集中力を振り絞って避ける。

レミリアに間近に肉薄される場面が増えてきた。

弾のひとつひとつに威力があるだけに、至近で直撃を受けると致命的なダメージになるおそれがある。霊夢は弾の流れに沿って回り込み、なんとか距離をとる。

追い打ちをかけるように、ふたたび波のように攻め寄せてくる、弾の群れ。霊夢は横に移動し、ぎりぎりで逃れる。だが、回避に意識が集中し過ぎて、攻撃する余裕が生まれない。

もうだめなのか？ いや、負けない。負けられない。

ここで負けてしまったら、帰るところがなくなってしまう！

霊夢は、いままでの戦いの中で、自分が一度もそんなことを思ったことがなかったという事実さえ忘れていた。

ぎりぎりの精神状態。疲れは自覚しきれない状態に達していた。

そんな中、変化が起きた。

敵の位置が、奇妙な揺れかたをしたのだ。

「……？」

向かってくる光弾の群れが不規則な軌道を描くが、一瞬だけのことなのでなんとか避ける。

さらに続いてくるはずの光弾の射線がおかしな方向へとそれはじめた。

と、霊夢はいきなり横から衝撃を感じた。

「えっ？」

レミリアからの攻撃ほどの強力さはない。だが、数だけが多い。

この攻撃は、どうやらレミリアの方へも向かっているようで、そのためにレミリアからの攻撃が乱れているらしい。

霊夢はその乱雑な攻撃を回避しながら、いったい何が起きているのだろうと、薄くなりかけた思考を巡らせた。

『あれはいつたい何が……』

これまで動き回っていたふたりの戦いの輝線が不規則な乱れたものになってきた上、その全体が押し流されるように移動し始めていた。

「いま様子を見に行かせていた子から報告があったわ」

アリスが私を振り向いて言った。

「どうやら……森の妖精たちが二人を攻撃しているようね」

『よ……妖精が？』

戦っている者たちを攻撃するなんてことがあるのだろうか。

「ええ。それもかなり大群のようよ。ひとりひとりの妖精の力はたいたことがないけど、数が膨大だと、けっこう馬鹿にならないでしょう」

『……こういうのは、いいんですか？』

私が紫さんに問いかけると、彼女は首を小さくかしげながら微笑む。

「まあ、興奮した妖精なんて理屈が通じる相手じゃないし、そもそも妖精は自然の一部だし……どうしようもないわね」

いわば自然そのものの介入ということだろうか。

「南西の方へ向かっています。こちらでも移動しましょう」

咲夜さんの言葉に私たちはうなずき、今や妖精たちの群れに囲まれる形になっているらしい二人を追うことにした。

「ああもう、いったいなんなのよこれは！」

レミリアはほとんど乱射しているような形で、群がる妖精たちを片っ端から撃ち落とすが、新手が次々とやって来てはレミリアに向かって貧弱な攻撃を向ける。

一方、霊夢の方は周囲に対して積極的に攻撃はせずもっぱら回避に徹しているためにあまり攻撃を受けない。ただ、妖精たちの大群の圧迫によって、一定方向へと移動せざるを得ない。

魔法の森の上空から押し出されるような形で二人は西側の端まで移動してゆき、妖精たちに上から覆いかぶさられた状態になった。

ついにふたりは森の外の雪野原へと降り立つことになってしまった。

「……………」

霊夢はぼんやりとした状態のまま、なんとか立っているような状態だった。一方、レミリアも長時間の戦いでかなり体力を消耗していた。

そこでふいにレミリアは身体をびくりと震わせる。そして、妖精たちが覆っている空を見上げる。東の空に昇りかけている赤黒い月の縁が、か細い光を放ち始めていた。

「ああ……」

レミリアは雪の上に両膝をついて、つぶやく。

「時間切れ、か。これが世に言うところの、骨折り損というやつね」
すると、立ったままの霊夢が言った。

「骨は折ってないでしょ。たいした攻撃も受けてないだろうし……」

「そういう意味じゃあないんだけどね。まあ、勝負はあなたの勝ちということのようね。ここまで持ちこたえたんだもの、たいしたもののよ」

「いいえ、負けたわ」

「え？」

「わたしはたぶん、もう本来の意味での博麗霊夢じゃないのよ。それ以外の何か別の人間よ。あなたはそれを分からせるためにわたしと戦ったわけよ。だから骨折り損というわけではないと思うわ」

「……それじゃ、チビのことはどうするの？」

「わたしがどうするというより、彼がどうするという感じじゃない」

かしら？ 博麗霊夢じゃなくなったわたしを、必要とするかどうか
って……」

突然、少女の口から哄笑が響く。

「霊夢！ ちょっと！」

レミリアは少し慌てたような表情で叫ぶ。

「別に気が触れたわけじゃないわよ？ ただねえ、さすがにおかし
くなっちゃったのよ。わたしって実はどうしようもなく空っぽだっ
たんだ……って。こういうときには、もう笑うしかないでしょ？」

二十六

集まっていた妖精たちが、散り散りになりはじめていた。

その妖精たちとすれ違う形で進んでいくと、次第に明るくなって
きた月の光に照らされて、森のすぐ近くの雪に覆われた野原に二人
の人影が見えた。

間違いなく、霊夢とレミィだ。二人ともすでに戦っている状態で
はないようだった。

「おそらく皆既蝕が終わって月の光が戻り始めたところで終了、と
いうことみたいね……」

私のそばを飛んでいたアリスが言う。

『なんにしても、とりあえず二人とも無事で良かったよ』

だが、紫さんは無言で二人の姿を見つめている。何か気になることがあるのだろうか……。

今回は私は本当に何もできなかった。というより、起きた出来事の中身すら正確に把握出来ていない。だが、いまはそれよりも二人の状態のほうが心配だった。

アリスと咲夜さん、それに紫さんが次々に降り立つ。

月は少しづつだが明るさを取り戻し、白い雪野原を薄く照らし始めていた。その中にいる一方の影はレイミで、どうやら座り込んでしまっているらしい。いっぽう、霊夢の方は立ってはいるが、服がかなり破れていた。

『霊夢！』

私の呼びかけに、霊夢が顔を向ける。それは振り向くというよりも、ゆらりと頭を動かすという感じで、精気のない反応だった。

「チビ……」

目付きがひどく虚ろだった。

『大丈夫か、霊夢？ 怪我はないか』

眼の前に近づくと、霊夢は腕を伸ばして私を抱き寄せた。

突然、その両の瞳から涙が溢れ出てきた。

『霊夢、どうした!』

「ごめんね……チビ。わたしはね……わたしは」

歪んだ口から、嗚咽が洩れ出る。

「わたしはもうあなたから霊夢って呼んでもらえる博麗霊夢じゃないみたい……」

『な……何を言っているんだ?』

理解不能だった。驚きというより、ある種の危機を感じた。なにが強烈な心のダメージを負っているのではないか?

『しっかりしろ、霊夢!』

すると、背後から声がした。

「戦いの最中に、強い恐れを感じたのだそうよ……敵に対する怖れというよりも、自分を失ってしまう怖れ。自分が無くなってしまう怖れ。そんなことは今までなかったのですって」

振り返ると、レミィがやつれた面持ちで立っていた。その後ろには咲夜さんがいて、自分の上着を脱いで彼女の背中を包むように掛けていた。

「つまり、幻想郷の『空虚な中心』にふさわしい精神を失ったと……」

「それよりもチビ、あなたに訊きたいことがあるの」

霊夢がレミイの言葉をさえぎるように言う。

『なんだ？』

「わたしはたぶんもう博麗の巫女としての役目を果たせないと思う」

『さつきから何を言ってるんだ……』

「いいから最後まで聞いて。巫女ではないただの女の子になったとして、あなたはわたしを必要としてくれる？」

『……！』

これまでにない直截な言い方だ。

『霊夢、私は……』

「その先は言う必要はありませんよ」

突き刺すような口調で割り込まれた。もちろん、その声には聞き覚えがあった。

顔を上げて声の主を見る。そこには姉とそっくり同じ衣装をつけた、フランドールが立っていた。

白い月の光の下、純白の衣裳を着けて雪原にたたずむフ란の姿は、一種の神々しささえ感じさせる。

「フラン、あなたなんで……」

レミィがあえぐように言う。

「月蝕が終わってパチュリーの拘束が解けたので、封印をはずしてもらいました。ご無事のようにです」

フランはふたたび私に顔を向ける。

「あなたは、この幻想郷には本来必要のない存在です。したがって、あなたも幻想郷の誰かを必要とすることはないはずです。違いますか？」

『……そこまで明確に自分の存在を否定されたのは初めてだな』

しかし、腹が立つということはない。

と、フランの後ろから魔理沙の怒鳴り声が聞こえてきた。フランを追いかけてきたらしい。

「おい、フラン！　なんて言い草だよ！」

「子供は黙ってなさい」

ぴしりとフランが言う。

「な……」

身体を硬直させて二の句が継げずにいる魔理沙に、容赦のない追い打ちが加わる。

「わたしはこんななりですが、あなたの何十倍もの年月を生きています。その間に考えたこともたくさんあります。遊び半分で言葉を並べているわけではありません。引っ込んでいなさい！」

周りの空気が一気に張り詰める。私たちを囲む形で立っているアリス、咲夜さん、そして紫さんも一様に厳しい表情をしているが、動きはない。

霊夢は沈黙したままフランをじっと見つめている。

『……もしかすると、あなたなりに私のほんとうの正体突き止めたというところか？』

「突き止めたという言い方は語弊があると思います。しかし、少なくともあなたという存在の特徴、焦点にあたるものを以前よりも鮮明に感じ取っています」

フランは真剣な表情で言う。

「短い言葉で言うなら、あなたは『生きている死』です。自分がなというよりも、生きるために必要な死を、結晶化したかのような存在です。だからこそ、あなたは周りに生きるものを引きつける。周りの者たちは、自分を生かしてくれる者としての像をあなたの中に見るのです」

『……………』

「おそらく、あなたが人形という器に収まっているがゆえに、見過ごされていたのでしょう。しかしその人形からして、もともとは『人を生かすための死』としての意味を強く持つているのです。罪や災いを引き受けて厄落としに使われる人形はその典型です。さまざまな条件、近しい意味の重なり合いによって、あなたの存在は安定していた。けれども、結果としてあなたは同じ人形としての性質をもつ巫女、本来ならば大いなる虚ろであるべき巫女をも『生かして』しまった。したがって、巫女は巫女としての力を失うことになったのです」

『……なるほど。だが、私の性質が生きている死だというのなら、その実体は結局何なんだ？』

「それはね……実証するしかないですよ」

『実証？』

「そうです」

そう言つと、彼女は右手を軽く握った。

霊夢の胸元がかすかに震えた次の瞬間、チビ霊夢の首が雪の上に落ちた。

「えっ？」

それが誰の声かは分からなかった。

だが、その首が乾いた砂のように崩れ、みるみるうちに形を失うに及んで、アリスが悲鳴を上げた。

胴も脚も腕も、すべて砂のように粉碎された状態で、霊夢の腕の中から流れ落ちて行った。あとには人形が着ていた服だけが残った。

霊夢は動かなかった。そして、その周囲の空間に奇妙なゆらぎのようなものが現れはじめた。

「離れなさい！」

突然、紫の声が響く。

「そこからみんな離れなさい、早く！」

ほぼ同時に、大きな影の塊が飛ぶような速さでやってきたかと思うと、霊夢以外のその場の全員をなぎ倒すような勢いでまとめて抱え、その現象が起きている周辺から遠ざけた。雪まみれになって、一同は地面に投げ出された。

彼らを移動させたのは、八雲藍だった。

藍は身体を起こして後ろを振り返った。そのとき、空間のゆらぎがふっと消えた。その一瞬に、藍は青い小さな光を見たような気がした。

そして……。

ゆらぎの中心にいた霊夢の身体はゆっくりと、前のめりになって雪の上に倒れた。

「霊夢！」

起き上がった魔理沙が駆け寄り、霊夢を抱き起こす。だが、身体からは力が完全に抜けてしまっていた。

「霊夢、おいっ！」

頬を叩く。だが、反応はない。

魔理沙は心臓の位置に耳を当て、眼を見開く……。

「……停まってる」

さらに明るさを増した月の光が、身動きひとつしない一同の姿を静かに照らしていた。

（続く）

（東方傀儡異聞？に

その25〜26（最終話）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。ただ、大変申し訳ないのですが、いったんここで話を区切らせていただきます。

実はこの東方傀儡異聞？はいわば第三部の前半でして、100P程度の本にまとめる都合上、このような構成にせざるを得ませんでした。次巻においてすべての物語が完結する予定です。次巻は秋ぐらいが努力目標でしょうか……。

以下、今回の例大祭（5/8）で出すこの小説のオフセット本に記載したあとがきです。

あとがき

東方傀儡異聞？〜神坂越えて迎える面影〜をお買い上げいただき、ありがとうございます。

本作は東方傀儡異聞〜御霊宿りし巫女の器〜、東方傀儡異聞？〜想い映えたる不死の躰〜の続編にあたります。もしお読みになっていない場合には、奥付に記されている「東方イメージ研究所」のHPからウェブ版が読めますのでアクセスしてみてください。もちろん、オフセット本を入手していただければなお嬉しいですよ。

今回はいままでとは異なり、シリーズ全体のいわばターニングポイントを形成するような内容になっています。ストーリー性を重視した構成を目指しているので、結果として設定的にかなり飛躍というか冒険をしたところもあります。

言い換えると、作者の独自解釈が入り込んでいる部分が多くなっているということになります。このあたりは、二次創作的には意見が分かれるところではありましようが、読者の皆さんの率直なご意見・ご感想をいただければ幸いです。

今回初登場のキャラは何人かいるのですが、そのなかでも出番が多かったのは言うまでもなくレミリアの妹君のフランドールです。

いろいろな解釈をされているキャラクターではありますが、私はどちらかというとこの姉妹の性格というのは本質的なところではそれほど差がないのではないかという風に考えて書いてみた感じです。

二人とも五百年程度の歳月を生きているわけで、その時間の重みを想像するのはなかなか難しいです。ただ、思考のレベルという点ではいわゆる幻想郷の賢者たち（紫や永琳）にも匹敵するのではと個人的に思っています。

さて、次巻の東方傀儡異聞？にてこの物語は完結する予定になっています。いちおう初期の構想に沿った形で書いているのですが、途中でいろいろと作者自身が思ってもいなかった要素が見えてきたりして、それはそれでなかなか面白い現象ではあるのですが、シリウス寄りの路線であるがゆえにかなり重い感じの話になってきているのも確かです。

果たしてどんな結末を迎えるのか、私自身もまだ今の段階でははつきりとした答えは出ていませんが、なんとかうまい具合に着地出来ればなと思っています。

最後に、この偉大なる幻想郷世界を構築された上海アリス幻楽団のZUN氏に最大の敬意を捧げ、この一文を終わらせていただきます

す。

碓井央

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9893r/>

東方傀儡異聞3～神坂越えて迎る面影～

2011年4月20日10時51分発行